IS ～world braker～

山嵐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ　～ｗｏｒｌｄ　ｂｒａｋｅｒ～

【Ｎコード】
Ｎ１０７４Ｘ

【作者名】
山嵐

【あらすじ】
※『俺はどんなものでも受け止めきれる、めっちゃ広い心があるぜ！』
と、いう人以外は見ないでください…。
頑張って書いていこうと思います
よろしくお願いしますｍ（＿＿）ｍ

幼少時代、兵器として育てられた真宮　信　《まみや　しん》。
実験中に研究所から逃げだし、親切で優しい老夫婦にひろわれ、なんとか人並みに生活していた。

しかし、高校受験の日、女性しか動かせないはずのパワードスーツ、ＩＳ―インフィニット・ストラトス―に触れると、まるで自分の体のように動かせてしまう。
しかも、その日を境に予知夢を見始めるわ、育ての親が旅にでるわ、大変なことになる。
さらに強制的に高校はＩＳ学園。

『何で俺だけ…』

もう一人、自分と同じ場所で、同じように意図せずＩＳを動かしてしまった男がいるとも知らずに。

プロローグ（前書き）

宇宙規模の広〜い心で読んでくださいm（＿）m

プロローグ

体を震わして、
『寒い…』
そう思った。
少年は真っ白な小部屋にいた。
服は着ている。しかし、肌の露出が多いため、寒いと感じたのかもしれない。
だが実際はこの部屋は快適な温度に調節されている。
少年が寒いと思ったのは、体が震えたからである。
震える＝寒い
こういう等式が、少年の中で成り立っているのだ。
そもそも《部屋》ではなく、《箱》と言った方がイメージ的には正しい。
少年は、先ほどから熱心に　話し込んでいる自分の周りにいる人を観察し始めた。
といっても、話をしているのは2人だけで、あとの人はパソコンのキーボードを叩いたり、メモをとっている。
共通点はみんな同じ服を着ていることだ。
この場所と同じ色の。

「冗談は嫌いだ」

男の人だ。

「私だって同じよ」

今度は女の人。

「あり得ない。まずこんな実験から冗談みたいなものだったろ」

ジッケン？　なにそれ？

「そうね。でもここに、私たちの目の前に、成功例があるわ。それも予測以上の完成度で」

セイコー？カンセー？

「どうする？」

「決まってるじゃない。政府の方針どうりに、育てるのよ」

少年は首をかしげる。
それを見て女は笑顔で言った。

「兵器として」

少年に震えが走った。
兵器という単語の意味はわからない。
だが、わかったこともある。
震えるのは寒い時だけでは、ない――

プロローグ（後書き）

最後まで見ていただけて光栄です。

今後も時間の許す限り頑張っていこうとおもうので、よろしくお願いします。

1：やっぱり人間落ち着きが大事（前書き）

焦るな危険。

1：やっぱり人間落ち着きが大事

これからー、点呼をとるー。
鉛筆！…はい
消しゴム！…はい！！
定規！…はーい
よーしみんないるなー？…あれ？
受験票はどーしたー？
あっ、昨日の内にバックに入れてたんだった。

と、朝の点呼を終える。受験道具の。

俺は真宮信（まみやしん）。今日は受験当日です。
昔はいろいろあったけど、今は元気な健全日本男子。
そう今日は受験当日…いやいやいやいやいやいやいやや
緊張とか全然してないし、ただテンパってるだけだし。
とりあえず深呼吸して…スゥーはぁー
さて、早速会場にいくか。
遅刻はまずいからな。

「じゃ、いってきまーす！」

玄関のドアをあけて、気付く。
パジャマのままだった。

「はぁ…はぁ…じゅ、１０分前…ぎ、ギリギリ…」

会場までの道を全力ダッシュ。
幸い道に標識が出てて、道に迷うことはなかった。
会場について、自分の教室を探す。
しかし…

「どこのアトラクションだーーー！！」

会場内で迷った。

「迷路だろこれ…。」

はぁーやっぱり遅刻する運命なのかなぁ、と肩を落とす。
そう、運命。
そのいたずら。
会場の外にも、中にも、標識はあった。
しかし、焦っている少年の目には大きく書いてある進行方向の矢印の下の、矢印に比べれば小さな文字までは、映らなかった。

↓

―ＩＳ学園―

1：やっぱり人間落ち着きが大事（後書き）

もう謝罪の言葉しかありませんm（＿）m

どうか温かく見守ってください。

オリジナル主人公設定（前書き）

ちょくちょく付けたしとかするかもしれません

オリジナル主人公設定

真宮（まみや）　信（しん）

性別：男

特技：見たものを一瞬で記憶可能
　　人間嘘発見器
　　一度見た人の動きを再現可能
　　など…

専用機：瞬光（しゅんこう）

説明：
名前の通りわずかな時間だけ光速に近い速さがだせる。（但し、莫大なエネルギーが必要）
何もしなくても動きは速いが、エネルギー消費も早い。
背中だけでなく、両手両足にも小型スラスターが搭載され、３６０。あらゆる方向への複雑な動きを可能とする。
相手を翻弄しながらのヒット＆ａｍｐ；アウェイの戦術を用いた短期決戦を念頭に作られたらしいが、信が乗るとエネルギー量が理論上の四倍にはねあがり、様々な局面で長時間稼働が可能になる。
いつもはリミッターで力をおさえ、制御しやすくしている。

武器
朧火（おぼろび）
不定形で、展開途中のＩＳの粒子のように見えるが、
実はエネルギーの塊。信のイメージによって形が変わるので、状況

に応じて様々な形になる。
与えるダメージも、使うエネルギーも、とてつもない。

2：他人の名前なんて結局は日々の生活の中で覚える（前書き）

ね、眠い…。

2：他人の名前なんて結局は日々の生活の中で覚える

どうしてこうなった…。

俺《信》はめでたく高校に合格。
やった！とか、よっしゃー！とか思ったよ。
通知きたときは。
でもニコニコして封筒開けたら、難しい学校説明と、
ＩＳの写真が入ってて、前例がないとか、このままだと
混乱が予想されるとか、安全面を考慮してとか、いかにも
驚いて急いで作りました雰囲気の紙に長々かいてあって、
止めは『あなたをＩＳ学園に入学させます』
……え、強制ですか？
そこは『あなたのＩＳ学園入学を許可します』じゃないの？
とか俺が混乱してたら、制服届いた。サイズぴったりの。
そして一声。

「受験した覚えないんですけどぉぉーーーーー！！」

あの受験の日、係員と思われる人に

「あー、君。そこの君だよ」

とか呼び止められて、

「じゃー時間ないから」

と、ちょいちょいと指で示された機械―ＩＳとわかっていたが―に、おもむろに触れてみた。
眩しい光が部屋に満ちたと思うと、気付いたらＩＳが俺を包んでいた。
その後はよく覚えていない。
なんかみんな忙しそうだったのと、住所と名前聞かれて、帰されたということがかろうじて思い出されるくらい。

で、よくわかんないまま眠って起きたら通知と。
つーか志望してた高校も受験してねー、と気付いて結局ＩＳ学園に入学。
はぁー、男でＩＳって…　と思いに浸っている今日このごろ。
場所？教室だよ、女の子だらけの。
とかなんとか思っていると、自己紹介がはじまった。
あー、これで一年間のキャラ決まるんだよなー。
何言えば…。
と、ここで助けを求めるような視線が。
最前列のやつからだ。
あー、お前もか…。
ぐっ、と親指を立てて『気合い』と、アドバイス。
もちろん目線で。

「え、えーっと……織斑一夏（おりむらいちか）です」

実は俺以外にもう一人、男がいるのだ。
本当助かったよ、仲間がいて。
うんうん。

「……以上です！！」

ズコーーー！！
俺以外の女子のクラスメートがずっこける。
ギャグのセンスはないようだ。
と言うかギャグなのか？今の？
と考える間数秒、戸惑っている一夏に後ろから
バシッ！！

「自己紹介もまともにできんのか、お前は。」

強烈な打撃と辛辣な言葉がかかる。
おそらく先生なのだろう、黒いスーツがビシッとして
似合っている。
そして、本能的に気付く。
ああ、この人に逆らってはいけない……。

2：他人の名前なんて結局は日々の生活の中で覚える（後書き）

誤字脱字あるかもしれません。

読みにくくてすいませんｍ（＿＿）ｍ

3：余計なことは言わないほうがいいというのがこの世のきまり（前書き）

このごろそう思う機会が増えました↑何の話だ（笑）

3：余計なことは言わないほうがいいというのがこの世のきまり

「諸君、私が織斑千冬（おりむらちふゆ）だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言うことはよく聞き、理解しろ。出来ない者には出来るまで指導してやる。私の仕事は若干十五才を十六才までに鍛え抜くことだ。逆らってもいいが、私の言うことは聞けいいな」

凄い先生だな。
入学早々こんな挨拶かますなんて、なんと言うか、
怖いもの知らずって感じ？
まぁその通りだろう。
本当に怖いものなどないだろうから。
あまりテレビを見ない俺だが、この人は知っていた。
世界最強のＩＳ操縦者、織斑千冬。
正にその本人が目の前の教壇に立っているのだ。

「きゃーーーーー！」

（ウワッ、何だ？）
周りの女子が突然叫びだした。

「ずっとファンでした！」

「お姉さまに憧れてこの学校に来ました！」

「私、お姉さまのためなら死ねます！」

ワイワイ、キャピキャピ
下手なアイドルより人気なんじゃないか、これ。

「ち、千冬姉…どういう…」

バシッ！！

「学校では織斑先生と呼べ」

あちゃー、本日二度目。

（あれ？今あいつ…）

「え……？織斑くんって、あの千冬様の弟……？」

ザワザワ、ヒソヒソ…
どうやら俺と同じ結論に達した奴は少なからずいるらしい。

（つまり、織斑先生は、自己紹介から叩かれまくったもう一人の男（織斑一夏）の姉ってことか。）

……ん？

ふと、窓側を見ると、やけに冷めた目で一夏を見ている女子がいた。
髪は長く、髪型はポニーテールってやつだ。
そうえば、一夏もちらちらあいつを見てたような、そうでないような。

（知り合いか？あの子、結構美人だよなぁ）

キーンコーンカンコーン

チャイムが鳴った。

「さあ、ショートホームルームは終わり…おっと」

そこで先生が何かに気付いたように言葉をきる。

アレ？なんか嫌な予感。

「最後に　もう一人自己紹介してもらおう。皆も気になるところだと思うのでな。真宮！！」

一斉に視線が俺に集まる。

くそっ、うやむやになって終わる感じだったのに。

つーか皆こっち向いてるってことは、俺が真宮だって知ってるじゃん。

渋々立ち上がって、

「真宮（まみや）　信（しん）です。えーっと、時間がないので、とりあえずよろしくお願いします」

と当たり外れのない基本的な自己紹介をする。

「今年は二人、例外がいるが、仲良くするように。あと、私はどんなやつにも手は抜かないからな。各人、覚悟しろ」

織斑先生はそう言って、教室から出ていった。

はぁー、帰りたい…。

そう思った。

◇

「それにしても、凄いですよね、彼。」

口を開いたのは例外―男子―のいるクラスである一年一組の副担任、山田真耶（やまだ まや）。

「ん？真宮のことですか？」

応えたのは織斑千冬。一年一組の正担任だ。

ちなみに山田先生はさっきの時間ずっと教室にいた。

忘れてたとかそういうわけじゃない。

「あんな成績優秀な子、初めてですよ」

山田先生が続ける。

「学校のテストは常に満点、勉強だけでなくスポーツも万能だなんて…」

（おまけに背が高くて、けっこう格好いいし…。ハッ！い、いけません！先生が生徒にそんな感情持つなんて！）

「まぁ、送られて来た書類を見たときは私も驚いきましたよ」

千冬の声で、山田先生は自分の世界から帰還。

「で、でも織斑くんも格好いいですよね！？」

焦って声が震えてしまった。

「山田先生？」

「はい？」

「いつから容姿の話になったんですか？」

「……」

決まりの悪そうな山田先生をみて、ふぅー、と千冬はため息をつく。

「まぁ、私もあの二人を見て、確かにそう思いましたが」

「や、やっぱりそうですよねー。あっ、織斑先生、さりげなく織斑くんのことも誉めましたね！やっぱり弟さんですもんねー。は、ははっ……」

と、場を和ませようと何とか笑い顔を作るがひきつってしまう山田先生。

「……そうだ、先生」

「はい？」

「後で久しぶりに少しだけ、模擬戦をやろうか、６時間くらい」

ニヤリと笑って職員室のドアを開けながら、千冬は言った。

対する山田先生は、半泣きだった。

3：余計なことは言わないほうがいいというのがこの世のきまり（後書き）

原作キャラの特徴掴めてるか心配です…

４：人間誰しも凄い能力を持っている（前書き）

今回は信が才能を披露します

4：人間誰しも凄い能力を持っている

（ひーーーまーーーーー　だなーーー）

2時限目の授業中に空を見上げて思った。
そんな先生に失礼なことを思っているのは、俺《信》だけだろう。
勘違いしないで欲しいのは、先生は一生懸命授業してくれているということだ。
ちなみに授業してるのは山田先生。
初見の感想は、胸デカっ！だ。
そして、その様子を見ているのは、あの織斑先生。
ちなみにー夏は必死に授業についていこうとしている。
やっぱ男は大変だなー、俺も男だけど。
後で話しかけてみるか。
さっきの休み時間は、一夏と例のポニーテールの女の子が一緒にどっか行って、話しかけられなかったからな。
やっぱり知り合いだったらしい。
初対面の男子をいきなり連れ出す女子なんていないはずだからな。

「織斑くん、何か分からないところがありますか？」

優しく山田先生が問う。
まぁさっきから『？？？』ってオーラ全開だったからな。

「ほとんど全部わかりません！」

「え……。ぜ、全部ですか……？」

おいおい、それは……。
ちょっとひどくね？ほら、先生困ってんじゃん。

「……織斑、入学前の参考書は読んだか？」

「古い電話張と間違えて捨てました」

バシッ！！
さっすが、織斑先生。
容赦ないぜ。

「必読とかいてあっただろうが馬鹿者。おい、真宮！！」

「はっ、はい！？何でしょうかぁ！？」

驚いて変な声出た。
周りの女子が数人笑っている。
あ～恥ずかしい…。

「まさかお前も捨てましたなんて言わないだろうな」

ギロリ。
先生の目付きじゃないっすよ、それ。

「ま、まさか～、ご冗談を」

へらへら。

「では、なぜ教科書がないんだ？正直に言えば、こいつの参考書と一緒に再発行してやる」

と一夏を見て言う織斑先生。
そう、指摘された通り、俺の机の上には教科書が乗っていない。
うーん、あの出席簿アタックを食らうよりは…

「正直に言えば、いいんですね…？」

ゴクリ。
クラスメートが唾をのむ音が聞こえた気がした。

「重かったので、」

スタスタスタ。
先生が近寄ってくる。

「わぁ！ストップ！！待ってください！最後まで聞いて！！」

ピタッ。あぶねー…。
先生はすでに目の前に来ている。

「ふぅー…。まったく、手の方が早いなんて…」

「何か言ったか？」

「言ってない、言ってない！！じゃねーや、いや、言ってません！！」

「なら早く理由を言え」

はぁー、初日から目立ちたくなかったんだけどなぁー。

仕方ない。

「重かったので、覚えてきました」

◇

……は？

発言者以外の教室中のみんな　―山田先生と千冬姉も含め―　が頭上に『？』となって、固まった。

『覚えてきた』？

さすがにその嘘は、ばれるだろ…。

俺《一夏》はとんでもないことをいい放った真宮を茫然と見ていた。

すらっと背が高く、立つと目立つその少年は『やっぱり…』という顔で周りを見ている。

「本当か？」

千冬姉が聞く。

声には疑いよりも、驚きの方が多く含まれている。

まるで、『知ってはいたが、ここまでとは…』って感じだ。

「え？えぇ…ま、まぁ…」

長身の真宮は戸惑いつつ答える。

「……」

千冬姉は無言で黒板の前に立つと、色々操作して、これまで出てい

た設計図（もちろん、ＩＳの）を消すと、新たに長々とした文章を出した。

「えっ、先生それは…」

山田先生が驚きの表情を見せる。

「いや、試すにはこれくらいがちょうどいい」

そう言って、千冬姉は

「真宮。これはなんだ？」

と、真宮に聞いた。

「え？な、なにって…アラスカ条約の全文…ですか？」

「そうだ。これは教科書の何ページに載っている？答えろ」

いやいや、千冬姉それは…

「１３８ページ２４行目から、１４６ページ３８行目までです」

「そうだ」

周りで教科書を必死でめくりまくる音が聞こえた。

急いで俺もめくりまくる。

……本当だ…行数までぴったり。

「では、参考書では何ページだ？」

「２５７ページ６２行目から２８１ページ３０行目までです」

参考書までわざわざ持ってきた、近くの女子が急いでページを探す。

「あ、あってる…」

小さな呟きだったが、今の静まり返った教室には、十分すぎる大きさだった。

「教科書で都合上省いた条約の説明があるが、参考書ではそれが何ページに書いてある？」

「２５９ページ１１行目から５１行目の第２１条です。内容は『ＩＳコアの無断制作の禁止とその理由』で、教科書の１４６ページ端の注釈になぜ省いたか、理由の説明がかいてあります。２行だけ」

俺は教科書をめくり、注釈を探した。

…あった。

と同時に真宮が読み上げる。

教科書があるかのように、すらすらと、迷いもなく。

「『現在、コアを作れるのは束博士のみのため、この項目はあまり束縛力がない。』」

「全て正解だ。解答も私が考えていたレベルより高い。だが、明日からは教科書を持ってこい。お前が学生である以上、授業はしっかり受けなければならんからな」

「はい。すいませんでした」

静かに真宮が座る。
その時、目があった。
フッ、と真宮が笑って答える。
その笑いからは、得意になっている気持ちなど微塵も感じられず、
慣れと、疲れと、罪悪感が入り交じっていた――

４：人間誰しも凄い能力を持っている（後書き）

テスト前にこの才能がほしいなあっ…

5：意外と心配ごとほど上手くいく（前書き）

取り越し苦労って多いですよね

5：意外と心配ごとほど上手くいく

見たものを一瞬で記憶。そして、忘れない。

俺《信》はこの才能が嫌いではなかったが、かといって、好きでもなかった。

役に立つときはこれまで多々あった。

しかし、こうして人前で使うと、必ず今のような状況になるのだ。

（今回もやっぱり孤立すんのかなぁ…）

と、再開した授業そっちのけで、思いにふける。

『ねぇ…あの人？噂の化け物って…』

『少しぐらい頭いいからってなぁ、調子に乗んな！』

『ん…ああ、またお前か…どうした？また先生の教えたことの間違いを見つけて来たのか？よくも毎度毎度飽きずに…。はぁー、こっちだって好きで間違えてんじゃねーのによぉ…』

恐れ、妬み、絶望…俺という人間を知ったやつはだいたいそういう感情を抱く。

そんな人を見て、俺が抱く感情はただ一つ。

申し訳ない、という気持ちだ。

周りの人達の人生をねじ曲げるような力があって、申し訳ない。

みんなをそんな顔にして、申し訳ない。

だが、この気持ちさえ、誰かを傷つける。

『なにそれ？イヤミ？』

『お前のそういうとこが嫌いなんだ！！』

そんな言葉を浴びせられて、最終的に出す結論は

『俺は、他人を幸せに、出来ない』

キーンコーンカンコーン

終了を告げるチャイムが鳴る。

終わるのは、授業だけではないような気がしたが。

先生への挨拶が終わると同時に、ダッ！！と誰かが俺に駆け寄る。

織斑一夏だ。

さっきまでは仲良くしていこうと考えていた、俺以外にここ、ＩＳ学園にいる唯一の男。

だが、もう無理だろう。

何せ――――

「お前、スゲーな！！！！！！！」

――は？

キョトンとしている俺に構わず、一夏は話続ける。

「どんなことしてあんなめちゃくちゃ長くて難しいこと覚えたんだ！？もうなんつーか…スゲーよ、お前！！！！！！！」

「い、いや、これは才能で…」

勢いに気圧されていると、

「さ、才能ですって！？」

「な！！なんと！！」

「天才!?天才なのね!!」

「よっ、歩く百科事典!!」

周りの女子まで話題に入って来た。

「どうしたの?」

「実はね、…かくかくしかじか」

「えー!!本当に!?」

あぁ他のクラスのやつにまで話を広げている…。
そんな中、

「あっ、自己紹介、聞いてたと思うけど、俺、織斑一夏(おりむらいちか)っていうんだ。よろしく!」

と、右手を差し出される。
握手のようだ。

「あっ、ああ。真宮(まみや)　信(しん)だ。こちらこそよろしく頼む」

こちらも右手を出し、互いに手を握る。

「「「「キャアアアーーーー!!」」」」

「イケメン!!イケメンが二人!!」

「凄い、凄いわ！！」

「写真撮らせて！」

「わっ、私と付き合ってーーーーー！！」

いや、いきなりすぎるだろ、最後の人。

「……ぷはっ」

なんだかさっきまで深く考えすぎてた自分が馬鹿みたいで、思わず笑みがこぼれる。

「わっ、笑った顔も…」

「「「「「イケメーーン…！」」」」」

ノリが良さそうな女子が動きまで合わせて言っている。

みんな息ぴったりだな。

気付くと、俺の机を中心に、大勢が集まっていた。

みんな、仲良いな。

本当に今日あったばかりか？

「ぷはっ、あははははっ！ご、ごめん、みんな。さっきは驚かして。改めて、これからよろしく！」

元気よく、俺の周りの人に叫ぶ。

「「「「「「こちらこそよろしく！！！！！！！！」」」」」」

本当、息ぴったりだ。

「ちょっと、よろしくて？」

うん？誰だ？

声の方向をみると、正に『Ｔｈｅ　いいとこの生まれ』みたいな雰囲気のロールがかった金髪の女の子が立っていた。

「わたくしのことはご存知ですわね、そこのお二方？」

「「…」」

チラッ、チラッ。

一夏とアイコンタクト。

「「？」」

「な、なんですの！？その、あからさまに『知らない』アピールは！本来なら、わたくしに話かけられるなんてそれだけで光栄なのですから、それ相応の態度というものがあるんではないかしら？」

「いや、自己紹介途中で終わったし…」

「そう。だから、悪いな。俺たち、君が誰だか知らない」

と、俺、一夏の順。

「ほ、本当にわたくしを知らない？この、セシリア・オルコットを！？イギリス代表候補生にして、入試主席の、このわたくしを！？」

「あぁセシリアっていうんだ。よろしく」

と、右手を出す。

ところが、

「『セシリア』！！あなたがわたくしを名前で呼ぶなんて、思い上がりも甚だしいですわ！」

あれ、そっぽを向かれた。

なんだよー。仲良くしようぜ？

ちなみに、俺の『孤立するかも』っていうネガティブな考えは、周りの皆に払拭されていた。

みんな仲良く出来そうな人達ばかりだ。

『この人達なら大丈夫。上手くやっていける』

今はそんな気持ちだった。

「あー、質問いい？」

一夏が口を開く。

「ふん。よろしくてよ？答えてさしあげますわ」

「代表候補生って、何？」

ズコーーーー！！

女子がずっこける。

おおっ、またか。

俺は呆れるよりも、ここまで知らずに入学してきた一夏に驚いてい

た。

「し、信じられない。信じられませんわ！常識でしてよ！！じ・ょ・う・し・き！！よろしいですか、代表候補生というのは…」

ペラペラ、ペラペラ、うんぬん、かんぬん。

（なっ、なぁ…）

一夏が俺に助けを求める。

（ん？ああ、よーするに、『エリート』ってやつだよ）

見事に要点だけ伝える俺。

「…でしてよ。お分かりになりまして？あなた方は幸運なのでしてよ？」

「そうか。ラッキーだ。ありがとう、えっと、代表候補生の……人」

「あっ、あなたねぇ…」

ヤバい。

つーか名前ぐらい覚えてやれよ。

ここで俺が割って入る。

これ以上話をこじらせてはいけない。

「一夏もなんとなーくわかったみたいだから、な？本当丁寧な説明、ありがとう。セシ…オルコットさん」

どうだ？

「ま、まぁ今回は許してさしあげますわ」

プイッと踵を返して、セシ…オルコットさんは自分の席に帰った。

（よし、よかった…）

ほっと胸を撫で下ろす、信であった。

この時、誰も気付かなかった。

信の『ありがとう』に、少し動揺して赤くなった、イギリスの代表候補生に。

５：意外と心配ごとほど上手くいく（後書き）

本当、ＩＳの世界をぶっ壊してます
ごめんなさいｍ（＿＿）ｍ

6：拒否権って拒否できますか　（前書き）

つーか使い所がわかりません。

6：拒否権って拒否できますか

「話はすんだか？」

こ、この声は…

「ち、ちふ―」

バシッ！！

…一夏はまず、『学習すること』を学ぶべきだな。

「まったく…。チャイムがなったら席につけ。すぐつけ。いいな？」

織斑先生はやれやれ、という顔で教壇に立つ。

白熱した議論（セシ…オルコットさん一人だけだったが）のあいだにチャイムが鳴っていたらしい。

どうやら織斑先生は今回だけ見逃してくれたようだ。

「それでは、この時間は各種実践武器について説明を行う」

先ほどまでとは違い、織斑先生自信に教えていただけるようだ。

拝んどこうかな。南無、南無。

「ああ、その前に再来週のクラス対抗戦に出る、代表をきめないとな。まぁ、クラス長だな。ちなみに一年間固定だ」

再来週！？

ずいぶんと急だな。

ざわざわと教室が騒がしくなる。

「はいっ！真宮君がいいと思います！」

「私も！」

「私も！」

「じゃあ、私も！」

「「どうぞ、どうぞ」」

まぁ、やると思ったけどね。

なんてのんきにしてる場合じゃない！

「いや、俺は嫌ですよ！？」

「他薦された者に拒否権はない」

そ、そんな…。

職権乱用だー！

「じゃあ、一夏くんがいいです！」

「わたしもー！」

「おっ、俺！？」

他薦の魔の手は一夏にまで…。

わーわーぎゃーぎゃー

バンッ！！

「冗談はそこまでですわ！！」

机を叩いて、セシ…オルコットさんが立ち上がる。

「男が代表なんていい恥さらしですわ！」

ムカッ。

さすがにそれは言い過ぎじゃないか？

「代表とは、実力のあるトップがなるべきで…」

ペラペラ、ペラペラ、うんぬん、かんぬん

イラッ。

さすがに腹が立ってきた。

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたしくしにとっては耐え難い苦痛で――」

「イギリスだって大してお国自慢ないだろ。世界一不味い料理で何年覇者だよ」

あ。

俺よりも先に一夏が切れたか。

「あっ、あなた、わたくしの祖国を侮辱しますの！？先ほどの態度

といい、もう我慢できませんわ！！決闘ですわ！」

へっ？

いやいや決闘ってのはさすがに…。

「おう、いいぜ」

いいのかよ！

「おい二人とも！落ち着けって！」

俺がまた割って入る。

「あなたも！」

えっ、俺？

「この際ついでですわ！あなたにも私が勝つのですから、確実な実力が示せるというもの！」

カッチーン！！

ついでで指名されて、その上俺が負けること前提！？

あったまきた！

「そこまでいうなら、やってやるよ！その代わり、負けたら何でも俺の言うことをきけよ！」

と、俺も話に乗ってしまう。

「もちろん、いいですわよ。わたくしが初心者風情に負けるなんて

あり得ませんわ！」

俺とセシリア、一夏とセシリアのあいだで、激しい火花が散った。

「さて、話はまとまったな。試合の形式は勝ち抜き、一週間後の月、火に行う。３人は準備しておけ。順序は…そうだな、まずは織斑とオルコットだ。場所は第３アリーナだ。いいな？」

「「「はい！」」」

何か先生楽しそうだな。

こっちは頭が痛いっすよ、ホント…。

◇

「織斑先生、何か考えでもあるんですか？」

「いや、何もない」

ええぇぇーーー…と心の中で突っ込む。

山田真耶と織斑千冬は職員室までの道のりを歩いていた。

「だって、事実上、真宮くんがシード扱いじゃないですか？普通一番強い、オルコットさんがシードではないんですか？」

「普通はそう考えるのが妥当だが、勝ち抜きというものは、勝者が疲労していく状況でどれだけ戦えるかをはかるためだ。オルコットは代表候補生だ。本人もその自覚があって、実力を示したがってい

たからな」

（つまり、不利な状況でも勝てる人が本当に強い、と言うこと？）

真耶は自分なりに納得した。

「あと、先生」

「はい、なんでしょうか？」

「オルコットは一番強い『かもしれない』んですよ」

◇

「あー…先が思いやられるな…」

「初日からこうじゃな…」

ならんで歩く、二人の男子。

後ろには女子の大群。

俺《一夏》は学校の授業を終え、なんとか帰路―ＩＳ学園にある寮までの道―についていた。

その間、セシリア（やっと覚えた）との対戦をどうか考えていた。

「そーいやさー」

ふいに、隣にいる信が俺に質問する。

「窓際のポニーテールの女の子？あれって、一夏の知り合い？ホラ、休み時間に―」

「ああ、箒のことか。あいつは俺の幼なじみ」

「へー」

本当に興味あったのか？ってくらい、あっさりした返事。

「青春だね～」

？なに言ってんだ？

「まあ、それはさておき…どうする？」

今度は俺から信に質問。

もちろん、セシリアとの対戦についてだ。

「うーん…。どうする？」

質問に質問で返すなよ…。

「ま、一夏は先ず基礎知識からだな。何も知らずに戦うのはキツイだろ」

「だよなぁ…」

「俺は……どうしよう、ホント…」

ハァー。

二人揃って腹の奥底から深いため息。

結局、部屋に着くまで具体的な特訓方法や解決方法、勉強方法など、役立つアイディアは出なかった。

「じゃ、俺ここみたいだから」

「おう」

と、信は鍵をあけて、部屋のなかに入っていった。

「俺は…ここか」

なんだ、信はお隣さんじゃないか。
これは心強い。
困ったら助けてもらおう。
ガチャ。
部屋に入る。

まさか今日からいきなり助けが必要になるとは思わずに――

6：拒否権って拒否できますか　（後書き）

いかがでしたか？

次回も頑張ります。

7：羨ましい状況にいるやつはその羨ましさに気付かない　（前書き）

信も一夏も、ズリーよ！

7：羨ましい状況にいるやつはその羨ましさに気付かない

『お前、スゲーな！！』

あの一言でどれだけ周りの空気が変わったことか。
あれがなきゃ、また一人だったろう。
俺《信》はベッドに横たわって、今日という人生最大の受難の日を振り返っていた。

（あいつに、恩返ししなきゃな…）

織斑一夏。
本当に凄いのは、あいつだ。
一瞬で周りの人と打ち解けた。
『こいつはいいやつだ』と、他人が無意識に認識するのだろう。
そういう雰囲気があり、実際、いいやつだ。
それに……。
ハハッ、と笑い声を上げる。
今日だけで１０人以上女を落としてた。
もちろん、恋ってやつに。
特に、あのポニーテールの…箒（ほうき）？だっけ？
あの女子は、他よりずば抜けてあいつに惚れてる。
幼なじみだって聞いたとき、ああー、としか思えなかったよ。
納得しすぎて。
そりゃー惚れるわ。

俺の才能はこういうとこにも働く。
目で見たものは、忘れない。

だから、少しの変化も見逃さない。
膨大な記憶の中から、似たような記憶を探し、どういうときに、どういう行動をとるか、結論を導き出せる。
それに、行動から気持ちを察することもできるし、気持ちから行動を察することもできる。
もちろん、その他にも、場所、雰囲気、気温、湿度、等々、そんな気にするか？ってくらい細かい情報から結論を導き出すことも可能だ。
まぁ、要するに、そうだな、うーん…
難しいところだが、『名探偵』ってこと？
違うかぁー！

なんて、下らないギャグを才能の説明に入れよう思えるのも、一夏を初め、クラスのみんなの温かい心のおかげだからな。

（今までさんざん、人に暗い顔ばっかりさせてきたんだ。そろそろ、人を幸せにしなきゃな。過去に囚われずに。人を幸せにするためにどうするか……。よしっ、決めた！目標は『困っている人を助ける』だ！！）

と、一人ガッツポーズして、決意を固める。

（さて、シャワーでも浴びるか）

ちなみに俺は一人部屋。
一夏はどうかわかんないけど。
ん？まてよ…？
ふと気付く。

（一人部屋以外だと、相部屋…。あいつが相部屋だと、女子と一緒

!?う、羨まし過ぎるーーーー!!い、いや、いやいや、待て、待て。さすがにこの年の男女が、相部屋なんて…そこは学園側も考慮して…。いや、だがしかし、可能性はある…。いやー、しかし…）

どんなに凄い才能を持っていても、信は健全な一五才の男。
女の子―しかもＩＳ学園の子はかなりレベルが高い―と相部屋になれば、非常にうれしい限りなのである。
もちろん、いきなり襲いかかるなんて、非道徳な真似は絶対しないが。

（あーっ！もう考えるのが面倒だ！さっさと汗流そう）

◇一方その頃、一夏は？

「ほ、ほ、箒」

まさに信が羨ましいと思うような光景を目の当たりにしていた。
なにせ、バスタオル一枚で前だけ隠した、幼なじみが、シャワーを終えて出てきたのだから。

◇

＼うおおっ／

ん？何だ？
今、叫び声が聞こえたような…

／ざわざわ／

なんか、廊下が騒がしいな。

／ドンドン！／

ドアを叩く音。
誰だ一体…。

「うーい」

ガチャ、ドタッ

「わっ！」

一夏がいきなり俺《信》の部屋に転がり込んできた。
文字通り。

「たっ助けて…」

ドアノブに手をかけたまま、唖然とする。

「ほうした？いひか？（どうした？一夏？）」

ちなみに俺は今、歯を磨いている途中だったので、歯ブラシをくわえている。

そのため、喋りずらい。

「隣に逃げ込んだわ！」

「みんな、こっちよ！」

「黙って私に、ついてこーい！！」

どこから湧いたのか、女子が突然俺の前に現れた。
それも、一人二人じゃなくて、数十人も。
そして、ドアの前の俺を見る。

「えっ、えっ、えーーーーー！！！！」

「ま、まま、真宮くん！？な、何！？そ、その格好！？」

？

何焦ってんだ？
この女の子たち。

「はひって、はんふだけほ？（何って、パンツだけど？）」

ポリポリと頭をかきながら、事実を述べた。
さっきシャワー浴び終わったばっかりだから、とりあえず下半身の必要最低限の装備品だけつけて、あとは何も身に付けていない。
非常に聞き取りづらい言葉になったと思ったが、通じたらしい。

「は、破廉恥なっ！」

「だ、ダメだよ！そんな格好！」

「そ、そうだよ！反則だよ！」

「そういう格好は私だけに見せて！！」

「ぬ、抜け駆けは許さないわ！」

おい、後半のやつ、なに言ってんだ？
口々に不平不満（？）をいいながら、みんな大体ポーズは同じ。
両手で顔を覆いながら、目だけは覆わないようにしている。
それ、意味なくね？
ここで仕方なく、歯磨きを中止して、

「だって、この格好、海パンと同じじゃないか？」

と、俺の意見を言うと、

「「「「「違ーう！！」」」」」

全員一致かよ。

「わかった、わかった。今度から気を付けるよ」

渋々了解して、女子を追い払った。
少し残念そうな顔をしている人もいた気がするが、気のせいか。

「まったく…一体どうしたって言うんだ？」

静かになったところで、一夏に問う。

今度はちゃんと服を着ている。
動き易い服装、いわゆるジャージ姿だ。黒に黄色のラインが入っている。

「いや、それが…」

かくかく、しかじか

「…」

「と、いうわけだ」

「お前…ズルいな」

「はぁ!?何が!」

ハァー、こいつ、鈍すぎる…。
好きでもない男にそんな姿みせて、『みっ、見るな!!』なんて言うセリフ、女の子がいうわけないだろ。
叫び出すのが普通、のはずだ。

「もーなんかさぁ、ノロケにしか聞こえない。いいなぁー、幼なじみかぁー、俺も欲しいなぁ!」

「何言ってんだ!?危うく殺されかけたんだぞ!?」

ハァー。
でもまぁ、微笑ましい限りだ。
仲がいいってのは。

「わかったよ。もし、お前が本当に困ったときは、俺に言え。必ずお前を助ける」

と、握った右手の拳を前につき出す。

「?あ、ああ!よろしく頼む!!」

一夏も同じように拳をつき出し、コンッ、と互いの拳と拳をあわせる。

「で、さっそくなんだが、どうやって部屋に戻ればいいかな?」

「心配すんな。おーい、入っていいぞー」

俺は扉に向かって話しかける。

外に誰かいて、聞き耳立ててるのは、最初から気付いてた。

ドキッ!!と扉の向こうから聞こえた気がした。

ガチャ

「…一夏、帰るぞ」

「ほ、箒…」

「じゃ、また明日な。お休み。あっ、箒…さん?もおやすみ」

と、むすっとした顔の、剣道着を着て、片手に竹刀を持っている女の子に、挨拶する。

「ああ。同室のものが迷惑をかけた。すまない。いくぞ、一夏。では」

と言って、さっさと一夏と二人、行ってしまった。
再び静かになった部屋で、

「やっぱズリーぞ、一夏！」

そう、呟いたのだった。

7：羨ましい状況にいるやつはその羨ましさに気付かない　（後書き）

ホント…お前ら二人ともズリーよ！

8：悪い予感はよく当たる（前書き）

今回はちょっと長めかな？

8：悪い予感はよく当たる

太陽が容赦なく、降り注ぐ。
周りには瓦礫しかない。

「はぁ、はぁっ…くそっ！」

俺は手榴弾を後ろからしつこく追ってくる奴らになげつける。
ドンッ…！
後ろで爆発。
よし、これで――
ドゴォ！
パン！！パン！！
ちっ、まだ兵士が残っていたか…！
どうする？
決まっている。
前に進むしかない。
後ろにいるのは、敵だけだ。
思い切り、地面を蹴って、大きく一歩を踏み出す。
しかし、次の瞬間、自分の失敗に気付く。
あらかじめ調べておいた情報を焦りで忘れていた。
（ここは、地雷ポイントか…！）
足元にある、爆弾が、炸裂する――
ドンッ！

「っ…はぁっ！」

ガバッ！！

「はぁ、はぁ…、はぁ……」

辺りはまだ明るくなっていない。
夢？だよな？
ドサッ。
体をもう一度ベッドに預けて、目を閉じる。
またか…。
俺《信》はため息をつく。
ＩＳに初めて触ってから、昔の夢を見る。
俺は小さい頃、研究所で実験された。
何の実験だったのか、覚えていない。
ただ覚えているのは、『実験された』という事実と、研究所からなんとか逃げ出した、ということ。
今見た夢は、逃げている途中のものだと思うのだが、それが本当に正確な記憶か、思い出せない。
そしてたまたま、育ての親である、じいさんとばあさんに引き取られた、ということ。

（何で、今ごろ…）

まるで、何かを思い出せ、と言われているかのようだ。
最近は、夢の中の自分が地雷を踏んで、夢から覚める、というパターンが当たり前のようになっていた。

（まったく、嫌になるな）

今度はいい夢見ようと気持ちを落ち着かせ、また、眠りに落ちる。

スタジアムのような場所にいた。
ん？

（あれは…、一夏か？）

恐らく一夏と思われる、ＩＳが、もう片方のＩＳに急接近する。

（あれは…、セシ…オルコットさんだよな？）

　一夏が斬りかかる。
これで決まりだ！俺には分かる。
理由は分からないが。
ビーッ！
ブザーがなる。
恐らく試合終了だろう。
だが、一夏の握った剣は相手に届いていない。
…あれ？
俺を初め、みんなきょとんとしている。
俺が感じたのは、ただひとつ。
一夏の負けだ。

突然場面が替わる。
今度は織斑先生と、山田先生がいる。
織斑先生は、コーヒーに白い粉を…。
って、それ塩ですよ！

ガバッ！！

「…」

何だ？この夢…。
前半はまだしも、後半は意味わからん。
コーヒーに塩て…。

（うーん、でも妙にはっきりしてたし…アレかなぁ）

俺が言う『アレ』というのは、いわいる予知夢ってやつだ。
昔の夢を見初めてから、未来の夢も見るようになった。
それもどうしたわけか、みんなが俺の存在を知らないで生きていく未来の夢を。
何でそんなことが分かるかって？
なんとなく感覚だ。
『ああ、この人たちは俺を知らない』ってわかるんだ。
なぜか。

（もういいや、少し早めに起きるか）

只今５時３１分。

（本当は８時ぐらいまで寝たいとこだが、遅刻するからな。三度寝はよしておこう）

目を覚ますため、シャワーを浴びようと、立ち上がった。

朝食を食べに食堂に行くと、一夏を見つける。
朝から隣に座っている女の子に怒られてた。

「なあ、箒――」

「名前で呼ぶなっ！！」

「……篠ノ之（しののの）さん」

「ふんっ」

「はぁー」

へぇー。

あの子の名字『篠ノ之』っていうんだ。

束博士の知り合いか？

ＩＳを作った天才、篠ノ之（しののの）束博士（たばね）。

珍しい名字だし、同じってことは親族かな？

「よ。おはよう」

俺は一夏に朝の挨拶をする。

「あっ、信。おはよう」

「……」

「篠ノ之さんも、おはよう」

「……ああ」

ニコッと笑顔で篠ノ之さんに挨拶するが、相手はむすっとした顔のままだ。

うーん、強敵だ…。

「真宮くん、織斑くん、隣いいかなっ？」

見ると、女子が三人、トレーを持って立っていた。

「ああ、別にいいけど」

「おう」

一夏、俺の順に答える。

「「よしっ！」」

後ろで答え待ちしてた二人がハイタッチ。

そんなうれしいのか。

「真宮くん、昨日はごめんなさい」

ペコリ。

三人のうち、俺の隣に座った子が頭を下げる。

「ん、ああ、別に俺は気にしてねーよ。むしろ俺があんな格好してて、ごめん」

と、謝罪に謝罪で返す。

「あ、あんな格好って、ど、どんな？」

「昨日聞かなかったの？実は…」

「ええっ！私も見たかった！！」

とか後ろで言ってるけど、気にしない。
昨日のこととというと、俺のパンツ一枚の姿を見たことだろう。
確かに、目の前の女の子には見覚えがあった。
大勢集まった女子の後ろの方で、背伸びして必死にこっちを見ようとしてた子だ。

（真面目だなぁ）

「わざわざ謝ってくれて、ありがとな」

ぽん。
軽く女の子の頭に手を置いて、撫でる。
なでなで。

「「「「「ああっ！いいなーーー！！」」」」」

周りから声が上がる。
ど、どうした？
何がいいんだ？

「わ、私もごめんなさい！！」

「すいませんでした！！」

「私もです！」

「昨日部屋に押し掛けなくて、ごめんなさい！！」

いやいや、押し掛けなくてよかったんだよ。

わーわー！キャーキャー！！

一気に食堂が騒がしくなる。

パンっパンっ！！

突然、手を叩く音。

「いつまで食べている！食事は迅速に効率よくとれ！遅刻したものはグラウンド十周させるぞ！」

織斑先生の声で、女子たちは一斉に自分の席に戻り、食事を再開する。

誰かが言っていたが、織斑先生は一年生の寮長らしい。

「……織斑、私は先に行くぞ」

「あ、ああ。また後でな」

篠ノ之さんと一夏のやり取りを見て、さっき頭を撫でた女の子が俺に小声で質問。

「ねぇ、織斑くんと篠ノ之さんって…」

「ん？あいつら？幼なじみだってさ」

「そうなの！？」

「ああ。青春だよなぁー」

あれ？
そうえば、さっきから…

「どうした？顔、赤いぞ？」

相手の顔に自分の顔をぐいっと近付ける。

「へゃい！？ちっ、ちょっと風邪気味で……」

「嘘だろ」

「そ、そんなこと…」

相手の手首をつかみ、目と目を合わせて、もう一回。

「う・そ・だ・ろ？」

「あ、あの…その…」

じーーーーー
自分の顔が、相手の瞳に映っている。
それがわかるくらい、互いの顔が近い。

「おい、真宮。朝から女子を口説くんじゃない」

織斑先生だ。

「えっ、い、いや、これは…」

口説く、なんて言われると、急に恥ずかしくなってきた。

ぱっ、と手を離して、離れる。

「あっ……」

残念そうに女の子が呟いた。

周りからは

『『『『『『『『『な、なんであの子だけ？ズルい！』』』』』』』』』

という目線が向けられていた。

「さぁ、さっさと食事を済ませろ。あと五分もないぞ！」

これ以上ここにいても意味ないし、もう教室行くか。

「あっ、あの！！」

立ち去ろうとした俺をまた、あの子が呼び止める。

「あり、あ、ありがとっ！！」

「？ああ、こちらこそ」

なんでお礼言われたか分かんないが、とりあえず笑顔で返す。

「あっ、待てよ。俺も行くって」

一夏が急いで俺に言う。

「おう、じゃあ行こうぜ」

と、一夏と二人で食堂を出ていく。

ちなみにその女子は1日中、夢心地だった。

信は自分のことをほとんど気にしないので、自分が異性からどう思われているか、わからないのだ。
わからないので、知ろうともしない。

ここ、ＩＳ学園に入学してきた男子は二人揃って、周りから見れば『カッコいい』のだ。
しかも、かなり。
問題なのは、二人とも自分の容姿もわかっていない。
ＩＳ学園の女子はみんな、彼らと友達に、もっと言えば恋人になりたい、と思っている。
一夏も鈍いが、信も自分に関して相当に鈍い。

他人から他人（女子→一夏）に対しての意識の変化には敏感でも、他人から自分（女子→信）への意識の変化には、気付かないのだ。

『鈍感』

この共通点を持つからこそ、打ち解けるのも早かったのかもしれない。

この二人に『唐変木の双龍（ダブルドラゴン）』という異名が付くのは、まだ少し先の

話…。

三年間女子だらけ生活　二日目。

今は昼休みだ。
午前中の授業は、山田先生がうっかり『ブラジャー』とか言っちゃって微妙な雰囲気になったり、やっぱ篠ノ之さんは束博士の親族（実は姉妹だった）と言うことがクラス全員にばれたり、本人はそれをよく思っていなかったり、いろいろあった。
だか、一番のニュースは俺と一夏のＩＳのことだろう。

『真宮、織斑。お前らは事情が事情だから、データ収集のため、専用機が用意される。準備ができるまで、まっていろ』

だってさ。
教室ではセシ…オルコットさんが一夏にまた余計なことを言っている。

「まぁ、訓練機では勝負が見えてしまいますから、フェアではありませんものね。専用機は本来、選ばれしエリート中のエリート、正にこのイギリス代表候補生セシリア・オルコットのような……」

ペラペラ、ペラペラ、うんぬん、かんぬん

またかよ…。

ああっ！またややこしいことになってる。

「あなた、馬鹿にしていますの？」

「いや、そんなことはない」

「だったらなぜ、棒読みなのかしら……？」

「何でだろうな、箒」

何でさらにややこしくするんだ。

ほら、睨まれてるじゃないか。

あっ、なんかセシ…オルコットさんも睨まれた。

セシ…オルコットさんは怯んでうごけない！！

と思っていると、すぐに立ち去って行った。

さすが代表候補生。

回復が早い。

去って行く後ろ姿を見て

（なんか、モデルみたいだな。もう少し謙虚になれば、美人なのに…。もったいない）

ぐぅ～

ここで、俺の腹が食事を求める。

（さて、俺は飯食いにいくか）

席を立って足を学食へ向けて踏み出す。

学食に行く途中、ふと、俺のＩＳってどんなだろ？と思った。

（つーか、俺が使いこなさなきゃ、意味ないよな…。届くまで、何を練習しよう…。いや、練習じゃなくても何をすれば…。基礎と理論は完璧に理解したし…。となると、やっぱ経験が足りないから、そこを補うには…）

ピカーン！

突然、いいアイディアが浮かんだ。

（経験した『つもり』になればいいのか！）

だとすればやることは決まった。

よしっ！今日からやるか！

ようやく、やるべきことがわかった。

なんかやる気出てきたぞー。

◇

時を遡ること、3日――

ＩＳ学園の職員室は入学式前日とあって、忙しく人が動いていた。

「えっ！本当ですか！？」

そんな中、電話機に向かっている山田真耶が、驚いた声を出す。

「はい、わかりました。よろしくお願いします」

ガチャ

「どうしました？」

織斑千冬が、話しかける。

「い、いや…、男子生徒の専用機ができたので、そちらに送ると…」

「！それは、どちらの生徒のですか？」

「えっと、真宮　信くんです」

早い…早すぎる…。

「いつ届くと？」

「明日か明後日だそうです」

いくら何でも時期が早すぎる。

「わかりました。格納庫の準備の手続きをしておきます。」

千冬はそう言って、職員室を出ていく。

真宮信の、事前報告書を思い出す。

全ての数値がずば抜けていて、他を寄せ付けないものだった。

さらにＩＳ適性はＳランク。

こんなランクは世界中でも、数えるほどしかいない。

ここまで恵まれているなんて、おかしい。

異常だ。

それだけでもおかしいというのに、加えてこの専用機の準備期間の短さ…。

『最初からわかってたので、準備してました』という感じだ。
あり得ない、まるで――――――

「まるで、ＩＳに乗るために生まれたみたいじゃないか」

千冬は、すでに教師の顔ではなく、戦士の顔になっていた。

これから起こる、波乱を感じて――――――

8：悪い予感はよく当たる（後書き）

信はまだまだ謎が多いですが、少しずつ、その謎を解いていきたいと思いますm（＿＿）m

9：どんな人でも笑った顔が一番素敵（前書き）

ようやくここまで来ました…

9：どんな人でも笑った顔が一番素敵

千冬はＩＳ格納庫にいた。
目の前にあるのは、黒いＩＳ。
真宮　信の専用機だ。
彼女は彼にすぐにこの専用機を渡すことは、しなかった。
どういう人間なのか、この目で確かめたかった。
もしも、自分の有能さを自慢して他人を見下しているようなやつであれば、専用機を持つ資格があると判断するまで、ここに置いたままにするつもりだった。

「あいつなら、大丈夫か…」

ふっ、と微笑む。
突出した能力を持ちながら、普通に生活を送れている。
他人を理解し、助け合いながら。
特に問題は無いだろう。

「見せてもらおうじゃないか、こいつをどれだけ使いこなせるか。お前の実力を」

◇

遂に、月曜日。
今日はいよいよ、一夏ＶＳセシ…オルコットさんだ。
一夏は結局、篠ノ之さんに特訓をしてもらったらしいが、毎晩毎晩、俺《信》の部屋に来ては

『ＩＳのこと全然教えてくれないんだ、あいつ』
と愚痴ってた。
で、当日になって

「なあ、箒」

「なんだ、一夏」

「ＩＳのことを教えてくれる話はどうなったんだ？」

「……」

「目をそらすな」

というやり取りをしている。
ま、お互い名前で呼び会えてるし、篠ノ之さんも内心、一夏と一緒に居られて嬉しいみたいだから、いいか。
ちなみに、ここは第三アリーナ・Ａピット。
ただ、まだ必要なものがない。
一夏の専用機だ。
間に合わないときはどうするんだ？

「お、織斑くん織斑くん織斑くんっ！来ました！織斑くんの専用ＩＳ！」

どうやら杞憂だったようだ。
山田先生と織斑先生がこっちに来る。

「織斑、フォーマットとフィッティング、その他の感覚はぶっつけ本番で身に付けろ。いいな？」

相変わらず織斑先生は厳しいっすね。
実の弟なんだから、優しくしてあげましょうよ。

「これが、一夏くんの専用ＩＳ、白式（びゃくしき）です」

目の前の搬入口から表れたＩＳを、一夏は戸惑いつつ装着する。
カシュッ

「どんな感じだ？」

俺が質問する。

「ああ、悪くない。大丈夫だ」

しっかりした口調で答える一夏。

「じゃ、あいつに目にもの見せてやれ。勝ってこい」

「ああ！」

俺と一夏は右手を前にだして、
コンッ
互いの拳を軽くぶつけ合う。
そして、二人でニヤリと笑う。

「箒」

「な、なんだ？」

「行ってくる」

おー、カッコいいぜ、一夏。

そして、ゲートが開いた――

試合開始。

俺たちはアリーナの制御室で、モニター越しに戦いを見ていた。

山田先生が何か話しているが、俺の耳には内容まで届かなかった。

俺は真剣に、モニターのリアルタイム画像を目で追っていた。

◇

（まったく、情けない…）

箒は、試合を終え、目の前で正座して織斑先生に説教されている幼なじみを見て思った。

ふと、隣にいる真宮と目が合う。

『まぁしょうがないよ、気持ちはわかるけど』

やれやれ、という感じである。

（こいつはどれくらいやれるんだろうか…）

さっきの試合の間、ほとんど瞬きもせずにモニターを見ていた少年を見てそう思う。

結果をいうと、試合は一夏の負け。

だが、もう少し白式にエネルギーがあれば、逆転勝ちだった。

雪片二型（ゆきひらにがた）――

自身を守るシールドエネルギーすら攻撃に転化する、一撃必殺の諸刃の剣。

ＩＳ同士の試合では、シールドエネルギーが尽きた方が敗者となる。

絶対防御という、全てのＩＳに備わっている操縦者の死亡を防ぐ、シールドエネルギーを極端に消耗する能力。

これを使用させて大幅にエネルギーを削る、それが一夏の武器だった。

しかし、相手を斬る直前に白式のエネルギーが切れた。

まったく、本当に情けない。

自分の使う武器の特性さえわかっていないとは。

だが……

「これで、また一夏と二人で稽古できる？」

耳元で小さく囁かれた。

心臓が飛び上がる。

勢いよく振りかえると、ハハッ、と真宮が笑った。

こいつも、あの人と同じ天才。

しかし、あの人と違う何かを感じる。

安心感というのだろうか、この人懐っこい笑顔の少年には、何でも話してしまえるような、そんな感覚がわいてくる。

「安心してくれ。別に邪魔しようとか思ってないし、篠ノ之さんの気持ちを俺があいつに伝えるなんて野暮なことはしない」

「……ど、どうして」

「ん？」

「どうしてそう思うのだ？私と一夏は、その、なんだ…、あまり仲良く見えていなかったと思うのだが…」

「いやいや。そんなことなかったぜ？少なくとも俺から見たら、むしろ仲良く見えたけどな」

ニコッ

笑顔を見せられると、なんだか落ち着かなくて、うつむいてしまう。

「じゃ、俺は先帰るわ。やることもあるし。一夏をよろしく、篠ノ之さん。後は二人でゆっくり帰ってきてくれ」

「……きだ」

「へっ？」

「わ、私の名前は箒（ほうき）だ。今度からは、名前でかまわない」

一瞬不思議そうな顔をしていたが、すぐに真宮は笑って、

「わかった。俺の名前は信（しん）だ。これからは俺も名前でいいぜ。よろしく、箒さん」

「『さん』もいらないっ！」

うっかり語調が強くなってしまった。

「ははっ、わかったよ、箒」

「ああ。よろしくな、信」

思わず、口元が緩む。

「やっとだな」

「は？」

「やっと笑顔になった。やっぱ笑った方が美人だぜ？箒。その顔、一夏の前で見せてやれよ？」

「／／……っ！！」

顔が赤くなったのがわかった。

また信が、ハハッ、と笑って

「じゃーなー、箒ー」

と自分に背を向けて去っていった。

「はぁー、やっと終わった…。ん？どうした？箒？」

ようやく、先生の説教から解放された一夏が近寄ってきた。

「／／っ！う、うるさいっ！この負け犬！！ええい！一から鍛えなおしてくれる！」

バシッ！！

持っていた竹刀で一夏を叩く。

「いてっ！！なんだよ、少しぐらいねぎらってくれてもいいだろ！！」

「うるさいうるさいっ！これから放課後は空けておけ！私自ら稽古してやる！！」

バシッ！！

「いてっ！お、おい！」

バシッ、バシッ、バシッ！！

「ぎゃーーーーー！！」

……どうやら一夏に笑顔を見せるのは、まだ先になりそうだ。

◇

俺《信》はみんなより先に、自分の部屋に戻ってきていた。

（やっぱスゲーな、一夏…）

正直、ぶっつけ本番であそこまで戦えるとは、思っていなかった。

あいつはフォーマットとフィッティングも試合の中でもやり遂げた。

試合こそ負けたが、後少しで一夏が勝っていた。

先生に聞いたが、セシ…オルコットさんの勝ちだから、俺は明日、

あいつと戦うことになる。
それに、俺の専用機も届いたということで、試運転するか？と聞かれたが、断った。
一夏がぶっつけ本番だったのに、俺だけそれはずるいと思ったからな。

（それにしても…）

あの夢。
やっぱり正夢になった。
一体、どんな仕組みなんだ？俺の頭。
未来がわかるなんて。

（いや、今回はたまたまだって。きっとそうだ）

そう言い聞かせて、明日のための準備を始める。

（仇はとるぜ、一夏…！）

◇

（ああ、あの目…）

セシリア・オルコットはシャワーを浴びながら、一夏のことを思っていた。
心のなかは、これまで感じたことの無い気持ちでいっぱいだった。

（どの男性とも違う、あの強い意志のこもった目…）

「知りたい…。もっと、あの人を。織斑一夏を…」

◇

「ま、今日はお疲れ様。ずいぶんいい線いってたぜ？」

「そんなこと言ってくれるのは、お前だけだよ、信。嬉しくて涙が出そうだ」

放送席、放送席。
俺《信》の部屋には本日、大奮闘をみせた、織斑　一夏くんがきています。
ずっと愚痴ってるけど。
話を聞く限り、どうやら箒は放課後に一夏と二人だけで特訓できるようだ。
箒…。
よく頑張ったな。
うんうん。

「ところでさー、信。お前、大丈夫か？明日」

「ああ。やれることはやった。特訓もしたしな」

「お前の特訓って、何なんだ？すげー気になる」

「知りたいか？」

コク、コク
一夏が頷く。

「わかった。じゃあ、今日の最終確認の特訓に付き合え」

「えー！何でだよ！？もう今日は疲れたって！」

「安心しろ。めっちゃ簡単だから」

なんだ？その顔は？
『嘘だろ』見たいな目は。

「本当だって！騙されたと思って！な！」

「そこまで言うなら…」

渋々、了解する一夏。

「よし！じゃあ、始めるか！！」

早速準備に取りかかる俺。
泣いても笑っても、明日が本番。
悔いの無いように全力をつくす。
ただ、それだけだ。

9：どんな人でも笑った顔が一番素敵（後書き）

信の特訓とは！？
次回遂にその方法が明らかに！！

煽っておいてアレですが、あまり期待しないで下さい…。

１０：男の魅力は意外性（前書き）

初めて６０００字超えです。

１０：男の魅力は意外性

スゥー…はぁー…

遂にこの日が来た。
気持ちを落ち着かせるため、深呼吸をする。
そうえば、受験の日も深呼吸してたな。
あれからずいぶんと時間がたった気がする。
俺《信》は今日も第三アリーナ・Ａピットに居る。
昨日は観戦者だったが、今日は違う。

「じゃあ、開きますね」

山田先生がそう言って、ピット搬入口を開く。
ガガッ、ウィーン…
なにか宝を守っているような強固な扉が開ききるのを、俺は黙って待った。

「なんだ?緊張してんのか?信」

後ろにいる一夏が俺をからかう。

「馬鹿言うな。俺は極めて自然体だぜ?」

そう。
自分でも驚くぐらい、落ち着いている。
深呼吸する前から、今日の朝目が覚めてから、ずっと。

「それにしても、口数が少ないぞ。本当に大丈夫か？」

箒も応援に来てくれた。

「俺は元々寡黙なんだよ」

「「嘘つけ」」

ダブルで否定かよ。

しっかし、最初見たときより表情が柔らかくなったよな、箒は。

少しだけど。

「おい、時間が無いんだ。早くＩＳを装着しろ」

織斑先生に急かされる。

気付くと、すでに俺の専用機がその姿を現わしていた。

ボディカラーは黒。デザインは、なんと言うか、固そう？かな。

「これが…俺の…」

「はい。名前は、『瞬光（しゅんこう）』。真宮くんの専用機です」

山田先生の言葉を聞きながら、瞬光に近付き手を触れて、そのひやりとした装甲を感じる。

俺には、わかった。

俺はこいつが必要だ。

こいつも俺が必要だ。

お互いに、ずっと待っていた。

こうして向き合い、共に戦う時を。

「昨日織斑が装着していたのは見ていたな？あれと同じようにすればいい」

織斑先生に従い、昨日の一夏のように、装甲を開いている瞬光に背中を預ける。

カシュッ

俺と瞬光が一体となる。

「どうだ？」

「絶好調だ」

「まだ動かして無いだろ」

箒の質問に答える俺、それに　ツッコむ一夏。

そして、俺は右手の拳を前に出す　。

「勝ってくる」

コンッ、コンッ

「負けんなよ」

「負けたら、お前にも稽古をつけてやる」

俺たち三人は、拳を合わせる。

そして、ゲートが開く。

俺は笑っていた。

楽しかった。

嬉しかった。
この場所が、この瞬間が。
自分がいて、自分の理解者がいて、自分の対戦者がいるという事実が――――

ゲートから飛び出した俺は、空中に浮かんでいた。
目の前には、いつもの偉そうな雰囲気がないイギリスの代表候補生。

「……」

「よぉ。俺より緊張してねーか？」

「そんなことないですわ」

セシ…オルコットさんが答える。
まぁ、わかってたけどね。
見たらわかる。
緊張してんじゃなくて、本気で俺と戦う覚悟を決めてたってことは。
昨日の対戦で、相手は男だ、となめてかかるとどうなるか、身をもって体験したからだろう。

「手加減はしませんわ」

「そりゃありがたい。すぐ俺が勝っちゃったら、つまんねーからな」

「いつまでその強気が続くか楽しみですわね」

試合開始のカウントダウンが始まる。

「最後まで続くさ」

――3

「わたくし、今回は本気ですのよ」

――2

銃口とビットが俺を狙う。

「悪いが」

笑わずにはいられなかった。
本気で俺と戦ってくれる。
それが嬉しかった。

――1

「俺もだ」

すぐ動けるよう、限界まで集中力を高める。

――0

刹那、俺に向かって閃光が走る。
それも、一本ではなく、五本ほど一気に。
左に緊急回避、更に宙返りして、そのすべてをかわす。

（まだ遅いな…）

イメージと一致しない。
操作感に慣れるまで多少時間がかかるか…。

あらゆる方向から第二射がくる。
俺が最初の攻撃を避けていたほんのわずかな間に、最も避けにくい角度から射撃が行えるよう、ビット及び自身も移動していた。
流石、代表候補生。
最初から本気を出していれば、強いじゃないか。
こっちも全力出さないと負ける。

（だけどまだだ…もう少し待ってくれ）

俺は『残りおよそ３０分２６．８秒』と表示されたフォーマットとフィッティングにかかる時間を確認しつつ、休むことなく機体を上下左右あらゆる方向に動かす。
攻撃を避けるため、そして、なるべく早くこの機体に慣れて俺のイメージ通り動かすために。

◇

「すごい…」

山田先生が呟く。

「ああ、初めての戦闘とは思えん」

千冬姉も感心している。
俺《一夏》は二人の機体のあまりの速さに驚愕して、声もなかった。

「い…か」

「…」

「お…、…か」

「…」

「一夏ッ！！！！」

「わっ！なんだよ、箒。そんなに大声だすなよ。びっくりするだろ」

「さっきから何度も呼んでいるのにお前が応えないからだ」

プイッ、と箒がそっぽを向く。

「ご、ごめん。試合に見入っちゃって。セシリアもだけど、信もスゲーと思ってさ」

間違いなく、セシリアは最初から本気だ。
昨日の対戦で、自分に手加減してたのがよくわかる。

（俺だったら瞬殺だったな、きっと。ううう…）

モニターには、無駄のない動きで激しい攻撃を避けきっている信が写し出されていた。

「でも、おかしいですね」

「ああ」

「信がまったく攻撃しないことですか？」

山田先生、千冬姉、箒の順。

そう、信は先ほどからビームを避けるだけで、自分から攻撃を仕掛けていない。

ただの一度も。

チャンスは少なからずあるはずだ。

でも、攻撃しない。

「もしかして、今が『準備期間』ってやつなのか？」

ポツリ。

意識せず、声が出る。

「どうした、織斑？なにか知ってるのか？」

それを聞いた千冬姉が俺に問いかける。

「いや、昨日の夜あいつの特訓に付き合わされたんだ」

「「「特訓？」」」

三人の声が重なる。

俺は昨日の様子を語り始めた。

――――――――――――――――

「そこまで言うなら…」

俺《一夏》は渋々、了解する。

「よし！じゃあ、始めるか！！」

信はそう言って、ノートパソコンとテレビの電源をつける。
なんだ、そんなに電化製品の電源をつけて。
同時に二つも使わないだろ。
節電しろ、節電。
そんなこと思っているうちに、信はパソコンで動画共有サイトを立ち上げ、検索欄に『ＩＳ　大会』と打ち込んで、検索を始めていた。
更に、クローゼットの中から大量のＤＶＤディスクを取り出した。
段ボールに入って、他人が見つけにくい場所に入っているということは…。

「言っとくが、お前が考えてるようなものじゃねーぞ。期待に沿えなくて悪いが」

見抜かれたか。

「別に期待してないって」

「あっ、そうだ。一夏がせっかく居るから、先にこれを見るか。えっと…これをこうして……よし、再生」

信が、机の上に置いてあったＤＶＤを取って、再生する。

ザ、ザー。パッ。

ノイズが少し入って、画面が写る。

白と青のＩＳ同士が向かい合っている。
……ん？これって……

「今日の俺の試合じゃないか！！」

「ああ。観戦してた女の子に頼んどいたんだ」

そう言って、信はテレビの隣にパソコンを置き、動画を再生する。

「こっちは第二回モンドグロッソ、一回戦だ」

「…で？」

「は？『で？』ってなんだよ」

「いや、特訓は？」

「これだよ。『過去のＩＳの対戦を片っ端から見まくる』」

なに言ってんだ？こいつ。

「見てどうすんだよ！」

「覚えて、自分の姿を重ねる。そうすると、まだ動かしたことのないＩＳを自分の中でイメージできる。自分があそこで戦っているという経験をした『つもり』になれる」

言葉が出なかった。
そんなことができるわけ……

「できるんだよ、俺には。それに、お前だって自分の姿から学べることがあるはずだ」

こいつ、冗談じゃなく、本気で言っている。
目が真剣だ。

「で、でも二つもどうすんだよ」

「同時に見る。時間がないからな」

おいおい、目が二つ有るのはものを同時に二つ見るためじゃないぞ。一つのものを立体的に見るためだぞ。

「いいから早く見よう。まだ、見たい試合があるしな」

「何本くらい？」

「今まで６０５３試合みたから……あと１４６試合かな？」

「……見終わらねーよ！つーか、そんなに見たの！？」

「心配すんな。一夏の試合以外は、１．５倍速再生でみるから」

――――――――――

「で、本当に俺の試合以外１．５倍速で見てさ、しかも途中から『この状況を自分だったらどう打開するか』とか、メモ取ってんだぜ？１．５倍速の試合見ながら」

そう言いながら、試合前に信から預かったメモの束を取り出す。

電話帳と見間違えた、あの参考書とほぼ同じ厚さだった。
信は試合直前までに、記憶し忘れがないか全部見直していた。

「で、見終わった後、信に本当にできるのかって聞いたら『頭の中のイメージと体の動きが一致するまで、２０分。本格的にＩＳに乗るのは初めてだから、その感覚を理解するのに、１０分。その後は、その２つを連動させて、だいたい３２分くらいかな』だってさ。３２分がＩＳを完璧に動かせるために必要な『準備期間』って言ってた」

無意識に４人の視線が、タイマーに注がれる。
試合開始から１５分が過ぎていた。
明らかに信の動きは良くなっている。

「これでもまだ半分の完成度だというのか…」

箒は愕然としている。

「あいつが凄いのは、才能があるからだけじゃない。確かに、あいつ以外には真似できないやり方だけど、勝つために頑張ってるんだ。必死で」

襲いかかる閃光をすべてを避けきっている信の姿を見る。
その表情は真剣で、余裕は無かった。
時間を忘れて、立ち尽くす。
彼が『天才』である以前に『努力家』であることをこの場にいる全員が強く感じる中、タイマーは２０分を過ぎた。

◇

（まだだ…まだ一致しない……）

ビームの雨が絶えず降り注ぐ中、俺《信》は回避行動に専念した。

「攻撃しないなんて、随分余裕がありますのね！」

うわっ！今のはギリギリだった。

体を捻って、かろうじてかわす。

「余裕なんか有るわけ無いだろ。全力で戦ってる」

「では武器の一つでも展開してはいいが？初心者になめてかかられるなど屈辱的ですわ！」

いや、そうしたいのは山々なんだが…。

武器の一覧を出す。

そこには一つだけ、朧火（おぼろび）と表示されていた。

『種別：その他』だってさ。

その他ってなんだよ。

しかも展開しようとすると『武器　ロック中』と表示される。

（何で勝手にロックとかしてんだよ、まったく…）

もっと言うと、解除方法もわからない。

「まぁいいですわ。出さざるを得なくして差し上げますわ！」

ビームがこっちに向かってくる。

それを必要最低限の動きでかわす。
試合開始直後と比べ、信の動きには無駄がなく、自分でもＩＳの操作感に慣れてきたのを感じていた。

（でも、もっとだ。イメージと一致させろ。体を動かせ。速く…もっと速く！！）

ダメージをうけるギリギリのところで回避しながら、俺に瞬光からメッセージが送られる。

『フォーマットとフィッティング完了まで残り5分です』

◇

セシリアはなるべく気持ちを落ち着かせるよう努力していた。
気持ちが乱れてしまえば、命中精度が落ちるからだ。
しかし、そろそろ限界が来ていた。

（何で一回も当たらないんですの！？）

そう、そうなのだ。
自分は確実に本気。
昨日とは違う。
攻撃も直撃コースで非常に避けにくい角度からしている。
それなのに、信にはすべて避けられてしまう。
普通なら、少なくとも一回位は当たるはずだ。
試合開始からすでに３０分近い。
それなのにまだ、セシリアも信もノーダメージだった。

信は攻撃すらしてきていない。

（まったく、腹が立ちますわ！）

攻撃を当てられない自分にも、攻撃しない信にも。

とここで、信が笑ったのに気付いた。

「何がおかしいんですの？つくづく人を馬鹿にするのが好きなようですわね！！」

セシリアはそう言いながら、ビットのエネルギー補給のため、一度機体に戻す。

信は一度動きを止め、セシリアと向き合う。

「馬鹿になんかしてないさ。むしろ尊敬してるんだ。やっぱ、強いなお前。ほんと、本気で俺と戦ってくれてありがとう。感謝するよ」

信の突然の『ありがとう』に顔が赤くなる。

（なっ、何でわたくしが赤くなっていますの！？）

セシリアが少し動揺しているのを知らず、信が再び話し始める。

「だから……待たせて悪かった。やっと終わったよ。俺の準備も、こいつの準備も」

一瞬、信の機体が光を放つ。

目をつぶったのは1秒ほど。

しかし、その一秒で、相手のＩＳはまったく別なものへと変わっていた。

◇

『フォーマットとフィッティング、及び一時移行（ファーストシフト）が終了しました』

「ああ。ありがとう、瞬光」

先ほどまでの固そうなイメージは欠片も残っていない。
一夏の白式が中世の鎧を思わせるなら、瞬光はどことなく東方の剣客を思わせる。
動き易くするためだろうか、無駄なものが一切ない。
俺《信》はわかった。
こいつは俺が思った通りに動く。
俺の考えを理解し、合わせてくれる。

（そうだろ？瞬光）

何も表示されることは無かったが、なんとなく肯定の意志が伝わってきた気がした。

「…ロック解除」

『了解。朧火、ロック解除。右手に展開します』

すぐさま、俺の右手に展開粒子が集まる。
そして瞬時に収束して……収束して……しない？
俺が呆気にとられて、右手を取り巻く粒子を見ていると、驚きから復活したセシリアが攻撃を再開する。

「準備は終わりまして？でもまだ不具合があるようですわね！」

ここがチャンスとばかりにミサイルまで撃ち込んでくる。

いや、違う。

不具合じゃない。

瞬光は俺に合わせてくれる。

その武器も同じだ。

大切なのは正確なイメージを伝えること。

（欲しい力を、強く願うこと！！）

俺は、欲しい。

どんなものでも、どんな敵でも、すべてを斬り裂くことのできる、剣（つるぎ）が――――

勢いよく、粒子を纏う右手に左手をあわせて縦に振る。

一刀両断されたミサイルが、俺を通り過ぎて後ろで爆発した。

体の前に朧火を持って、構える。

俺の右手には、わずかに光輝く剣があった。

日本刀のように『斬る』ことを目的にした、鋭い形だ。

止めどなく流れるように粒子が動いているが、剣の形は崩さない。

「行くぞセシリア！」

俺は一気に加速して、相手に近づく。

「ッ！！させませんわ！！」

俺がいたはずの場所にビームがくる。

だが俺はすでにいない。

両手両足にも付いたスラスターで複雑で自由自在、縦横無尽に動いて相手を翻弄し、懐に入る。

「遅い！！」

剣を横に振り抜く。
手応えあり。

『相手機体、絶対防御発動。エネルギー消費、大』

よし！
体勢を立て直すため、再びセシリアと距離をとる。

「くっ！近寄らせなければ！」

セシリアが今まで以上に激しい攻撃で俺を遠ざける。
だが、悪いな。

「これは近接武器じゃないんだぜ！」

相手との距離は２１メートル。
その距離から、再び勢いよく剣を振る。
俺のイメージを伝えながら。

「飛べ！！朧火！！」

剣から出た衝撃波が、進路上にあるビームとビットを斬り裂いて、敵に向かって飛んでいく。

「なっ！」

驚きで判断力が鈍り、硬直したセシリアには避ける時間はもう無かった。
そして、直撃。
ビーーーーッ！！

『試合終了。勝者、真宮信』

◇

唖然。
アリーナにいる全員がそうだった。
前例のない、男のＩＳ操縦者。
国の支援を受け、厳しい訓練に耐え掴み取ったであろう代表候補生、いわゆるエリートという地位。
そのエリートから一撃も攻撃を受けず、勝ってしまった。
つまり、完全試合（パーフェクト・ゲーム）。
３人が試合する事が決まったとき、どこかで『あの二人が勝つのは無理よね、男の子だし』と皆が思っていた。
ところが、結果はどうだろうか。
一夏は負けたにせよ大奮闘し、セシリアを追い詰めた。
信に至っては、勝ってしまった。

「ふん。つくづく人を裏切るのが大好きなようだな、男子」

千冬は一夏にからかうような口調で言った。

「？何だよ、いつ俺たちがそんなことしたんだ？千冬ねー」

バシッ！！

「織斑先生だ。あと敬語を使え」

近くにあったメモの束で一夏を叩く。

「…ご指導ありがとうございます…。織斑先生…」

「一夏、信を迎えに行くぞ」

「あ、ああ」

箒と一夏が部屋を出ていく。

「これで、クラス代表は真宮くんですね」

山田先生がアリーナ設備の点検をしながら話しかける。

千冬が笑顔で応える。

その顔はいつになく上機嫌そうだった。

「さぁ、それはどうでしょうか。何せ、あいつは人の予測を裏切るのが大好きなようですから―」

頭に『？』を浮かべている山田先生を背に、千冬は一夏達を追って、部屋を出ていった。

１０：男の魅力は意外性（後書き）

頑張ってみました。
いつもより長くなったので、誤字脱字があるかもしれません。
これからはなるべく６０００字ほど書くようにしようと思います。

11：道に迷ってる人は大体挙動不審（前書き）

鈴が登場です。

11：道に迷ってる人は大体挙動不審

「信！やったな」

「ああ。まさかここまでやるとは思わなかったぞ」

一夏と箒が俺《信》に駆け寄る。
瞬光を待機状態にして、笑顔をつくる。

「俺もびっくりしてるんだ。何せ、初めての実戦だったからな」

俺の右手首には黒いブレスレットがついていた。
待機状態の瞬光は自分の存在を誇張するわけでもなく、俺の体の一部であったかのようにそこにあった。

「そうだ、セシリアは？」

「あいつなら、先にアリーナを出ていったぞ」

織斑先生が姿を現す。

「そうですか。じゃ、行ってきます」

「おい、どこ行くんだよ信！」

「決まってんだろ。セシリアのとこだよ」

そう言ってアリーナを出る。
場所は、わかってる。

負けた人なら誰でも、特にプライドの高い人間が屈辱的な負け方をしたあと行くところは、何もかも包んでくれるような広い存在を一番近くで感じることができるところだ。
海とか、空とか。
試合が終わったときのあの顔から読み取った確信を胸に、俺は階段をかけ上る。

◇

（負けてしまった）

セシリアは屋上で空を見上げていた。
そうしないと、泣いてしまいそうだったから。
一夏との試合は相手のミスにせよ自分が勝ったので、さほど精神的ダメージは大きくなかった。
しかし、信との試合は完全にセシリアの負け。
どんな言い訳もできない、完敗だった。
持てる力全てで挑み、負けた。
負けた。
負けてしまった。
負けてはいけなかった。
でも、負けた。
そう考えるともう、涙はこらえられなかった。

ダダダダッ！！

誰かがこっちに来る。

「セシリア！」

突然の声に驚いて、一瞬泣き止む。

「なっ、何かようですか？大方、わたくしを馬鹿にしに来たんでしょうね？」

そう言って、力が抜けたようにへたっ、と座りこむ。

幸い、屋上の入口とは反対方向を向いていたので、泣いている姿を信には見られていない。

「馬鹿になんかするわけ無いだろ？つーか、初めからしてないさ」

信の足音が徐々に大きくなる。

本当なら『来ないで！！』と叫びたかったが、今声を出せば泣いてることがばれてしまう。

足音がすぐ後ろで止まり、信が自分と背中合わせに座るのを感じた。

「言ったろ。『むしろ尊敬してる』って。お前ぐらいＩＳの操縦が上手いのはそうそういない。少なくとも、俺が見た試合の中では、上位の方だぜ？」

「あ、あなたが見た試合の数なんて、昨日の一夏さんとわたくしの対戦だけでしょう？」

何とか気持ちを落ち着かせ、声を絞り出す。

「いいや、お前と対等に戦うためにいろんな試合を見た。おかげで毎日寝不足で大変だった。でも、お前に勝つためにはお前以上に努力しないと駄目だって思ったんだ」

「そ、それでも、数えるほどでしょう？その程度で――」

「６１９９試合。昨日の試合を入れると、その場で見たので一回、録画で見たのでもう一回。全部で６２０１試合だ。まぁ、数えられなくはないな」

「……！！」

「お前は気負い過ぎだよ。肩の力抜いて、勝ち負けだけじゃなくもっと大切なものを見ろ。勝ったときより、負けた時のほうがよく見えるぞ」

そうだったのか。
これで納得がいった。
この少年は努力を怠らなかった。
それなのに、自分はどうだろうか。
油断して、本気になったのは今日だけだ。
思い上がっていた。
この学年で自分に勝てる人はいないだろう、と。

「…ごめんなさい」

「は？」

「あなたを下に見すぎていましたわ。わたくしが、努力を怠たっていました。それなのに、あなたに勝てると――」

ぷっ！
信の吹き出す声が聞こえた。

「ハハッ！お前本当にセシリアか？いつになく弱気じゃないか！俺が知ってるセシリアは、もっとこう、自信に満ち溢れて、偉そうな女子だぞ？」

「なっ！失礼ですわ！わたくしはイギリスの代表候補生、セシリア・オルコットでしてよ！常に――」

「それだよ、それ。なんだ、もう回復したじゃないか。流石、代表候補生だな？」

ははっ、とまた信が笑い声をあげる。
一瞬むっとしたが、すぐにセシリアもつられて、ふふっ、と微笑んでしまう。
何だろう。
この少年と居ると心が休まる。
穏やかで、優しい気持ちになる。

「俺さ、こんな才能持ってるだろ？だから、今まで俺と本気で戦ってくれる人がいなかったんだ。みんな『あいつにはかなわないから、やるだけ無駄だ』って感じ」

信の声が不意に真面目なものに変わる。
すでにセシリアは泣き止んでおり、静かに信の言葉を聞いていた。

「でも、お前は違った。俺がどんなやつか知っても、本気で戦ってくれた。それが本当に嬉しかった。ありがとう、セシリア」

また、顔が赤くなる。

（は、反則ですわ…。そんなこと言われたら、困りますわ…）

必死に顔の火照りを消そうと頑張っていると、信が思い出したように声をあげる。

「あっ、大事なことわすれてた」

「なんですの？」

「お前、約束覚えるよな？」

「約束？」

そんなもの、しただろうか。
試合のことしか頭に無かった。

「『俺が勝ったら、何でも言うこと聞く』」

「あっ…」

そうだった。
自分が負けるわけないと、つい約束してしまった。
信は何をさせるつもりだろうか？
表情がこわばる。
とんでもないことだったらどうしよう？
頭の中にさまざまな『とんでもないこと』を想像して、信の言葉を待つ。

「そうだな～、さんざんいろんなこと言われたしな～」

絶対ニヤニヤしてる。

（も、もうヤケクソですわ！何でも来なさい！！）

セシリアは覚悟を決めた。

裸踊りだろうと、鼻でスパゲッティを食べることだろうと、かまわない。

「今度から、『セシリア』で」

「へっ？」

拍子抜けして、間抜けな声がでる。

「いや、だから。今度から名前で呼ばせろって言ってんだよ」

「そ、そんなこと…」

再び力が抜ける。

「そんなこととはなんだ。ずっと『セシ…オルコットさん』って言い直すの大変だったんだぞ」

「さっきおもいっきり『セシリア』と呼んでいたではないですか…」

「うっ！…そうだっけ？は、はは…っ」

先ほどと違う、きまりの悪そうな笑い声がセシリアにはおかしくて、笑顔になる。

「ふふっ、しょうがありませんわね。よろしくてよ。そのかわり、わたくしも『信さん』と呼ばせていただきますわ」

「ああ、いいぜ。よし！セシリアも泣き止んだところで、そろそろ戻るか！」

「なっ、泣いてなんかいませんわ！」

二人は同時に立って、向かい合う。
信もセシリアも笑顔で、晴れやかな表情だった。

「うーん、やっぱりそうだよな…」

「？なんですの？」

「箒にも言ったんだけどさ、やっぱ美人なやつは笑ったほうが美人だよな」

「／／／なっ…」

ぼっ、と顔が赤くなる。

「ほら、行くぞセシリア。何モジモジしてんだ？」

「し、してません！わたくしを誰だと――」

「ハハッ、完全復活だな、セシリア」

笑われたと思うと、自分の前へ信が拳を握った右腕を出す。
『？』となっていると、いきなり左手で右腕を捕まれ、拳を合わせ

られた。
コンッ

「改めて、よろしくな。セシリア」

「え?え?え、ええ…」

「あっ、あともうひとつ。俺めんどくさいこと嫌いだからさ、クラス代表、セシリアに譲るよ」

ニコッ、と笑って『そっちもよろしく』と言う信を見て、また顔が赤くなる。

「本当、反則ですわ…」

ポツリ。
そう言ったセシリアの顔はどこか嬉しそうで、それでいて楽しそうだった。
セシリアは一夏に抱いたあの気持ちを、信にも抱き始めた自分を感じながら、その後をいそいで追いかけていったのであった。

そんなことのあと、クラス代表は…。

「では、一年一組のクラス代表は、織斑一夏くんに決定です!」

「ええっ!俺!?」

めでたく一夏に決定した。
何で?

俺も知らないけど。

◇

「ではこれよりＩＳの基本的な飛行操縦を実戦してもらう。織斑、オルコット。試しに飛んで見せろ」

俺たち三人の専用機持ち対決も終わり、今は織斑先生の授業を受けていた。

今日の内容は『飛行の基本』。

で、それを見せるためにセシリアと一夏が呼ばれたって訳だ。

セシリアは言われてすぐにＩＳを展開したが、一夏はもたもたしていた。

（何やってんだ、一夏。ほら、織斑先生に叩かれるぞ）

と思っている間に、何とか展開を終わらせる一夏。

「よし、飛べ」

すぐにセシリアが上昇する。

お～速いなー。

あれ？

一夏は？

……遅っ！！

セシリアはもうあんなに高いところにいるぞ。

大丈夫か？

一夏……。

何とかセシリアに追い付き、並んで飛行する二人。
なんかしゃべってるみたいだけど、この距離じゃ聞こえない。
もし聞き取れる人がいるなら、あの人しかいない。
そう、地獄耳を持つ最強の鬼教官、織斑――
バシッ！！

「何失礼なことを考えてるんだ」

……やっぱ鬼だよ、この人。
読心術まで持つとは。

「織斑、オルコット、急降下と完全停止をやってみせろ。目標は十センチだ」

随分とハードルが高い要求だ。
あの高さから急降下して地上から十センチで止まるなんて、相当難しいはずだ。

（おっ、最初はセシリアか）

先ほどの上昇よりも速いスピードで一直線に降下してくる。
そして……上手い！
流石、代表候補生！
難なくクリアー。

（次は一夏か…）

おお！
心なしかセシリアより速い気がする。
代表候補生と張り合うなんて、すごいぞ一夏！

ズドォォンッ！！！

……勢いだけだが。

いや、まてよ…。

そうか。

やっぱりお前はすごいぞ一夏。

きっと、織斑先生の『目標は十センチ』を地面から『上』じゃなくて、地面から『下』と思ったんだな。

その常識の通じない考え方、素晴らしいと思うぞ。

でも張り切りすぎだ。

二メートル位下なんじゃないか？

「そんな馬鹿なことあるか」

「……そうっすよね」

織斑先生と心が通じあった俺は、先生と同じように『やれやれ』という顔をしていた。

「大体だな一夏、お前というやつは昔から――」

「大丈夫ですか、一夏さん？お怪我はなくて？」

箒が心配の裏返しで小言を言おうとすると、そこへセシリアが割って入る。

つーか、箒…。

一夏が昔から何なのか知らんけど、お前も昔から素直じゃないんだろうな…。

人のこと言えないぞ。

（あれ？なんかセシリア楽しそうだな。笑ってるし。ん？あの顔はもしかして…。）

いや、きっとそうだな。
後で聞こう。
そんなこと考えてる間に、またややこしいことになってるし。

「おい、馬鹿者ども。邪魔だ。端っこでやっていろ」

織斑先生は相変わらず厳しいな。
生徒に馬鹿て。

「織斑、グラウンドを片付けておけよ」

ガクッ。
一夏が肩を落とす。
しょうがない。

「俺も手伝ってやるよ」

「し、信…。お前、いいやつだな…」

「今頃気付いたか？」

一夏がしてくれたことへの恩返しとしては、まだまだ足りないぐらいだけどな。
困ってるならどんなことでも、出来るだけ助けてやろう。
とはいえ、しんどいだろうな…。
覚悟を決めて、どこかに余っている土がないか探す信であった。

◇

（誰かいないかな。生徒とか、先生とか、案内できそうな人）

ボストンバッグを持った小柄なツインテールの女の子は『本校舎一階総合事務受付』を探していた。

その足は決して立ち止まることはなく、常に前進を続けていたが、いい加減イライラしていた。

（あぁ、もう！もう少し詳しく書いたっていいんじゃないの！？）

何度もポケットから出し入れしたためにくしゃくしゃになった案内書を握りしめ、より一層くしゃくしゃにしながら歩を進める。

「だから、そのイメージがわからないんだよ」

ぴたっ。

聞き覚えのある声を耳にして、初めて足を止める。

心臓の鼓動が速い。

（ひ、久しぶりだけど、あいつ、あたしのことわかるよね？だ、大丈夫。大丈夫！わからなかったら、それくらいあたしが美人になったってことだし！）

すうっと息を吸い、思いきって話しかける。

「いち――」

「一夏、いつになったらイメージが掴めるのだ。先週からずっと同じところで詰まってるぞ」

……誰？

言葉を遮られたことに対してと、見覚えのない女子が自分の知っている男子に親しげに話しかけているのに対して、苛立つ。

「あのなあ、『くいって感じ』ってなんだよ」

「……くいって感じだ」

「だから――おい、箒！」

そんな会話をしている二人の後ろを、苦笑いしながら歩いていた知らない男子と目があった。

すると、その男子が近付いてくる。

「で、どこいくんだ？」

「は？」

突然何を言ってるんだろう。

頭に『？』を浮かべていると、

「場所、わかんないんだろ。ええっと、ああ、事務受付ならこっちだ」

手に持った案内書を見て、そう言われた。

「ほら、行くぞ」

またまた突然、手を握られ、引きずられるように連れて行かれる。

「ちょ、ちょっと！誰なのよ、あんた！」

「ん？ああ、そうだったな。俺は真宮信。ここの生徒だ。君は？」

「鳳鈴音（ファン・リンイン）。今日からここの生徒よ」

とりあえず名乗られたので、こちらも名乗っておく。

「へ～、転校生？これからよろしくな。でも、この時期に来るなんて珍しいな」

「よろしく。ま、いろいろあったのよ」

「代表候補生だもんな。大変だよな」

えっ？

あたし、名前しか言ってないよね？

「なん――」

「『何で名前しか言ってないのにわかったのか』だろ。見ればわかるんだ、俺。知り合いに代表候補生いるしな」

「じゃあ、もう一つ。なん――」

「だから言ったろ？見ればわかるんだって。『何で何かを探してる

ってわかったのか』なんて聞くなよ、凰(ファン)さん。ほら、着いたぞ」

「えっ！あ、うん」

質問を先読みされたことに驚いて反応が遅れた。
何なの？こいつ。

「真宮信だ。じゃあな、凰さん」

今度は心を読まれた。
ニコッ
少年が不意に見せた笑顔に、何故か顔が赤くなる。
立ち去って行く信の後ろ姿を見つめながら、何故か速くなった鼓動を落ち着ける。

（なっ、何よあいつ）

でも、あの手。
力強くて、それでいて優しくて――

（／／な、何考えてるのよ！あたし！）

「どうかしましたか？」

信の姿が見えなくなった後、愛想のいい事務員の人が声をかけてくれた。
そうだった。
わざわざ『本校舎一階総合事務受付』まで来た理由を忘れていた。

「あっ、あの！入学手続きを…」

「ああ、凰鈴音さん？ではこちらに名前を…」

ひと通り手続きを済ませた後、さっきの少年について聞いてみた。

「あの、真宮信って誰ですか？」

「彼の知り合い？」

「い、いえ、知り合いって程じゃないんですが…」

「彼ね、凄いのよ～。見ただけでいろんなことを覚えられるんですって。何でも見ただけでわかっちゃうし。しかもＩＳの操縦も上手くて、この前は代表候補生に勝っちゃったのよ～」

「へ～。そうなんですか」

以外と凄いやつなのね。

ま、同じ代表候補生でも、あたしと戦ったら負けてたでしょうけど。

ふふん、と一人得意な顔をしていると、突然聞いたことのある名前が耳に入ってきた。

「凰さんは二組だから、真宮くんと織斑くんの男子が二人いる、一組のお隣ね」

「お、織斑って、織斑一夏ですか！？」

予想以上の食い付きに驚く事務員。

「え、ええ。彼も凄いのよ～。男の子なのにクラス代表に

なっちゃったんだから」

「そうですか。ふーん…そうなんだ……」

ついさっきまですっかり忘れていた。
知らない女子と親しげに話す一夏を思い出し、ふつふつと怒りが沸き起こる。

「あ、あの……」

「二組のクラス代表って誰ですか？」

「えっ！き、聞いてどうするの……？」

「代わってもらおうかなって。それだけですよ」

ニコッ
不安そうな顔の事務員に笑顔を見せる。
しかしその笑顔を見れば誰でも、その心の内に秘めた怒りを強く感じるだろう。

「待ってなさい、一夏……」

その少女の周りには、なんとも近寄り難い雰囲気があった。

◇

パンパン！！

クラッカーが鳴り響く。

「おめでとう、織斑くん！！」

「やったね、おりむー」

わいわい

今は夕食後の自由時間。
それを利用してあるパーティーが開かれていた。
その名もズバリ、『織斑一夏クラス代表就任パーティー』。
良かったな、一夏。
パーティーまで開いてもらえるとは。
もちろん俺《信》も飲み物を片手にパーティーに参加している。

（うんうん。みんな楽しそうだ）

ただ一人を除いて。
パーティーの主役である一夏は非常に困惑した表情を浮かべていた。

「何でだよ！信がクラス代表だろ！？」

「まぁまぁ」

俺は一夏をなだめる。

「説明してくれよ、信！納得できない！」

「えー…、めんどくさいな…。じゃあ順を追って説明しよう。まず、勝ったのは俺。ここまではいいか？」

「ああ、それは分かる」

「で、俺がクラス代表をセシリアに譲渡。これもいいか？」

「いや、そこが一番わかんない！！何で譲渡してんだよ！？」

「めんどくさいから」

「お、お前…。責任感のないやつだな…」

「ああ。だから、責任感のあるやつに任せたんだ。異論あるか？」

「…ない…わけでもない……けど……もういいや……」

一夏が降参とばかりに肩を落とす。

でも俺はともかく、セシリアまで辞退したのはなぜだろうか？

俺も正直セシリアに聞いてみたいところだ。

「なぁ、セシリア。どうして代表を辞退したんだ？」

隣にいたセシリアに、実際に聞いてみた。

「やはりＩＳ操縦には実戦が何よりの糧。クラス代表ともなれば戦いに事欠きませんもの。だから、三人の中で『一番下手な』、『一夏さん』にクラス代表を譲ることにしましたの」

グサッ！！

一夏の心に、『一番下手な』が深く突き刺さる音が聞こえた。

一方俺には『一夏さん』のほうが気になった。

やっぱり…。

「セシリア…お前…」

「なっ、なんですの？」

じーーーー

うん、絶対そうだ。

耳元に囁き、反応を確かめる。

（惚れたな？）

「／／なっ…！」

「ハハッ、そうか。そうだよな。でもまさか、セシリアがなぁー。あははっ」

「し、信さん！！」

「そう怒るなって。（笑ったほうが美人ですよー）」

再び耳元で囁く。

「／／～～～！」

一夏は『？なんでセシリア怒ってんだ？』という顔だ。

つくづくズルいな、一夏。

うらやましいぜ。

「し、しかしですね、そ、その、一夏さんも魅力的ですが、し、し

し、信さんも…その、大胆で、気になる、というか……。モゴモゴ」

「ん、俺がどうかしたか？」

「／／！なっ、何でもありません！！」

？おかしなやつだな。

顔をのぞきこんだだけで赤くなるなんて。

風邪か？

今日は早めに寝た方がいいぞ。

「ひ、人の気も知らないで…」

あれ？

心読まれた？

セシリアも結構すごいじゃないか。

「一夏は強敵だぞ？頑張れよ」

なでなで。

「／／し、信さん…。そ、そんな…。人前で…。」

「あー！みーやん、セシリア口説いてるー」

みーやん！？

誰それ！？

このゆっくりした話し方、人につける変なあだ名。

間違いない。

のほほんさん（命名・一夏）だ。

「だっ、だから口説いてないって！」

「えー？むきになるとこが、あやしーなー？」

「そうだ、そうだ」

「おい、一夏、テメッ、裏切るんじゃねーよ！」

「うるさい！どうせ俺は下手くそですよ～。あは、あはは…」

駄目だ、心へのダメージが意外と深刻だ！
なんか、性格がおかしくなっている。
早急に手当てを！
俺は一夏の肩に手をおき、必死に揺さぶる。

「一夏！大丈夫だ！お前はやればできる男だ！戻ってこい！」

「は、ははは……ハッ！お、俺は一体…？」

「よし！戻ってきたか！」

ふぅ～。
これで一安心だ。

「いっ、一夏さん？そんなに『下手くそ』なままが嫌でしたら、わ、わたくしが直接――」

グサッ！！
バンッ！！

また一夏の心に深いダメージが与えられる音が聞こえ、同時に箒が机を叩いて立ち上がった。

「あいにくだが、一夏の教官は足りている。『私が』、直接頼まれたからな」

バチバチっ!!

セシリアと箒の間で火花が散る。

そうか。

こいつら、恋のライバルか。

「お前も大変だなー、一夏」

「あは、あはは…は?はははっ、そうだ、俺は下手くそですよ~。あれ?なんか、川が見えるぞ?あ~、千冬姉だ~。おーい。楽しそうだな~、俺もそっちにいくよ~。あはは~」

「駄目だっ、一夏!その川を渡ったら戻れないぞ!!つーかキャラ崩れてんぞ!!」

バシッ!!バシッ!!

「人を勝手に殺すんじゃない。あと不要な茶番もいらん」

いてえ…。

一夏、お前の姉さんはご存命だ。

この人、不老不死かもな。

「いっ、痛っ!!……ハッ!お、俺は一体何を!?」

「戻ってきたか…」

やれやれ。

今度からは織斑先生に叩いて直してもらおう。

そんなことを考えながら夜は更けていった。

11：道に迷ってる人は大体挙動不審（後書き）

以上でクラス代表決定戦は終了です。
信も一夏も鈍いやつだぜ。

12：『いつか』って突然やってくる

『織斑一夏クラス代表就任パーティー』の翌日、俺《信》は一夏とISの操縦について語っていた。

「だからさぁ、箒も言ってただろ？『くいっ』って感じだ」

「わかるわけないだろ！頼むよ、信。もっと詳しく教えてくれよ～」

「充分詳しい説明じゃないか。『くいっ』って感じだ（笑）」

「『（笑）』ってついてるじゃないか！真面目に教えてくれよ～…」

「織斑くん、真宮くん、おはよー」

俺が一夏をからかっていると、クラスの女子が挨拶をしてくれた。
ちなみに先ほどの会話は箒の耳に届かないようにある程度小声で話していた。
もし箒が聞きつけでもしたら、竹刀でボコボコにされるからな。

「ねえ、転校生の噂聞いた？」

転校生？
ああ、昨日の迷子の女の子か。

「俺昨日あったぞ、その転校生に」

「本当！？」

「ああ。代表候補生で、名前は――」

「凰鈴音(ファン・リンイン)よ！」

教室の入口を見ると、あのツインテールの女の子が腰に手を当てて立っていた。

バーン！！

って感じに。

「鈴……？お前、鈴か？」

なんだ？

一夏の知り合いか？

「そうよ。今日は宣戦布告に来たってわけ」

物騒なこと言うな。

ＩＳだったら本当に戦争出来ちゃうんだから。

「よっ！また会ったな。無事転校出来たみたいで安心したよ。良かったな」

「へっ！？あ、ああ、もちろんよ！それと、昨日はありがと」

「どういたしまして。よろしくな、凰(ファン)さん」

ニコッ

「う、うん…」

？

何でうつむいたんだ　？

「それより鈴。何格好つけてるんだ？すげえ似合わないぞ」

「んなっ……？何てこと言うのよ、アンタは！」

うん、間違いなく一夏の知り合いだ。

それに――

バシッ！！

この聞くだけで痛そうな出席簿の音は…！！

「ち…千冬さん…」

おお、たじろいでる。

「学校では織斑先生と呼べ。さっさと自分のクラスに戻れ」

「は、はい…。あっ、一夏、逃げないでよ！！」

「さっさと戻れ」

「は、はいっ！！」

一夏と知り合いということは、織斑先生とも知り合いか。

でも完全にビビってたな。

気持ちはよ～くわかるが。

「っていうかアイツ、ＩＳ操縦者だったのか」

「なんだ、お前知らなかったのか？」

「ああ」

（ふーん、しばらく会ってなかったのか。何！？あの子も幼なじみだと…？）

一夏の表情からそんなことを読み取っていると

「一夏っ、信！」

「一夏さん、信さん！」

わっ！

いつの間にか目の前に箒とセシリアがいた。

「……今のは誰だ？ずいぶん親しそうだったな」

「あっ、あの女性とはどういう関係ですの！？」

バシッ！！バシッ！！バシッ！！

「席につけ、馬鹿ども」

なんで俺まで…。

箒とセシリアと俺は、とぼとぼと席に向かう。

朝からついてないな、俺は……。

◇

「鈴、いつ日本に帰って来たんだ？おばさん元気か？いつ代表候補生になったんだ？」

「質問ばっかしないでよ。アンタこそ、ニュースで見たときびっくりしたじゃない」

昼休みの食堂で、俺《一夏》と鈴は互いに質問を投げかけていた。

いやー、一年ぶりとなると聞きたいこともけっこうあるな。

「俺もまさか代表候補生が迷子になってるなんて、びっくりしたぜ」

信が話題に入ってくる。

ちなみに信はカレーライスを食っている。

『カレーが一番効率よく栄養補給ができるんだ』とか言って毎日カレーを食っている。

飽きないのか？

「べ、別に迷子になんかなってないわよ！ただ道に迷ってただけよ」

「「それが迷子だろ」」

俺と信がダブルで突っ込む。

バンッ！！

バンッ！！

「二人とも、そろそろ説明してもらおうか」

「そうですわ！一体その方とどのような関係なのかしら？ま、まさかつ、つ、付き合って……。二股なんていけませんわ！凰さん！」

二人ともどうしたんだ？
ていうか、テーブルを叩くな。
みんなこっち見てるじゃないか。

「は、はぁ！？あたしは二股とかかけてないし、そ、それに、付き合ってるわけでも……」

？
鈴もどうしたんだ？
そんな焦って。
しょうがない、助けてやるか。

「そうだぞ、付き合ってなんかいないぞ。ただの幼なじみだ」

「俺は昨日道案内しただけだ。それ以上でもそれ以下でもない」

俺のあとに信が続く。
？
今度はなんか不機嫌そうだ。
鈴、一年の間に情緒不安定になったのか？

「幼なじみ……？」

「あっ、そうか。箒と鈴は入れ違いになったから、お互いのこと知らないのか。ほら、鈴、前に話した剣道の道場の娘。それが箒だ。

で、箒。こいつはお前が転校したあと、小学校に転校してきて中学二年の終わりまで俺と一緒だったんだ」

「ふぅん。そう、あなたが……。よろしく」

「ああ、こちらこそ」

バチバチッ！！

あれ？

なんか火花が見えたような……？

「ンンッ！！わたくしを忘れてもらっては困りますわ！！イギリス代表候補生、セシリア・オルコットを！」

「誰？あたし、他の国に興味ないし」

「なっ…！？」

セシリアが顔を真っ赤にしている。

確実に怒ってるな。

なんか、三人とも仲悪そうだな。

仲良くしろよ。

「お前、本当にズルいな」

信が小声で話しかけてくる。

「？何がだ？」

「そこか！？お前のそういうところか！？自覚してないところがい

いのか!?それが原因なのか!?」

「信までどうしたんだ!?」

まったく、わけがわからない。

でもとりあえず、なんかややこしいことになりそうだ。

◇

（何なんだ、あいつは。幼なじみキラーか!?）

俺《信》は今日の出来事を思い出し、一夏に嫉妬していた。

（完全に好きってわかるじゃないか。付き合ってる?って聞かれたとき動揺しまくってたじゃないか!?）

一夏は今、第三アリーナで練習してて部屋にはいない。

箒とセシリアに特訓してもらっているらしい。

このままだとそのうち専属コーチが三人になるぞ。

「いいなぁ、まったく…」

なんか急に眠くなってきた…。

まぶたを閉じると久しぶりに夢を見た。

ん…。

どこだ?ここ…。

「どう?」

「本当にやるのか?」

誰だ?

声に出そうとしたが、口に拘束具がされていて、出せない。

動こうとすると、首、両手、両足にも付いた拘束具が音を立てる。

「いいのか?まだ試作品(プロトタイプ)なんだろ?下手をすれば、貴重な存在を二つも失うぞ」

「大丈夫よ。私が保証するわ」

「そうか、わかった…」

気が付けば、周りにはたくさんの科学者と医者がいた。

何をする気だ!?

嫌な予感しかしない。

逃げ出したい。

「おい!暴れるんじゃない!」

知ったことか!

俺は必死で抜け出そうともがく。

「っ!くそ!」

バチッ!!

俺の全身に痛みが走る。
とたんに意識が遠のく。
ち…くしょう。
目の前が暗くなった。

次に目の前が明るくなったとき、今度は知っている場所にいた。
あれは…一夏と箒だな。
それと、誰だ？
顔は見えないが、髪は金髪でオレンジ色のＩＳ？に乗っている。
三人は仲間のようだ。
だが、どうやらピンチらしい。
そこで俺は三人が戦っているやつに気付く。
真っ黒の塊が無理やり形を作って人型になる。
ちらっと、黒い塊に飲み込まれる銀髪の髪の長い女の子が見えた。
なんだ？アイツ…。
ＩＳ…なのか？
でもさっきの銀髪の女の子を取り込んだ…よな？
突然、一夏が黒いやつに突っ込む。
しかも、白式を展開してない。
馬鹿野郎！
死ぬ気か！！
そして黒い人形が一夏に刀を降り下ろして――

ガバッ！！

「なんだよ、それ…」

俺は酷く混乱していた。
一つは自分の過去をまた見たせい。
そしてもう一つは……。

「一夏が…危ない？」

嫌な夢だ。
もしかして、俺がアイツに嫉妬したからか？
だとすれば…

「最低だな、俺…」

恩人があんな目に合う夢を見るなんて…。
自分が嫌になる。

（こんなにはっきりした夢を見たのは、入学式の夜の――）

ピタッと俺の思考が一瞬止まる。
そうだ。
あの日の夜見たのは、予知夢だった。
確率は低いと思うが、これも予知夢だったら？
正夢になったら？

（いや、まさかな…。ＩＳ学園が簡単に敵を迎え入れるわけない。
それにあのときの夢では、あり得ない人があり得ないことしてた）

織斑先生がコーヒーに塩入れるなんて。
ふふっと思わず笑ってしまう。
あの人がそんなアホなことするわけないじゃないか。
今のところ夢の的中率は二分の一。

半々だ。
外れる可能性は充分ある。
でも……

「一夏。もしお前がそうなったら、俺が助けてやる」

一人でそんなことを呟く。
ここで、自分が大量の汗をかいているのに気付いた。
時間は……アレ？
三十分しかたっていない。
ずいぶん長い時間、寝てた気がするんだけどな。

（まぁいいや。シャワー浴びるか…）

ザァァ……

シャワーを浴び終えて、体を拭き、服を着る。

（ふぅ。すっきりした。これからどうしよ――）

＼最っっっ低！女の子との約束をちゃんと覚えていないなんて、男の風上にもおけないヤツ！犬に噛まれて死ね／

なっなんだ！？
この声、凰さんか？
いや、でも隣は一夏の部屋で……。
驚いてドアを開けると、ちょうど凰さんも一夏の部屋から出てきた。
ドアを思い切り閉めて出てきた女の子は、泣いていた。
俺が呆然と立ち尽くしていると、ドアの前で涙を拭いていた女の子と目があった。

「待て！ストップ！止まれ！」

「…まだ何もしてないじゃない」

「見たらわかる。どうせすぐ逃げ出すだろ？」

「……」

「はぁー。ちょっと来い」

手を握って逃がさないようにし、俺の部屋に連れていく。

◇

いきなり手を捕まれて、ただでさえ混乱している鈴は、更に混乱した。

「！ち、ちょっと、放してよ、変態！泣いてる女の子部屋に無理やりつれこむなんて、最低よ！」

「泣いてる女ほっとくよりマシだ！」

突然怒鳴られてびっくりする。

何よ、こいつ。

優しくしてくれたり、怒ったり、わけわかんない。

「いいから入れ。言っとくが俺は変態じゃないから安心しろ」

渋々、信の部屋に入る。
何もない。
それが感想だった。
あるのはどの部屋にも初期装備されているものと、パソコン、テレビだけだった。

「ほら、これ飲め。そして少し落ち着け」

無理やり手渡されたお茶と信を見比べる…。
まさか…

「睡眠薬なんて入れるわけないだろ？俺をどんなやつだと思ってるんだ？少しは俺を信用しろ」

「ごめん…」

近くにあった椅子に座り、信と向き合う。

「どうしたんだ？いったい？」

「見れば、わかるんでしょ…」

「じゃあ、俺から言っていいのか？」

「……笑わない？」

「笑うわけないだろ」

それから鈴は、胸に抱えた不満も不安もすべて信に話した。

一夏との約束のこと、自分がどれくらい一夏に会うのを楽しみにしていたか、両親のこと、一夏との思い出……。
信は口を挟むことも、うなずくこともせず、ただ聞いてくれた。
そのすべてを見抜くような視線と、吸い込まれそうな瞳は自分という人間を静かに見守ってくれた。
その目を見ていると何でも相談できる気がして、何もかも話した。
ふと気付くと心がスッキリしていた。

「……そうか。頑張ったな」

もうこれ以上話すことはない位話したあと、信が言ったのは、それだけだった。
でもその一言にすごく救われた気がして、また涙が出てきた。

「おいおい、泣くなよ。もう大丈夫だろ?」

そう言って頭を撫でてくれる人がいるのが、とても嬉しくて、よけい涙が出てきた。
今度は嬉し泣きだ。

「な、泣いて、なんか、いないわよ…。ばかぁ…」

信はしゃがんで、座っている自分と同じ目線になる。
ただじっと見つめてくるその瞳から、目がそらせない。
顔と顔がこんなに近いのに、動けない。

「いいか、今回ばかりは一夏が悪い。お前が怒るのは当然だ。だけどな、アイツがどれだけ鈍いか知ってるだろ?」

信は鈴を見つめたまま、話を続ける。

「もし、今日みたいに泣きたくなったら、俺の部屋に来い。話ぐらいは聞いてやる。いいな？」

こくり、とうなずく。

「よし、じゃあこれでこの話は終わりだ」

ニコッと笑った信の笑顔にドキッとする。

（な、何なのよ、まったく…）

「あー、あと…えっとな…」

「？何よ？」

「さ、さっきは怒鳴って悪かった、よ…。凰さん」

と信が手をあわせて謝る。

「……ぷっ」

別人のようにおろおろしている信がとてもおかしくて、吹き出してしまった。

「あははっ！本当にわけわかんないわね、アンタ。突然怒ったり、謝ったり。いいわ、許してあげる」

「あ、ああ。ありがとう」

「あと、その『凰さん』ってやめてよね。気持ち悪い。『鈴（りん）』でいいわ」

「わかった。鈴。で、これからどうするんだ？」

「取り敢えず、一夏が謝るまで無視するわ。あたしがどれくらい怒ってるか、見せつけてやるんだから」

「そっか。まあ、あいつも一回痛い目みないとわかんないだろうからな」

二人は顔を見合わせ、ニヤリと笑う。
子供がイタズラを考えているように。

「じゃ、お休み、鈴」

「うん！お休み！信！」

元気よく応えた鈴の顔はとても晴れやかだった。

（不思議なやつ。一緒にいると、気持ちが楽になって、なんだか、ずっと側にいたくなるような――）

自分の部屋にダッシュで戻る途中、そんなことを考えて、頬が赤く染まる。

（なっ、なに考えてるの！あたし！あたしが好きなのは、いち――）

「／／～～っ！なんなのよ！アイツら！」

言葉とは裏腹に、鈴は笑顔で廊下を駆けて行った。

ちなみに……。

「よお、一夏……」

「あっ、信！聞いてくれよ、鈴も箒も酷いんだぜ」

「いや……。お前が一番酷い……」

「ど、どうした、信？な、なんかおかしくないか？」

「お前のようなやつはできるだけ苦しんで地獄へ堕ちろ……」

「恐っ！どうしたんだ！？」

「お前、今度俺と戦え……」

「なっ、なんで？」

「俺が直々に地獄に堕としてやるよ…」

「は？や、やだよ…」

「うるさい！この鈍感野郎が！もう一度よ～く考えろ！約束の意味！」

「え、鈴とのか？タダ飯――」

「……報われないな、あいつも…」

「なんだよ?ていうか、信。なんで鈴との約束――」

「一夏、正直言うと今、俺はおまえをボコボコにしたい」

「はっ?な、何なんだよ!?恐い!ホントに恐い!」

「だが、その役目は鈴に譲ろう。いいか、一夏!いつか鈴がお前をぶっ飛ばすからな!」

一夏はまったく意味がわからなかったが、取り敢えず一番は信がなんで鈴との約束を知っているのか不思議でしょうがなかった。

◇

「まさか一回戦からあたるとは……」

ピットで一夏が呟く。

「そうだな。俺も同感だ」

俺《信》も本当にそう思う。

まさかこんなに早く『いつか』が来るとは…。

「はっ!信!まさかあのとき、すでにこれを知っていて…」

「俺が言ったのは、組み合わせ発表の前の日だったろ？」

「そうか…。やっぱり偶然か？」

クラス対抗戦（リーグマッチ）、第二アリーナ、第一試合。

一組代表・織斑一夏　ＶＳ　二組代表・凰鈴音

まさか初戦からこうなるとは思っていなかった。

「凰さんのＩＳは『甲龍（シェンロン）』。近接特化型ですわ。わたくしのときとは勝手が違いましてよ」

「緊張するな。練習の通りすれば勝てる」

セシリアと箒が一夏を激励する。

この二人は熱心に教えていたからな。

あのやり取りのあと、途中から俺も特訓に混ざったんだが、どちらかと言うと一夏への憂さ晴らしの感が強かったので教えたことは何もない。

「一夏」

「なんだ、信」

「頑張ってこい」

「そこは『勝ってこい』じゃないのか？」

「複雑な心境なんだよ、俺は」

鈴も応援したいし、かといって一夏を応援したくない訳じゃない。

でも、あのときの鈴の顔を思い出すと……なんかなぁ。

「わかった。やるだけやってみる」

「おう」

コンッ

俺と一夏お決まりの、お互いの拳を合わせる儀式を終える。

「行ってくる」

そう言って一夏は鈴の待つ戦場へと飛び出していった。

◇

試合開始からしばらくして、不思議ことが起こった。

「なんだ、あれは…」

試合の様子がうつしだされているリアルタイムモニターを見ながら、箒が呟く。

「ああ。なんで一夏がいきなりぶっ飛んだんだ?」

信も疑問に思っているようだ。

モニターにうつったのは、不適な笑みを浮かべる鈴と、『何か』に吹き飛ばされた一夏の姿だった。

「あれは『衝撃砲』ですわね。ブルーティアーズと同じ、第三世代型兵器ですわ」

セシリアが二人の疑問に答える。

「砲身も砲弾も見えないなんて、やりづらいな」

「しかも、あの武器、砲身の斜角がほぼ制限なしに撃てるようです」

「死角がないってわけか…」

信の意見に山田先生が捕捉を加える。
信が試合を見る目はいつも真剣だ。
まるで、細かい動作一つも見逃さないようにしているかのように、瞬きすらしていない。

（一体、何を考えているのだろうか）

箒はときどき、この少年がどのように世界を見ているのか、疑問に思うことがある。

「ん？一夏のやつ、何かするつもりだ…」

「そうですね…。織斑くん、何をするつもりでしょうか」

「おそらく、『瞬時加速（イグニッション・ブースト）』だろう。私が教えた。上手く使えれば、あいつでも代表候補生と渡り合える」

信と山田先生の疑問に答えたのは、今度は織斑先生だった。
確かに、一夏の動きが相手を翻弄するように素早い動きになった。
確実に相手を仕留めるため、隙を作り出そうとしている。

「それに」

織斑先生が続ける。

「加速するタイミングがうまいやつとよく模擬戦をやっていたみたいだしな。イメージもしやすいだろう。そうだな、真宮？」

そうか！

一夏との特訓でときどき見せた、あの加速は瞬時加速だったのか。

信は驚くほどＩＳの操縦が上手くなっていた。

相手を翻弄し、わずかに出来た隙を見逃さず、かといって深追いする訳でもなく。

そう、まさに『蝶のように舞い、蜂のように刺す』戦法をとてつもなく器用にこなすのだ。

しかも、一夏との特訓のときは『威力が有りすぎる』と朧火を使用せず、素手で雪片弐型と戦っていた。

「そうっすね、何回も懐に飛び込んでやりましたから、突撃のイメージはあると思います。でも…」

「でも、なんだ？信」

信がモニターを見ながら何か考え始めたのを見て、箒は続きを促す。

このまま考え込まれたら、続きが聞けないだろうと思ったからだ。

「セシリア、箒」

「なんだ？」

「なんですの？」

「俺と一夏の戦い見てたよな」

「ええ、もちろんですわ」

「あのとき俺が何回、瞬時加速使ったか、わかるか？」

「ああ、懐に飛び込むときと、離脱するときに一瞬速くなったやつだろう。それだったら、数えきれないほど――」

「ゼロだよ」

「――は？」

「あれは普通の加速だ。瞬光は普通のＩＳより速いからな。瞬時加速は使ってない。だから、一夏に瞬時加速のイメージはない――」

「ち、ちょっと待て！あの速さが普通だと言うのか！？」

箒は特訓の様子を思い出していた。

信の動きはただの移動一つとっても速く、攻撃と離脱はハイパーセンサーでなければ追いつけないスピードで繰り返していた。

明らかに通常のＩＳの加速よりもケタ違いのスピードを出していた。

瞬光が速いのは知っていたが…。

（あれが普通だと…！？）

セシリアもこれには驚いたようで、信じられないという顔をしていた。

山田先生は箒とセシリアを見て、『そ、そんなに速かったんですか！？』という顔をしている。

「ふっ、そうか。だが篠ノ之とオルコットの反応を見ると、心配は

いらないようだぞ？」

織斑先生だけが落ち着いて話を進める。

「そうですか。弟さんのお役に立てて光栄です。今度俺にも教えて下さいよ」

「どうせ、やろうと思えば出来るんだろう？世界大会では当たり前のテクニックだからな。動画で何回も目にしているはずだ」

「見るのと、実際にやるのは、違いますよ」

「ふっ。お前がそれを言うか？」

「ハハッ。そうですね」

二人とも、非常に楽しそうである。

前々からこの二人には共通点を感じていた。

それが今やっとわかった。

この二人は、強さの底が見えない――

ズドオオオオン！！！

突然の轟音と、強いゆれがアリーナを襲う。

「！？なんだ！？」

「あ、アリーナに侵入者！これは…」

モニターにうつったのは、一夏の白式でも、鈴の甲龍でもない、不

吉なオーラを放つ不気味なＩＳだった。

１３：塩と砂糖って間違えると大変（前書き）

戦闘シーンとかうまく書けない……

１３：塩と砂糖って間違えると大変

「なんだあいつ！？」

俺《信》は突然現れた黒い全身装甲（フルスキン）のＩＳを見て叫ぶ。

あんなＩＳ見たことがない。

腕が異常に長いし、顔に付いているセンサーと思われる目のようなものが変に不規則だ。

バランスは悪そうだし、あんなセンサーの配置で視界もいいはずがない。

普通なら絶対使われることがないはずだ。

あんな機体が戦えるはずがない。

「試合中止！織斑、凰！ピットに戻れ！」

織斑先生が一夏たちに退避を命じる。

だが一夏たちはおろか、観戦していた生徒たちの避難すら間に合うかわからない。

なぜならば…

「ダメです！アリーナの遮断シールド、レベル４でロック！各緊急避難用通路の扉も同様です！」

山田先生がシステムを必死に調べているが、ロック解除には相当時間がかかるだろう。

『お前、何者だ！何が目的だ！』

一夏の声が開放回線（オープン・チャネル）を通して聞こえてくる。

間違いなくあの不気味なＩＳにも届いているはずだ。
しかし、相手は答えない。

「織斑くん！凰さん！今すぐアリーナから脱出してください！すぐに先生たちがＩＳで制圧に行きます！」

「でも山田先生、シールドレベルが――」

「安心しろ。すでに三年の精鋭に連絡して作業に当たっている。現在もシステムクラックを実行中だ。遮断シールドを解除出来れば、すぐに部隊を突入させるし、脱出も可能だ」

俺の言葉を遮って、織斑先生はすでに対策がたてられていることを知らせてくれる。
だけど、裏をかえせば…

「それまでは何も出来ないってことか…」

『先生』

一夏だ。

『先生たちが来るまで俺たちで食い止めます』

「何言ってるんですか！？ダメです！危険過ぎます！！」

『鈴、いいな？』

『だ、誰に言ってんのよ。そ、それより離しなさいよ！動けないじゃない！』

「織斑くん！凰さん！聞いてます！？聞こえてますー！？」

山田先生の声はもう二人に届いていない。
すでに戦闘を始めた白式と甲龍に何を言っても無駄だろう。

「まぁ、落ち着け。本人たちがやると言っているんだから、やらせてみてもいいだろう」

「お、織斑先生！？でも…！」

なるほど、さすが元世界最強。
とても落ち着いているように見える。
表面上は。
俺でも注視しなかったら、その内心の焦りを見ぬけなかったろう。

（やっぱり、一夏のことが心配なんだな。どうしてこう、あいつの周りの女性は素直じゃないんだろうか？）

知らず知らず、口元が緩む。
だが、次の一瞬で俺の顔から笑顔が消えた。

「山田先生、コーヒーでも飲め。糖分が足りないからイライラするんだ」

「……織斑先生、それ、塩ですよ」

「……」

山田先生の冷静なツッコミに顔を赤くする織斑先生。

対照的に、俺は青い顔をしていただろう。
あり得ない、そんなわけないと思っていた。
でも…これはあのとき見た夢の内容だ。
これも事実になった。
と、いうことは…

（一夏がやられる？）

所詮、夢だ。
それはわかる。
でもだからって、無視していいのか？
頭に、黒いＩＳに向かって突進していく一夏の姿がよぎる。
あのときのやつとは、違う。
それもわかる。
でもだからって、結果も違うと言えるだろうか。
俺にはそう断言出来ない。
モニターには、四回目の攻撃を避けられ、明らかに攻めあぐねている一夏と鈴の姿があった。
そろそろシールドエネルギーも限界のはずだ。
今、俺がすべきことは――

「二人を助けに行きます」

「えっ！ま、真宮くん！？」

動揺する山田先生を背に、俺は二人のもとへ急いだ。

◇

「なぁ？鈴」

「何よ？」

俺《一夏》は鈴が作ってくれた　チャンスを計四回無駄にして、ある仮説が頭に浮かんだ。

「あいつの攻撃、機械じみてないか？」

「はぁ？ＩＳは機械でしょうが」

「いや、そうじゃなくて…。あれ、本当に人が乗っているのか？」

あの、不気味なＩＳ。
何を考えているか、まったくわからない。
そこがおかしい。
今もまったく攻撃をしてきていない。
なぜだ？
普通、敵がこんなに話をするのをただ待っているはずがない。

「あり得ない。ＩＳは人が乗らないと動かないようにできてるもの」

鈴が俺の意見を否定する。
だが、それ以外に説明がつかない。

「仮に、仮にだ。あいつが無人機だったら？」

「なに？無人機だったら、勝てるって言うの？」

「無人機だったら、全力で攻撃しても大丈夫だしな」

俺が少し笑ったのを見て、鈴が不思議そうな表情をする。

「何か作戦でもあるの？」

作戦ってほどでもないけどな。

でも、やってみる価値はある。

「ああ。鈴、俺が合図したら――」

ズドオオオオン！！！

突然の轟音に俺の言葉はかき消される。

「な、何！？」

鈴が驚きの声を上げる。

敵のちょうど隣に、何が落ちてきた。

落下地点から黒い煙が上がる。

その立ち上った黒い煙の中で何が動いた。

ゆっくりと、もう一機のＩＳが姿を現す。

よく見ると、いや、よく見なくても、間違いない。

今戦っているＩＳと同じやつだ。

似ているとかそういうレベルじゃない。

同じだ、すべて。

「なっ…！」

まずい。

こちらはエネルギーが限界。
対して相手側はほぼ無傷。
しかも、完全に無傷のやつが追加された。
恐らく、外見と同様に機体のスペックも同じだろう。
作戦でどうこうなる問題じゃない。
無理だ、勝てない。

（ダメだ！心まで折れたら終わりだ！）

必死で闘志を燃やす。
しかし、それはとても弱々しく、風が吹けば消えてしまうようなものだった。

「ど、どうすんのよ！一夏！」

バキッィィィン！！！

俺が答える前に、ガラスが割れるような音が響いた。
俺も鈴も、敵二人も無意識にその方向を向く。
その一瞬がとてもゆっくりに感じられた。
だが、そこには何もない――

ドゴオオオオン！！！

――わけじゃない、見えなかったんだ。
吹き飛ばされた二機の黒いＩＳの代わりに、別の黒いＩＳが一機、その場所に立っていた。
操縦者はいつものように人懐っこい笑顔をこちらに向けた。
その笑顔はいつもよりも優しく、頼もしく見えた。

「よっ、元気か？二人とも」

「「信！」」

◇

我ながらナイスタイミング。
ちょうど敵機が追加された時にアリーナの観覧席に到着。
展開していた朧火で無理矢理シールドバリアを破壊し、同時に瞬時加速。
初めてにしては上出来だったと思う。
で、並んで立っていた敵を二機、まとめてぶっ飛ばした。
アリーナの脇まで飛んでいった未確認ＩＳはしばらく動けないはずだ。

「大丈夫か？まったく、お前ら無茶にもほどがあるぜ」

「信、どうやってここに？」

俺《信》が一夏と鈴に近寄り、声をかけると、まだ立ち上っている砂ぼこりを見ながら、一夏が俺に質問をする。

「あー…、ここに来るまでロックされた扉を無理矢理ぶっ壊した。で、今シールドも壊した。正直、この戦いが終わったあとの織斑先生のほうが怖い…」

「「あー……」」

二人とも苦笑い。
俺より織斑先生と付き合いが長いから、罰則の想像がしやすいんだろう。
…俺もだいたいわかるけど。

「ま、今はそれより、あいつらだ。何なんだ？そろそろ立ち上ってきてもおかしくないぞ？」

先ほどの攻撃は所詮ただの蹴りだった。
当たりどころがいくら悪くても、倒れている時間が長すぎる。

「ああ。あいつらたぶん、人が乗っていない」

「……嘘だろ」

「ほら！そんなことあり得ないのよ、一夏！」

鈴がここぞとばかりに食って掛かる。
一夏は『だってさぁ…』と言い返している。

「まぁいいや。で、勝機は？」

「ある」

「言ったな？」

俺と一夏は顔を見合せ、ニヤリと笑う。
ピピッ！！！
――熱源感知。一時の方向から射撃。

瞬光から送られてきた情報通り、すぐにビームがとんでくる。
俺達は急上昇してそれをかわした。
ユラリと二機のＩＳが姿を現す。
どうやら休憩時間は終了らしい。
見れば見るほどそっくりなＩＳだが、蹴りが頭に入ったやつは、頭が少しへこんでいた。

「俺は頭がへこんだやつの相手をする。もう片方は任せた」

「わかった。鈴！」

「聞こえてるわよ！」

「俺が――」

一夏の声は聞こえていたが、目の前のＩＳ（へこんだやつ）は俺にその内容まで理解させるつもりはないらしい。
再びビームを撃ち込まれた。

「っと！上等だ！覚悟しろよ！」

俺は体をひねって必要最小限の動きでかわす。
セシリア戦でも使った、お得意のビーム回避法だ。

「うおおおお！」

回避してすぐ、懐めがけて加速する。
瞬時加速こそ使っていないが、普通なら反応できないであろう速さだ。
相手は無駄に長い腕を振り回し、俺を殴ろうとする。

俺は後退と前進、敵の死角に入っては出てを繰り返して、ヒラリヒラリとかわす。
でも、相手も馬鹿じゃないらしい。
タイミングをずらされ、避け損ねた拳が左からとんでくる。
この速さに反応してくるとは、やるじゃないか。
だけど……

「甘い！！」

俺は拳を両手でつかみ、右足を軸にして、体を勢いよく回す。
しかも、腕のスラスターで瞬時加速を部分的に発動させ、勢いをプラス。

「くらえ！」

俺は黒いＩＳをアリーナの地面に向かって投げ飛ばす。
ズドオオオオン！！
衝撃で地面がえぐられる。

「よし！いち――」

「一夏！！」

「なっ！箒！？」

俺の言葉を遮ったのは箒だった。

「男なら…男なら、そのくらいの敵に勝てなくてなんとする！」

どうやら俺の壊した扉を通ってアリーナまで来てしまったようだ。

『……』

キュィィ……

まずい！

一夏たちの戦っているＩＳが箒の方に照準を合わせ、ビームのチャージを始める。

「箒！逃げ――」

ドンッ！

先ほど投げ飛ばしたやつが俺の脇腹に突撃した。

「ぐっ…！邪魔だ！」

俺は怒りにまかせて相手を殴ろうとする。

しかし殴るのよりも先に俺に光線が当たった。

腹に強力な熱線をくらって、その衝撃で気を失いそうになる。

「かはっ……！」

思わず腹を抱え込むような体勢になり、視野から敵が消える。

気付いたときにはもう遅い。

もう一度視野にとらえる前に右から強烈な打撃攻撃をくらう。

何とかこらえたが、エネルギーを大分持ってかれた。

しかし一番の問題は、もう俺には箒を助ける時間がないということだ。

「くそ！」

再び突撃してきたＩＳを踵落としで地面に叩きつける。
敵は地面に激突。
落下地点から、砂ぼこりが上がる。

「一夏！頼む！！」

「任せろ！」

そう言った時にはすでに一夏は鈴の龍砲を背中にうけ、瞬時加速。
雪片弐型で敵に斬りかかっていた。

ザシュッッ！！

雪片弐型が敵の腕を切り落とす。
切り口からは血は出ず、オイルのようなものが吹き出した。
腕を失ったにもかかわらず、躊躇なく相手は残った腕で一夏を殴り飛ばす。
そして、無防備な一夏のまさに目と鼻の先でビームのチャージを始める。

「一夏！離れろ！！」

俺の叫びを聞き、ニヤリと笑う一夏。
安心しろとでも言うように。

「狙いは？」

「完璧ですわ！！」

一夏の呼び掛けに答えたのはセシリアだった。
専用ＩＳ『ブルー・ティアーズ』を展開し終えて、すでに攻撃体勢のビットの照準は寸分の狂いもないだろう。
ビットから放たれるビームが敵に当たり、一夏から離れるように後退する。

「さすが！」

「当然ですわ！」

敵はよろめいて少し怯んだように見えた。
ダメージが蓄積し、機体制御システムがうまく働いていないのだろう。

「もう一息だ！」

「セシリア、決めろぉ！」

「了解ですわ！」

俺と一夏に答え、手に持った銃器『スターライトｍｋ？』の引き金を引く。
放たれた光線は敵の体の中心部を撃ち抜いた。

「やっぱいい腕しー―」

『熱源感知。下方から射撃に注意』
瞬光からの情報に従い、素早くやや左斜め上に上昇、回避行動をとる。

「待ってろ、信！今助けに――」

「一夏！！まだあいつ動いてる！」

鈴の叫びに、俺も一夏も先ほど撃破したはずのＩＳを見る。
動けるはずのないほどのダメージを受けながら、腕の発射口だけを一夏に向けている。

「うおおおおお！！！」

一夏が雄叫びを上げて斬りかかる。
頭の中でその姿が夢の内容と重なる。
駄目だ、間に合わない…！

「やめろぉぉぉ！！！」

刹那、白式が淡いピンク色の光線に包まれた。

ザシュッッ…！

光線に包まれるのとほぼ同時に、雪片弐型が今度こそ敵を仕留めた。
光線が消えると、白式も待機状態のガントレットに戻った。

◇

「一夏！！」

鈴は倒れている一夏に駆け寄る。

うつ伏せから仰向けに体勢を変えさせ、無事を確認する。
どうやら気絶しているだけのようだ。

「鈴！」

信が敵を殴り飛ばしてから鈴の隣に来てしゃがむ。

「無事か？」

「うん、なんとか。ただ気絶してるだけみたい」

「そうか…」

不安そうだった顔が安堵の表情に変わる。
しかしそれは一瞬で、信はすぐ真面目な顔になった。

「セシリア。二人を頼む」

『えっ！信さんはどうしますの？』

オープンチャネルからセシリアの声が聞こえる。
鈴も同意見だった。

「あの子の言う通りよ。あんたどうするつもり？まさか、一人で戦うとか言うんじゃないでしょうね？」

「鈴―」

「駄目よ。あたしも戦う。今ここで一番強いのは、あたしなんだから」

そうだ。
代表候補生の意地がある。
ここで退くわけにはいかない。

「…鈴、頼んだ」

「何言ってんのよ！私も一緒に戦う！」

信は今しがたダメージから回復し、立ち上がった敵と向き合う。
鈴の言葉など耳に入ってないようだ。

「ちょっと！無視――」

「…鈴」

肩に手を掛けようと伸ばした腕が信と自分との間で止まる。
名前を呼ばれただけなのに、体が動かなくなる。
相手のＩＳもたじろいだように動きを止める。

「…俺はお前を守れるほど、冷静でいられる自信がない…」

信からは、刺すように鋭いプレッシャーと、押さえきれない怒りが止めどなく流れ出していた。
――怖い。
別に信が怖い訳じゃない。
自分を助けてくれたあの少年が、どこか知らない場所に行ってしまいそうな気がした。
それが怖かった。

「……信」

返事はない。
だけど言っておかなければならない。

「あたし、信が来てくれて、すごく嬉しかった。助けに来てくれて、本当に嬉しかった。安心した。だから…」

絶対に聞こえるように、届くように、叫ぶ。

「ありがとっ！」

一拍おいて、信がこちらを振り向き、笑う。

「どういたしまして」

鈴はその笑顔を見て、確信した。
理由はわからないし、根拠もない。
だけど、この少年は強い。
どこにも行かない。
きっとまた助けてくれる。

「今度絶対にお礼するからね！絶対よ！逃げるんじゃないわよ！」

そして、一夏を抱えてアリーナから出ていった。

◇

俺《信》は皆がアリーナから出たのを確認し、ふぅーと長い息をはく。
さっきまでは、一夏を守れなかった自分と、あのＩＳに対しての怒りで感情的になっていた。
だけど、鈴の言葉で正気に戻れた。
俺に感謝してくれた。
俺が来て嬉しかったと言ってくれた。
その事が怒りを静め、俺に冷静さを取り戻させた。

「さてと……待たせたな」

右手に朧火を展開させる。
今回は形を指定せず、拳に纏ったままにしておく。
俺が武器を展開させたのを見て、相手は両腕の砲門からビームを放つ。
だが、発射されたときはすでに俺は上空にいた。
ビームが当たり、さっきまでいた場所が爆発する。
敵機が俺を探して頭を動かす。
数秒で上空の俺に気付き、もう一度照準を合わせるためにこちらを向く。
チャージが始まる。

（今だ！）

このタイミングで瞬時加速を発動。
数十メートルの距離を一気に詰められ、次の行動の選択にもたつく敵機。
だが俺にとってそんなことはどうでもいい。
何を今さらしたって、間に合わない。
懐に入り、拳を握り、腕だけ部分瞬時加速させて右ストレートを放

つ。
この間およそ二秒。
通常の何倍の威力にもなった朧火を纏う拳は、全身装甲の機体に風穴をあけた。

「じゃあな、化け物」

腕を引き抜き、剣状にした朧火で敵を叩き斬る。

ドォォォォン！！

真っ二つになったＩＳは目の前で爆発した。
もちろん近くにいた俺も爆風に呑み込まれたが、まだシールドエネルギーが残っていたので俺自身にダメージが及ぶことはなかった。
つくづくＩＳって便利だ。

「よし、これで――」

『お帰り……』

突然、頭の中で声が聞こえた。
同時に心臓を掴まれているような感覚が俺を襲う。
息が、出来ない。
苦しい。

「ぐっ…はっ……！だ……れ…だ？」

『また、戦うんだね……？』

目の前が真っ白になり、その中心に少女が立っている。

何だか昔から知っているような気がする。
少女は嬉しそうな、悲しそうな、あるいは困ったような不思議な顔をしている。
そして、俺に手を差し伸べる。

『必要になったら、呼んでね。助けるよ。君を――』

そこで俺は気を失った。

１４：友達の友達はやっぱり友達

「ん…？」

俺《信》が目を開けると、織斑先生が顔を覗き込んでいた。

「目が覚めたか」

先生は安堵の表情を浮かべる。

「俺は……」

「安心しろ、お前は勝った。敵は跡形もなく吹き飛んだよ」

そうだ。
俺が勝った。
でも、そのあと…

「俺はどうなったんですか？それにここは…？」

「私にもわからん。部隊と共に駆け付けたときにはボロボロになったＩＳ一機とお前が倒れていた。ここは保健室だ。怪我人をほかのどこへ運べというんだ？」

ＩＳを吹き飛ばして、誰かの声が聞こえて、苦しくなって、気絶。
自分でも訳がわからないなんて、情けない。
そんな自分を嘆いていると、一番大事なことを思い出した。

「一夏！一夏は？」

織斑先生は無言でちょいちょいと隣を指差した。
カーテンの隙間から一夏の顔が見えた。
どうやら寝ている。

「一時的な眠りですよね」

「私の弟がこんなことで永眠などするか、馬鹿者が」

「ですよね…」

はは…、とひきつった笑い顔を作る俺。
そうか、無事だったか。
よかった…。

「……がとう」

「は？何ですか」

いつになく小さな声の先生を不思議に思いながら、聞き返す。

「お前は弟を助けてくれた。ありがとう。感謝する」

そう言って頭を下げる先生を見て、一瞬思考が停止する。
一瞬。
本当に一瞬で、俺の思考が再開される。

「な、何で頭とか下げてんすか！？やめてください！一夏を助けたのは鈴ですよ！？」

その通りだ。
俺は一夏を助けてやれなかった。
アリーナから運び出したのは鈴なのだから、助け出したのは鈴だ。

「凰は『お礼なら信に言ってください』だとさ。まったく、私は誰に感謝すればいいのだ？」

そんな困ったような顔で言われても。
うーん、そうだな。

「一夏に言えばいいんじゃないですか？『よく頑張ったな、お前は私の自慢だ』とか」

「怪我の具合は随分いいようだな。グラウンドを三百周くらい走れば、体が暖まって、より早く回復が進むんじゃないか？」

「……」

くそ、鬼め。
照れ隠しとわかっていても、本気でさせられそうで怖い。
話題を変えるか。

「そ、そう言えばアリーナの扉の修理とかどうすんのかな～」

俺は発言途中で墓穴を掘ったことに気付く。
扉壊したの、俺だ。
ぐあ～！しまった！
自分から罰則を受けるような話題をふってしまった。
ふわふわした感じで忘れてくれてたかもしれないのに。

「ああ、未確認のＩＳの流れ弾が当たって壊れた扉か。修理に時間がかかるが、なんとかなるだろう」

織斑先生がイタズラっぽく笑う。

「今回は目をつぶる、ってことですか？」

「借りは作ったままだと気持ちが悪いのでな。私なりの感謝の印だ。まぁお前がいらないと言うなら――」

「いえ！有り難く頂戴いたします！」

断ったりしたら、とんでもない量の反省文を書かされる。
その上さらに罰則を食らうに違いない。
主に肉体的な。

「それでいい。人の感謝は素直に受けとるべきだぞ？」

織斑先生は立ってカーテンを開ける。
もう行ってしまうらしい。

「…俺、今まで感謝されたことなんて、片手で数えるぐらいしかなかったんです」

俺に背を向けて立ち去ろうとする先生に話しかける。
先生は振り向かないが、立ち止まってくれた。
恨まれたり、憎まれたり、そういうのが日常だった。
いや、日常だと思わなければやっていけなかった。
この学園に来て、よかった。
俺でも人に感謝されることが出来るんだ。

「…ありがとうございます」

「なぜお前が感謝しているんだ？おかしなやつだ。でもまぁその言葉、素直に受けとっておこう。どういたしまして」

保健室のドアが開き、そして閉じた。

「どういたしまして…か」

そんなこと言われたのも数えるぐらいしかない。

何だか嬉しくなった。

（そうだ…鈴とセシリアにも…お礼を……言わ…ないと…）

俺は襲ってきた眠気に身をゆだね、再び眠りに落ちていった。

◇

性格に似合わず、鈴は控えめに保健室に入る。

そーっと一夏の寝ているベットに近付き、顔を覗き込む。

「まったく、気持ちよさそうに寝ちゃって…」

静かに寝息を立てる一夏を見て、笑みがこぼれる。

「一夏……」

もっと　顔を近付け、お互いの唇が――

「鈴？」

「わぁっ！？お、起きてたの！？」

「お前が起こしたんだろうが」

危なかった。

キスしようとしたことは気付かれてないらしい。

良かったような、残念なような。

「何焦ってんだ？」

ギクッ！

「あ、焦ってなんかいないわよ！勝手なこと言わないでよ、馬鹿！」

端から見たら完全に焦っているが、一夏にはばれなかったようだ。

「あのＩＳは…」

「二機ともあんたと信が撃破したわ。心配しなくても、みんな無事よ」

「そうだ！信は！？」

鈴の言葉に反応し、一夏が勢いよく上体を起こす。

そのとき全身に走る痛みで一夏は顔を歪める。

「隣よ。今は寝てるみたいね」

それを聞いて安心したらしく、一夏は再び体をベットに寝かせる。
信が一人で残ったとき、鈴は迷った。
一夏の側にも居たいし、信の横で戦いたかった。
あのとき信は鈴の顔を見ていたのだから、きっとこの葛藤は見抜かれていただろう。
もしかしたら、気を付かってくれたのかも。
『一夏の側に居てやれ』とか思ってたのかな。

「ホント、ワケわかんない…」

ボソリと自分にだけ聞こえるように、呟く。

「そうえば、思い出したよ。約束のこと」

一夏が口を開く。

「俺はてっきり飯をおごってくれるもんだと…。あの約束って違う意味なのか？」

あの約束。
一夏との約束。
『料理が上手くなったら、毎日あたしの酢豚を食べてくれる？』しかない。

（ど、どうしよう！な、な、何て言えば……）

「鈴？」

「ち、ち、違わない、違わないわよ！！ホ、ホラ、料理って誰かに食べてもらうと上達するじゃない！？は、は、はは」

つい口から出てしまった言葉に後悔する。
もしかして、今のが最後のチャンスだったかも。
あーあ…。
なに――

「なにしてんだよ、鈴……」

カーテンで仕切られた隣のベットから声が聞こえる。
二人が声の方向を見るのと同時に、カーテンが開く。

「「信！」」

「ふぁ…。おはよう」

まだ寝たりないようなあくびをして信がベットから立ち上がり、こちらに歩いてくる。
そして鈴の右隣で止まった。

「まったく、もう少しだったじゃないか。もったいない」

「う、うるさいわね…」

やれやれというポーズをとった信が一夏のほうを向く。

「お前も気付いてやれよ…」

一夏は『何が？』っていう表情をしている。

「あっ、そうだ！鈴、こっちに帰ってきたってことはまた店やるのか？親父さんの料理、うまいもんな」

突然、心が冷たくなる。
一気に体温が下がった気がした。
そうか。
一夏には言ってなかった。

「一夏――」

「ううん、いいの、信。あたしが話すわ」

口を開こうとした信を止める。
信は少し心配そうな顔をしていたが、鈴の表情から心を察したのだろう、大人しく引き下がった。

「あのね、一夏……。あたしの両親、離婚したんだ……」

「えっ……！」

一夏が驚きの声を上げる。
そして、沈黙。
きっと、どう励ませばいいか考えているんだろう。
でも、そんなことしてほしくない。
どうしてほしいかもわからない。

「鈴…」

「何？」

長い沈黙を破ったのは一夏だった。

「今度、どっか遊びに行くか」

……え。

何？今の？

聞き違いじゃないよね？

男女がどこかに遊びに行くのって…。

鈴の硬かった表情がぱぁっと輝く。

「そ、それって、デート――」

バシュッ！

保健室のドアが勢いよく開く。

「一夏さん、信さん！具合はいかが？」

セシリアがニコニコして部屋に入ってきた。

「セシリア……」

「？なんですの？信さん？」

「タイミングが…」

そこで、セシリアは鈴に気付く。

さっきまでの笑顔はどこへやら、ムッとした表情で詰め寄る。

「何であなたが？お二人が起きるまで抜け駆けは無しと決めたでしょう？」

「そういうお前も私に隠れて抜け駆けしようとしていたな」

今度は箒が保健室に入ってきた。
どうやらセシリアを見張っていたらしい。

「～～～っ！もう！二人とも出ていってよ！」

せっかくあと少しでデートの約束が出来たのに！
心の中で地団駄を踏んでいると、信から思いがけない言葉が出た。

「そうだ、俺も鈴にお礼しなきゃと思ってたんだ。鈴、今度どっかに遊びに行こうぜ」

「えっ！」

ど、どうしよう。
ふ、ふふ、二人からデートに誘われるなんて……。

「あっ、でもお前は一夏と行くからいいか。じゃあセシリア、今度一緒に遊びに行くか。二人で」

「ほ、本当ですの！？」

「ああ。今回のお礼しなきゃいけないからな」

「ちょっと！なによそれ！あたしを先に誘ったんだからあたしと行

きなさいよね！」

「だから、お前は一夏と――」

「関係ないの！」

「鈴！一夏と一緒にどこに行くのだ？一夏！私も――」

「それでしたらわたくしもご一緒したいですわ、一夏さん！」

「別にかまわ――」

「駄目！早く出てってよ二人とも！」

ギャーギャーとわめく女子三人を見て、男子二人は苦笑い。

「そうえばあのＩＳ、どうなったんだ？」

「そうだな…。廃棄でもしたんじゃないか？そこらへんは先生たちが上手く処理するだろ」

一夏たちは唯一残った疑問についていろいろ考えずにはいられなかった。

◇

学園の地下五十メートル。

限られた人間しか入ることが許されない、隠された空間。

未確認の無人ＩＳはここで解析が行われていた。
完全に機能を停止した無人機が台の上に乗せられ、遠隔操作のアームが止まることなく解析作業を行っている。

「解析、終了しました。やはり、登録されていないコアですね…」

「そうか」

画面の解析結果を見ているのは山田先生。
その後ろで腕を組んで立っているのが千冬だ。

「真宮くんの撃破したＩＳは完全に解析不能でしたが、恐らくそちらも…」

「ああ、たぶん同じだろう」

千冬はいつもより更に厳しい表情だった。
その目はすでに最強のＩＳ操縦者のそれだった。

「やはりな」

「心当たりでもあるんですか？」

確信じみた発言に山田先生は怪訝そうな顔をする。

◇

「いや、ない。今はまだ――な」

「楽しそうだよな、お前ら」

「どこがだよ。なぁ、信」

「まったくだ。弾、理想と現実はまったく別物だ…ぜ！」

「ぐあ！この距離で奥義とか逃げられないだろ！」

俺《一夏》は中学からの友達、五反田（ごたんだ）弾（だん）の家に遊びに来ていた。
この前、弾に信のことを話したら『ぜひ一度会わせてくれ』と言われたので、今日は信も一緒に来ている。
最初こそ互いに気を使っていたものの、俺がトイレでいなかった間に何があったのか、すでに名前で呼びあうまでに打ち解けていた。
曰く、『同じ悩みを抱えるもの同士、共感し合うものがあった』らしい。
悩みってなんだ？
二人とも無さそうだが。
今は三人で格闘ゲームの対戦中だ。

「これで決まりだぁぁ！！」

ドォォォン！！

「「な、なにぃぃ！」」

二人同時にＫＯされて、嘆く俺と弾。
信は最初の数回ずっと俺たちに負けまくっていたが、今はトップに立っている。
くそ！

短すぎるぞ、準備期間！

「はっはっはっ。これでなん連勝目かな？二人とも」

「強すぎだぜ、信。さすが天才」

弾が部屋に大の字に寝転がって、天井を見上げる。

「天才じゃねーって。弾もかなり強いじゃないか」

「あー、こいつはゲームしかしてないからな」

「一夏！そんなこと言ってくれるな、悲しくなる」

あはは、と三人で笑いあう。
やっぱり友達は多いほうがいいな。
今度、鈴も連れてくるか。
鈴も中学時代は俺たちとよく遊んでいた。
きっと弾にも会いたいだろう。

「いいなー、お前らは。ゲームとかする暇もないほど女の子に囲まれてるんだよな。毎日楽園だろ？招待券ねえの？」

「「ねえよ、馬鹿」」

俺と信が突っ込む。

「でも鈴が転校して来てくれて助かったよ。話し相手本当に少なかったからなあ」

「ああ、鈴か。鈴ねえ……」

弾と信がニヤニヤして顔を見合わし、ガシッと握手する。

「弾さん、お互い苦労しますなぁ」

「そうですなぁ、信さん。悩みがつきませんなぁ」

本当に今日あったばかりか二人とも。

すでに息ぴったりだぞ。

俺が突っ込もうとしたとき、ドアが勢いよくドカンと開いた。

「お兄！お昼できたよ、さっさと食べに――」

俺の1つ年下、弾の妹である五反田蘭（ごたんだらん）が足をつきだして立っていた。

ショートパンツにタンクトップの機能性重視の格好、かなりラフだ。

だが、ラフな格好の女子が普通に廊下を歩くＩＳ学園の寮で暮らす俺と信はこういう格好を見ることに慣れてしまった。

慣れって怖い。

「い、一夏さん！？き、来てたんですか？」

一瞬俺の視界から消え、再び出てきたときは心なしか服装がただされていた。

「ああ、今日はちょっと外出」

そうですか…と返事をした蘭は信を見る。

「あ、あの…こちらの方は…」

「はじめまして、お邪魔してます。真宮　信です。よろしく。えーと…」

「あっ、ご、五反田蘭ですっ！あ、兄がいつもお世話になってますっ！」

わりと丁寧な自己紹介をされたので少し焦ったらしい。
深々と頭を下げる蘭。

「そっか。よろしく、五反田さん」

信の言葉にぶっ！と弾が吹き出す。

「ご、『五反田さん』て…、信が『五反田さん』て…。なんか気持ち悪い」

「なに！ほんの数時間前までお前も『五反田さん』で呼んでたじゃないか！」

蘭が状況を上手く呑み込めず、キョロキョロしている。

「す、数時間前って…？」

「ああ、こいつら今日あったばかりなんだよ。俺が信を連れてきたんだ」

ドタドタと格闘技を掛け合っている二人を横目に俺が説明する。

「そ、そうなんですか！？私、てっきりお兄の友達の方だと…。そ

うですよね！一夏さんの友達のかたですよね、やっぱり！」

蘭は妙に納得したらしく、首を大きく縦に振る。

「やっぱり、類は友を呼ぶのね……。イケメンの友はイケメンだわ……」

「ん？類がなんだって？」

『お前、お兄って呼ばれてんのか？可愛いな、おい！』『うるせー！五反田さんてなんだよ、鳥肌たつわ！』とドタバタやっている二人にかき消されてよく聞こえなかった。

「な、何でもありません！一夏さんたち、お昼まだですよね？あ、あのよかったらどうぞ」

「そうか、じゃあ、いただこうかな。おーい、信！」

振り向くと二人は大の字になって寝そべっていた。

「はぁ、はぁ…。やるじゃねえか」

「お前もな…」

「ほら、そういう小芝居はいらないから。信、蘭が昼飯どうかだってさ」

信と弾は肩で息をしながらムクリと上体を起こす。

「信、食べてけよ。どうせ残り物だろうけど。あと蘭、別に呼び方

『蘭』でも気にしないよな?信が気持ち悪くて耐えられない」

弾がまだぜえぜえしながら話す。

「えっ!ま、まぁ、いいけど…」

「気持ち悪いとはなんだ。まぁ、俺としてもそっちの方が呼びやすいからいいけど。よろしく、蘭。お昼、御馳走になるよ」

信がニコッと笑いかけると、蘭は赤くなって足早に『じゃ、じゃあ先に下に行きますから』と言って部屋から出ていった。

「いい妹じゃないか、弾。お前が悩むのもわかるわ」

「……信、今また悩みの種が増えた…」

「なに!本当か!また一夏か!?」

何で俺が出てくるんだよ。

しかも『また』ってなんだ、『また』って。

「お前も一夏と同類だ、コノヤロー!!」

「はぁ!?突然なんだよ!俺が何したんだよ!」

「うるせー!なんだよ、お前らチクショー!!」

あーあ、また始まったよ…。

なんとか二人を落ち着かせ、下に降りるまでに二十分ぐらいかかった。
ちなみに、やっぱり仲直りは『やるな…』『お前もな…』的な感じだった。
弾は最後に『絶対お前らを弟になんかしないからな！』とか意味不明なこと言っていたが、何で『お前ら』だったのだろう。
俺は関係ないのに。
きっと言い争いしすぎて頭がおかしくなったんだな。
どうするんだ、弾。
ただでさえ馬鹿なのに。

「一夏、それはひどくないか…？」

信が俺の心をよんだ。
テーブルに座ると、蘭が水を持ってきてくれた。

「ど、どうぞ…」

「あれ？着替えたのか、蘭。どっか出かけるの？」

「あ、いえ、これは、ですねっ」

さっきまでのラフな格好はどこへやら、髪をおろし、半袖のワンピースを着ていて、その裾からは躍動感溢れる脚が伸びている。
いわゆる外出用のおしゃれな格好だと思ったのだか…。

「一夏、察しろ」

信の隣で弾がうんうんとうなずく。
ピカーン！

そうか！

「デート？」

ダンッ！

「違いますっ！」

あれ？違うの？
テーブルを叩いて即時否定された。

「弾…」

「言ってくれるな。もう、慣れたさ…」

信と弾はなんか悟ってるし。
お前ら打ち解けすぎだろ。

「ごめんな、蘭…。あとで一夏ぶっ飛ばしとくから」

「はい…大丈夫です……」

「その服、すごく似合ってるぞ。可愛さ二倍って感じだ。だから自信もてよ？なっ」

信にそう言われて頭を撫でられた蘭は恥ずかしそうに手を組んで、もじもじしていた。

「あっ、ありがとうございます…／／」

ビュッ――パシッ

突然飛んできたおたまを素晴らしい反射神経でキャッチする信。

「あ、あぶなっ！」

「おう…悪いな、兄ちゃん…。手が滑っちまってねえ…」

そう言って厨房から現れたのは五反田家の頂点に立つ最強の男、五反田厳（ごたんだげん）その人だった。

弾と蘭の祖父であるが、蘭にだけかなり甘い。

蘭に男が触れようものならば、その拳骨ですべてをなぎはらうだろう…。

信、やっちまったな…。

今も顔こそ笑顔だが、完全に漫画とかで見かける怒りマークが二個ぐらいついている。

俺でもわかるんだから、信なら尚更だ。

一目見ただけで、この人に逆らわない方がいいと感じたはず。

「そ、そうですか…。お、お仕事ご苦労様です」

そこで止めとけばよかったのに、何とか機嫌をよくしようと選択した言葉が悪かった。

「い、いやー、蘭さんはきっと美人なお嫁さんになりますね。相手の方が羨ましいなー、な、なんて…」

ビキビキッ！

ヤバい。

マークが十個ぐらい増えた。

やめろ！信！
本気で死ぬぞ！
一緒に生きて帰ろう！

「そうかい…。そうだろ…、羨ましいだろう…俺も羨ましいよ……」

「で、ですよねー」

「さっきは悪かったな、兄ちゃん…また手ぇ滑らすかもしんねぇから気を付けてくれ……。今度は包丁使うんでな……ヘッヘッ…」

再び厨房に戻る厳さんを見ながら、信は青い顔をして固まっていた。

「一夏…お前らきっと、すぐ仲良くなったんだろうな…」

「うん？まあ、弾ほどではないけどな。何でだ？」

「似てるからな…。鈍いところが」

その後はありがたく昼食をいただき（信は常に厨房の厳さんを気にしていた）、俺たちは街に出てゲームセンターに行ったり楽しい時間を過ごした。
あとで弾から聞いたのだが、蘭はあのあと『お嫁さん…美人の…』と一日中夢心地で独り言を言っていたそうだ。
よほど嬉しかったんだろう。
ただ信はもう厳さんの前に立てないな、きっと…。
立つ前にぶん殴られるからな。
大変な運命を背負ったな信。
俺は信に同情しながら、寮への帰路についたのであった。

１５：噂ってＩＳと同じくらい自己進化する（前書き）

恐らく一番人気であろう、フランスのあの人が登場ですｄ（＝ー（）！

登場するだけだけど（＾ー＾ゞ

15：噂ってISと同じくらい自己進化する

「一夏、何なんだ弾のおじいさんは！織斑先生と同じものを感じた！」

「たしかにあの人の拳骨は千冬姉にも劣らない威力だからな」

弾の家に行くのが怖くなった今日この頃、いつもと違って俺《信》が一夏の部屋に遊びに来ている。

「何を震えているのだ、だらしがない。男子たるものもっと強気で生きていくべきだぞ」

おいおい。
女子に男子の生き方諭されちゃったよ。
一夏の部屋ということは当然、箒もいるわけだ。

コンコン

「はーい、どうぞー」

ドアのノックに一夏が応える。

ガチャッ

「失礼しまーす。あれ？真宮くん、何でここに？」

礼儀正しく部屋に入ってきたのは我らが副担任、山田真耶先生だった。

「今は遊びに来てたんですよ。俺がいると話しづらいことでしょうか？」

「ええっ！何で話があるってわかったんてすか！？」

「見ればわかるんですよ、俺」

「そうでしたか、そうでしたね、そうですね…」

まったく、そろそろ慣れてくれてもいいのに。
山田先生はよく俺が特殊だということを忘れるらしい。
まあ、普通に接してくれるのは嬉しいんだけど。
いい方でも、悪い方でも、特別扱いされるのは苦手だ。
悪い方は精神的に堪えるし、いい方は反応に困る。

「で、先生、俺たちに何の話ですか？」

一夏が話の内容を聞く。

「ええ。あっ、別に真宮くんが居ても大丈夫ですよ」

「そうですか。じゃあ、ここにいます」

「はい！実はお引っ越しです！」

この部屋にいる生徒二人の頭の上に『？？？』が表示された。
俺は山田先生の表情から誰が引っ越すのか察したので別に『？』は浮かばなかった。

「先生、誰が、どこに、どうして移動なのか言わないとわかりませんよ」

俺が先生にアドバイス。
あれ？
そうすると俺が先生で先生が生徒の構図だな。
ややこしい。

「えっ！ああ、そうでしたね、すみません。えーと、篠ノ之さんが、別の部屋に、調整がついたので、お引っ越しです」

なんかこういうゲームあったな。
いつ、誰が、何を、どうした、ってやつ。

「ま、待ってください！それは今すぐじゃないと行けませんか？」

箒が突然の引っ越し話に動揺している。
『一夏と一緒がいい』か…。
恋する乙女だな、箒。

「ええ、篠ノ之さんもくつろげないでしょう？」

「で、でも…」

一夏を見る箒。
ここで一夏が『俺と一緒にいろ』とか言えたら箒もかなり嬉しかっただろうに。
そうでないにしても一夏が『俺は別に一緒でもかまわない』とか言えたらよかったのに。
だがそこは流石、織斑一夏。

「箒、俺なら大丈夫だぞ。箒がいなくてもちゃんと起きれるし、歯も磨くぞ」

子供か！

いや、まだ成人してないから子供なんだが、高校生がそれぐらい一人で出来なくてどうする。

「…先生！今すぐ！部屋を移動します！」

あーあ。

怒らせちゃったよ。

箒はさっさと持ち物をまとめて、引っ越しの準備をすませた。

山田先生は勢いに圧倒されながら、『じ、じゃあ部屋の案内をします』と箒の後ろをついていった。

後ろでどうやって案内するんですか、先生。

「一夏」

「なんだ、信？」

「俺はもうツッコまない」

また頭に『？？？』とついている一夏を置いて、俺も自分の部屋に戻った。

戻ってからしばらくすると、廊下からとんでもないセリフが聞こえてきた。

／／つ、付き合ってもらう！！／／

……え。

カチャッ、そーーっ

ドアをわずかに開き、細い隙間から声の方向を見る。

一夏の部屋の前に先ほど引っ越ししたはずの箒が、腕組みして立っていた。

相変わらず凛とした横顔だが、かなり勇気を振り絞っているのがわかった。

勇気を出して『付き合ってもらう』なんて言う理由は一つしかない。

（今のは…告白？だよな…？そうだ！絶対そうだ！）

おお！

遂に自分から動いたか！

箒、随分成長したな。

あの鈍いやつとは大違いだ。

廊下の奥の角でチラッと人影が見えたが、気にすることはない。

対して、『あの鈍いやつ』の姿は見えなかったがきっと照れていることだろう。

（こんな美人に告白されるなんて羨ましいぜ、一夏）

明日はなんて声をかけようといろいろ考えながら寝る準備をする信であった。

――翌日

結局どんなふうに接しようか一晩中考え『やっぱり普通が一番』という結論に達した俺は、いつものように一夏と教室に向かった。

二人ともちやほやされるのは困るだろう。
俺は山田先生を見習うことにしたのだった。

「なあ信、本当に大丈夫か？朝からずっとニヤニヤしてるけど」

だが意外とこれが難しい。
一夏にニヤニヤを指摘されたのは、これで七回目だ。

「ぜんぜんしてないって。何でもない、何でもない、まったく何でもない」

「本当か？なんか変だな…」

そんなやり取りをしながら教室に入ると、女子たちがいつものように様々な噂を楽しそうに話しているのだった。

「ねぇ、聞いた？」

「うん、聞いた！本当なの！？」

「わたしも聞いた！」

「えっ！なになに？わたし、聞いてない！」

「ここだけの話だけどね、今度の学年別トーナメントで優勝すると……」

「えーーっ！お、織斑くんか、真宮くんと！？」

女子の会話の中に思いっきり俺たちの名前が出てきたので、なんか

したかな?と二人で顔を見合せる。

「俺と一夏が」

「何だって?」

ドキッ、という効果音が聞こえた気がした。

「「「「な、何でもないよ!」」」」

集まっていた女子が口をそろえてそんなことを言う。

「絶対なにかあるだろ。何だよ、別に隠すことないだろ?」

「へっ、あ、ち、ちょっと…」

俺は目の前の女子を捕まえて、目と目を合わせる。

じーーー

「あっ……／／」

「私は嘘をついている」

瞳にチラッと映った肯定の意思を俺は見逃さなかった。

「やっぱり!嘘ついてるじゃないか!」

「ストーーップ!!これ以上の詮索はダメ!真宮くん、これは女子同士の秘密なの!う、嘘だと思うんなら、た、確かめてみてよ!」

そう言って割って入った女の子はぐいっと顔を近付ける。

「ちょっと、何いい思いしようとしてんのよ！」

「そうよ！どさくさに紛れて近付こうなんて卑怯よ！」

「いいじゃない、早い者勝ちよ！」

ギャーギャー、わーわー

いつの間にか俺の前には『私、嘘ついてます。確かめてください』という女子の列が出来ていた。

どんだけ嘘つきなんだよ、お前ら。

俺は何を信用すればいいんだ。

ちなみに、もう少し長く見ないと『何のための』嘘をついているかは見抜けない。

人間は誰しも必ず、無意識に抵抗するからな。

一番大事な情報はなるべく守り通そうとするんだ。

だから、俺と一夏に嘘をついているのはわかったが、どんな内容かまではわからなかった。

「うるさい。とっとと席につけ。ショートホームルームを始める」

鬼教官の一声で一気に席につく女子たち。

俺も一夏も女子の群れからようやく解放され、席につく。

「今日はなんと、転校生を紹介します」

山田先生が嬉しそうに報告する。

転校生？
鈴に続いてまたか。
こんなにポンポン受け入れていいのか、ＩＳ学園。
ガラガラとドアを開き、転校生が現れた。
もちろんＩＳ学園の制服姿だ。
うーん、でもなんか違和感あるな…。
周りとちがうような…。

「初めまして。シャルル・デュノアです。フランスから来ました。皆さん、よろしくお願いします」

非常に優しそうな印象を受ける、にこやかな顔でそう告げ、一礼する転校生。

「お、男…？」

そう！
それだ！
なんか周りの女子と違うなーと思ったのはそのためだ。
いやー、誰か知らないけどそれに気付いた人すごい。

……？
え？
男？

「はい、こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国より転入を――」

きゃあああああーーーーっ！

鼓膜が割れるかというほどのクラスの女子たちの叫びが学園に響き渡る。
これは、アレだ。
初日の織斑先生の人気ぶりぐらいだ。

「男子！三人目の男子！」

「しかもうちのクラス！」

「美形！しかも守ってあげたくなる系の！」

「あと一人で四天王が揃うわ！」

揃わねーよ。
男子か。
周りが女子だらけだから、そりゃ違和感もあるわな。

（…あれ？でもまだなんか、違和感あるな…？俺の気のせいか？いや、そんなはずはない）

新しく来たこの少年の雰囲気が、どこか自分や一夏と違うことに疑問を抱く信であった。

◇

「今日は二組と合同でＩＳ実習だ。　各人はすぐに着替えて第二グラウンドに集合。それと織斑、真宮」

「「はい」」

俺《一夏》と信は名前を呼ばれたのでとりあえず返事をする。

「デュノアの面倒を見てやれ。同じ男子同士だ」

なるほど、そうだな。

わからないこともあると思うし、最初は大変だからな。

経験者は語る。

「君たちが織斑くんと、真宮くん？初めまして。僕は――」

「あー、いいからいいから。とにかく移動が先だ。行くぞ、信」

「……あ、ああ。そうだな、移動が先だな」

なんだ？

信のやつ、あんなに真剣にシャルルの顔見て。

そんなに転校生が気になるのか？

俺はシャルルの右手、信は左手を握り、小走りで教室を出た。

「俺たちはアリーナの更衣室で着替えるんだ。実習のたびこの移動だから、早めに慣れてくれ」

「俺たちって肩身せまいよな。なんとかならないかなぁ」

俺は移動する理由を話し、信は愚痴をシャルルにこぼす。

「う、うん…」

なんだ？
さっきまでと違って妙に落ち着かなそうだな。

「トイレか？」

「ち、違うよ！」

「……」

シャルルと反対に、信は妙に落ち着いてる気がする。
というか、いつもよりちょっぴり静かだ。

（なあ、一夏。なんか違和感感じないか？）

小声で信が話かけてくる。
俺も小声で返事をする。

（違和感？シャルルにか？…いや、特に）

（そうか……）

「あっ！噂の転校生発見！」

突然現れた女子生徒の大群によって、俺と信の会話は中断。
ていうかもう噂になってるの？
まだシャルルが転校してきてから十分もたってないぞ。
恐るべし、女子の情報網。

「ああっ！しかも織斑くんと真宮くんも一緒だ！」

「者ども、出会えであえい！」

あっという間に廊下が女子で埋め尽くされる。

「わあ！男の子三人も絵になるわ！」

「しかも手を繋いでる！」

ヤバい。

このままだと完全に遅刻だ。

「一夏」

「そうだな、信。シャルル、走るぞ！」

全力で廊下をダッシュ。

後ろで『ああっ！写真だけでも！』と未練がましい声が聞こえた。

ゴメン。

そんなことしてたら、俺たちの未来はが鬼教官の鉄拳が頭に降り下ろされるというものになってしまう。

「ど、どうしてみんな騒いでるの？」

「そりゃ今のところ男子でＩＳ操縦できるのって俺たちだけだからだろ」

「……？あっ！うん、そうだね」

？

何で『意味がわからない』とでも言いたそうな間があったんだ？

「……」

信は口数少ないし。
何なんだよ、一体。

「はぁ、はぁ、…何とか振り切ったみたいだな…」

ようやく追跡から解放され、なんとか第二アリーナの更衣室までたどり着くことができた。

「ごめんね、いきなり迷惑かけちゃって」

「迷惑なんてかけてないって。気にすんな、男同士だろ」

シャルルの謝罪に信が答える。

「そうだぞ、むしろ仲間が増えて嬉しいんだ、俺たち」

一人でも男子が増えると、それだけで心強い。

「俺は織斑一夏。一夏って呼んでくれ」

「で、俺が真宮信。呼び方は呼びやすいほうでいいぞ」

「じゃあ、信って呼ぶよ。二人ともよろしく。僕のことはシャルルでいいよ」

しそびれた自己紹介をして、俺は時計を見る。

ヤバい！！
ギリギリだ！

「すぐ着替えないと遅刻だぞ！」

「落ち着けよ、一夏。こういう時こそ焦らず――」

「遅刻したら千冬ね…織斑先生が――」

「急げ、シャルル！みんなで生き抜こう！」

事の重大さを理解したのか、信の服を脱ぐスピードが気持ち二倍になる。

「うわぁ！」

「どうしたシャルル？」

「し、信、き、着替えるなら、その…」

突然叫んだかと思うと、俺たちに背を向け、顔を隠すシャルル。

「どうしたんだよ、シャルル。早く着替えないと遅れるぞ？」

「う、うん。着替えるよ？でも、あっち向いてて、二人とも……」

「まあ着替えをジロジロ見る気はないが……」

「ああ、そういう趣味はない」

俺と信はシャルルの方を見ないようにする。
おかしなやつだ。
そんなこと別に気にしなくてもいいのに。

「どうでもいいけど、早く着替えろよ？」

「な、何かな？」

「早っ！」

あれ？
もう着替え終わってる。
信のツッコミももっともだ。

「着替えるの超早いな。なんかコツでもあるのか？」

「い、いや、別に？は、ははっ、ははははっ」

なんかひきつってないか？
気のせいならいいんだが。

「ＩＳスーツってさ、着るとき裸って言うのが着づらいんだよな、引っ掛かって」

「そうだよな。男の宿命というかなんというか」

信が隣で首を二回ほど縦に振る。

「ひ、引っ掛かって？」

シャルルが顔をカーーッと赤くしている気がする。
俺は最近気のせいが多い気がするんだが。
いや、それすら気のせいなのか？

「ところでシャルル、そのスーツ、着やすそうだな」

「うん、デュノア社製のオリジナルなんだ」

「へー。オリジナルか、すごいな。あれ？デュノアって……」

どっかで聞いたような。

「フランスのＩＳの会社だな。そっちじゃ、かなり大きい会社じゃないか？」

そうなのか。
さすが信。
よく覚えてるな。

「で、お前もデュノアってことは…」

「うん、僕の父が社長をしてるんだ」

ということは自動的にシャルルは社長の息子さん？
なるほど、道理で。

「なんかシャルルって気品があって、いいところの育ちって感じがするもんな。納得したよ」

「……」

シャルルが視線を逸らす。
何か触れられたくないところだったのだろうか。

「…ほら、急がないと大変なことになるぞ。二人とも急げ！鬼教官が金棒もって立ってたら俺たち地獄行きだ」

信が雰囲気を変えようと冗談半分でそんなことを言う。
本当に信は頼りになる。

「行くぞ、シャルル！じゃあな、一夏。お先に！」

信はシャルルの手を握って駆け出した。

「う、うん。一夏、早くきてね」

「あ、おい！待ってくれよ！」

俺たちは更衣室を後にし、急いでグラウンドに向かうのであった。

◇

正直言うと既に答えは出ていた。
『なぜシャルルに違和感があるのか』という問題の答えだ。
更衣室に入ったときに八割、そして、グラウンドに出るまでには確実な結論が出た。
出たのだが…。
それを信じられない自分がいた。

俺《信》はシャルルが『何か』隠しているのはすぐにわかった。
同時に、違和感がそこから来ることもわかった。
教室から更衣室までの移動中、シャルルを観察して『何を』隠しているのかわかった。
だが、『何のために』隠しているかはまだわからない。

「シャルル…あのさ…」

「何？信」

いや、まだだ。
まだわからない。
ほんの僅かではあるが、俺が間違っているという可能性も無いわけでは無い。
俺は喉まで出かかった言葉を無理矢理心の奥に押し戻し、なんとか作った笑顔でこう言った。

「…後で俺の部屋遊びに来いよ。一夏と三人でいろいろ話しようぜ」

「うん！ありがとう、信。とっても楽しみだよ」

そうやって二人で手を繋いで走っていると、ようやく一夏が追い付いてきた。

「ふ、二人とも速いな…」

「お前が遅いんだよ。シャルル、遅刻したら一夏のせいにしよう」

「ふふっ、そうだね。一夏、そのときはよろしく」

「そ、そんな！俺だけ織斑先生に殴られるのは嫌だー！」

いきなりスピードアップした一夏が俺たちを追い抜いていった。
俺とシャルルはその必死そうな後ろ姿を見て、ついつい笑ってしまう。

たとえ九九パーセント以上当たっている可能性があっても。
自分を否定することになっても。
もし、俺が正しくても。
シャルルはシャルルだ。
それは変わらない。
こいつには笑っていて欲しい。
シャルルの輝くような笑顔を見てそう思った。

「本日から実習を開始する」

「「「はい！」」」

なんとか間に合った俺たち三人は一組と二組の女子と共に整列している。
一応言っとくが、鬼教官は金棒を持ってなかった。

「まずは戦闘を実演してもらう。凰！オルコット！」

鈴とセシリアが返事をし、前に出る。
完全に『やる気ないです』って顔に書いてある。

「お前ら少しはやる気をだせ。あいつらにいいとこを見せられるぞ」

なんか織斑先生が二人の耳元でこそこそやってるな。
何だろ？
注意事項とか話てんのか？

「やはりここはイギリス代表候補生、わたくしセシリア・オルコットの出番ですわね！」

「まあ、実力を見せるいい機会よね！専用機持ちの！」

……注意事項じゃないな、絶対。
そんなん聞いてテンションがいきなり上がるやつがこの世界にいるだろうか、いや、いない。
反語。
この二人がここまでテンション上げるってことは…。

「一夏がらみですか？」

「半分正解だ。お前も鈍いから、一生正解出来ないと思うがな」

ちょうど近くを通った織斑先生と小声で言葉をかわす。
半分正解て。
しかも残りの半分は俺が正解出来ないほど難解らしい。
すごく気になるんですけど。

キィィィン……。

「あああああーっ！ど、どいてください～っ！」

上空から空気を裂く音と女性の叫び声が聞こえる。

上を見ると、ＩＳに乗った山田先生が急降下―いや、落下―してきた。
そして――

ドカーン！！

墜落。
立ち込める砂煙が晴れると、とんでもない光景が眼前に広がっていた。
なぜか一人だけ逃げそびれた一夏が、墜落した山田先生の上に覆い被さっている。
しかも右腕が山田先生の胸の上にある。
ぱっと見たときに生徒が教師を襲っている構図に見えないわけでもない。

「お、織斑くん？そ、そのですね……困ります、こんな……。ああ、でもこのまま行けば織斑先生が義理のお姉さんってことでそれはそれでとても魅力的な…」

満更でもない顔をしながら妄想し始める山田先生。
『このまま行けば』ってどこまで行く気ですか。

「うわぁ！す、すみま――」

ビシュン！

やっと我に帰って山田先生から離れた一夏に、ビームが放たれる。
幸い当たらずに済んだが、先ほどまで一夏の頭があった場所を狙った正確な射撃だった。

「残念。外してしまいましたわ」

ＩＳを展開し終えたセシリアが銃を片手に微笑んでいた。
笑顔だけど、かなりお怒りだ。
もう雰囲気というか、そういうオーラが全身から溢れだしている。
『外してしまいましたわ　＝　当てるつもりでしたわ　＝殺すつもりでしたわ』ってことでしょ？
めちゃめちゃ怖いんだけど。
一夏、彼女は本気だぞ。

「いーちかーーーー！」

今度は鈴か。
武器『双天牙月（そうてんがげつ）』を連結し、一夏に向かって投げる。
うわぁ…本気で命取りに来てるよ。
恋する乙女って怖い。

ドンッドンッ！

山田先生がライフルを展開し、射撃を行う。
双天牙月が銃弾に起動を変えられ、地面に突き刺さる。

「織斑くん、怪我はありませんか？」

いつもと違う雰囲気を一瞬だけ放った山田先生に唖然とする一同。
あの体勢からここまで正確な射撃を行えるとは……。
人って見かけによらないね。

「山田先生は元代表候補だ。今ぐらいの射撃は雑作もない」

なるほど、納得。
やっぱり代表候補生ってすごいな。
『む、昔のことですよ。代表候補生止まりでしたし…』と謙遜する山田先生を眺めていると、一夏が俺の隣に来た。

「酷い目にあった……」

「当然の結果だろ。先生を襲う生徒なんて初めて見たわ」

「襲ってねーよ……」

もはや言い返す気力もないようだ。
やれやれ。

「お前は本当に『トラブルメーカー』って感じだな。いや『Ｔｏｌｏｖｅるメーカー』か？」

「さて、小娘たち、さっさと始めるぞ」

下らないことを言っていると、織斑先生が鈴とセシリアに声をかける。

「え？あの、二対一で……？」

「いや、さすがにそれは……」

「安心しろ。今のお前たちならすぐ負ける」

相変わらず厳しさの塊みたいな人ですね、織斑先生。
人じゃなくて鬼か。

少しムッとした鈴とセシリアが山田先生と戦闘を始めるのを見ながら、織斑先生がシャルルに山田先生の機体の説明を求める。

「山田先生の使用されているＩＳは――」

俺はあまり説明を聞いていなかった。
覚えてるからな、そういう知識は。

（うまいな、先生。回避先を誘導して常に自分に有利な状況を作ってる）

さすが代表候補生だったことはある。
改めて先生という立場が敬うべきところであると認識する。

（あ。終わったな）

見事に回避先を誘導されたセシリアが鈴に激突、動きが止まったところを先生が見逃すはずがなかった。

ドカーン！

山田先生が放ったグレネードが二人に命中する。

ヒュー……ドーン！

上空から青と赤のＩＳが落下した。
二人とも互いの言い分を言いあっているが、正直、みっともない。
こいつら、本当に代表候補生か？

「これで諸君にも教員の実力は理解出来ただろう。以後は敬意を持

って接するように」

俺は以前から敬意を持ってましたよ。
織斑先生に対しては恐怖でしたけど。

「次にグループになって実習を行う。リーダーは専用機持ちがやること。では、分かれろ！」

こういうときの女子の行動は速い。
あっというまに一夏とシャルルの周りには人だかりができた。

「あいつらにあれだけ集まったんだから、もう俺の出番は…」

「真宮くん、教えて教えて～！」

「この前のオルコットさんとの対戦、かっこよかったよ！」

「真宮くんってどうしてそんなに強いの？」

「真南くんはどんな女の子がタイプ？」

……ないわけないか。
くそー、みんなあの二人に集中するから俺は楽できると思ったのに。

（まあでも、みんな俺のこと慕ってくれてる証拠か…）

照れ臭いやら嬉しいやらで顔が赤くなった。

「あれー？みーやん顔あかーい」

「そ、そんなわけないだろっ」

のほほんさんに見抜かれた。
意外と人のこと見てるんだよな、この子。

「ほんとだ～、どうしたの？」

「もしかして私の美貌に見とれちゃった？」

「あんたのわけないでしょ！あたしよ！」

「違うわ！私よ！」

「私よ！」

「いえ、私よ！」

「じゃあ、わたしー」

「「「それはない」」」

のほほんさんがみんなに全否定される。
そこは『どうぞどうぞ』じゃないのか。
この調子だと、そのうち熱々のおでんが出てきそうだ。

「そうかな。のほほんさんって可愛いと思うけどな」

全否定された少女の頭を優しくぽんぽんと叩き、さりげなくフォローする。

「えへへー。みーやんに可愛いって言われちゃったー」

「お前たち全員何をやっているんだ。グループは八人ずつだ。面倒だから出席番号順で分かれろ。次にもたつくようなやつはＩＳを背負ってグラウンド百周させるからな！」

織班先生の鶴の一声で、俺に何か言いたそうにしていた女子たちもぱっと自分のグループに分かれた。

一夏とシャルルの回りに集まっていた女子たちも同様だ。

織斑先生ぐらい怖い人がいないと、こうはいかないだろうな。

「よし！じゃあ始めようか！」

指導するからにはしっかりやらないと。

俺はグループの女子に声をかけて、早速実習を始めたのであった。

１５：噂ってＩＳと同じくらい自己進化する（後書き）

一夏の山田先生との絡みが羨ましかったので、原作通り鈴とセシリアにお仕置きしてもらいました（笑）

16：ケンカしたらとりあえず謝っとけ

「つーかーれーたー……」

俺《信》は今日の授業を終え、部屋に戻ってベットに寝転がっていた。

暇だな…。

まだ眠くないし。

よし、今日の出来事を振り返ろう。

まず、実習……

「あれ？これじゃあＩＳに乗れないな」

「ほんとだ～、どうしよ～」

（完全にわざとだな…。視線が一夏に向いていると言うことは…）

「仕方ない、運んでやるよ」

「本当に！やったー！」

（そんなに面倒なのか。ＩＳに乗るの）

昼食……

「し、信さんもよかったら…ど、どうぞ……」

「そうか？じゃあ」

「信！セシリアの飯はな……すごいぞ」

「？そうか、一夏。そんなにうまかったのか？」

「ああ、すごいぞ…。びっくりする……」

パクッ、モグモグ…

（！？！？！？こ、これは……！すごいな……！）

「い、いかがでしょうか……？」

（ど、どういう反応をすればいいんだ、俺は……？とりあえず……）

「う、うん、すごいぞセシリア。すごく……すごい」

「ほ、本当ですか？では残りもどうぞ！」

「え！？あ、ああ、い、いただこうかな～」

「信……勇者だな」

「……」

「あんたたちは甘過ぎんのよ。ホラ、信。あたしの酢豚も食べなさいよね」

「いいのか、鈴まで。それ自分の分じゃないのか？」

「だ、大丈夫よ。（信に食べてもらおうと思って多めに作ってきたんだから…）」

ひょい、パクッ。

（し、舌が麻痺している……。いやでも、これはうまいはずだ）

「うん、うまいよ。さすが鈴だな、毎日食べたいぐらいだ」

「そ、そう？か、感謝しなさいよね！」

「ところで箒、俺の分の昼飯は…？」

「……」

すっ…

「おお、サンキュ」

「なんだよ一夏、箒に作って来てもらうとは。羨ましいな」

パクッ、モグモグ

「うまい！これって結構手が込んでないか？」

「味付けは――」

あーだ、こーだ

（おお、箒が今までにない笑顔に！）

「あれ？でもお前のに唐揚げ入ってないじゃないか。ホラ」

（なっ、なにぃ！さすが彼氏と彼女、こんなことも堂々と人前でやるとは！見てるこっちが恥ずかしい！）

※信はこの前の『つ、付き合ってもらう』について、当然オッケーの返事だったと思っています。

「あ、これってもしかして日本ではカップルがするっていう『はい、あーん』ってやつ？仲睦まじいね」

「シャルル、こういうのは暖かい目でそっと見守ってやるもんなんだぞ」

「そうなの？」

「そういうもんだ。あっ、あとさ、今日の夜俺の部屋に来てくれよ。一夏の部屋の隣だからさ。いろいろシャルルに質問があるんだ」

「うん、わかったよ。じゃあ、時間は――」

――――――――

「う、うん？」

俺は目をこすって上体を起こす。

いつの間にか寝てしまっていた。

そうだ。

今日はシャルルを部屋に招待したんだった。

コンコン

／／信？居る？／／

「ああ、いいぞ」

ガチャ

「失礼しまーす…」

ナイスタイミングでシャルルが部屋にやって来る。

「よっ、待ちくたびれて寝ちゃってたぜ」

「ほ、本当に？ごめんね」

ペコリと頭を下げるシャルル。

真面目だな。

「謝ることなんてねーよ。もっと楽にしていいぞ。俺たちは男同士なんだから」

「うん、ありがとう。信」

ニコッと笑うシャルルに思わずドキッとする。

やっぱ、そうだよな…。

それしか考えられないもんな…。

俺が今日シャルルを呼んだ理由はただひとつ。

シャルルの隠し事を聞くためだ。

（だけど、来ていきなりはまずいよな。もう少ししてからにしよう）

結局は問題を先送りにしただけなのだが。

「そうえば、シャルルはどの部屋になったんだ？」

「一夏と同じ部屋だよ。だから、信とはお隣さんだね」

「本当か？これから楽しくなるな」

ニコッと俺も笑うと、シャルルは少し赤くなって下を向く。

「と、ところでさ。質問って何？何でも答えるよ」

「ああ、そうだったな。でもその前に俺の自己紹介をするよ」

それから俺は自分のことを話した。

俺が何でＩＳ学園に入れられたか、俺の持っている才能、クラスのこと、あとたまに織斑先生や一夏のこと。

「そうなんだ。信ってすごいね！尊敬しちゃうよ」

「そ、そうか？それほどでもないよ」

シャルルは目を輝かせて俺を見ている。

まるで親に物語を聞かせてもらっている小さい子どものようだ。

尊敬するなんて言われると、少し照れくさい。

目の前にある瞳は澄んだエメラルド色で、とてもきれいだった。

……本当に言うべきなのか？
言ったあとにまた、シャルルはこんなふうに俺を見てくれるだろうか。

「じゃあ、今度は僕の番だね。何でも質問していいよ」

「……シャルル」

「何？」

一体なんの質問をされるのかと期待に満ちた笑顔を俺に向けている。

「俺こういう才能あるからさ、嘘ついてるとか、何か隠してるとか、わかるんだ。そういう人たちがどんな感じに周りと接するか、色んなパターンを覚えてるからな。それに、目とかの細かい動きも」

俺が真面目な口調になったので、シャルルからも笑顔が消える。

「言っていいか迷ってたんだけど、やっぱり言うよ。でも、これだけは覚えておいてくれ。俺はお前の味方だ。どんな事情があっても」

「信？いったいどうしたの？そんなに――」

焦っているように見えるシャルルの言葉を遮り、思いきって俺の結論を言葉にする。

「お前――」

シャルルの目を真っ直ぐに見る。

「女だな？」

◇

シャルルは心臓が止まった。
いや、実際は止まるわけないのだが、そんな風に感じた。
いけない。
何とかやり過ごさないと。

「し、信？冗談でしょ？あ、あんまり面白くないなあ…。ほら、さっきの一夏の話。あれの方が――」

「冗談じゃない。お前は女だ。それはお前がよくわかってるだろ？」

そう言って自分を見つめる少年は、今の動揺したシャルルと対照的にとても落ち着いていた。

「なあ、シャルル。もし、もしもだ。俺に理由を聞かせてくれてもいいなら、俺がお前を助ける。話したくないなら、それでいい」

優しい声で信が話しかけてくれる。
シャルルは信の目を見た。
何でも質問していいと言ったのは自分だ。
だったら――

「今言ったろ？『話したくないなら、それでいい』。『答えるのが義務だ』とか、そういうのじゃないんだ。お前が決めろ」

「本当に何でもお見通しだね……」

一回深呼吸して気持ちを落ち着かせる。

初日からいきなりばれてしまうとは。

「そうだよ、信。僕は男の子じゃないんだ。女の子なんだよ」

言ってから急に怖くなった。

もし、信が助けてくれなかったら？

それどころか、先生たちに告げ口されたら？

それが、あの人の耳に入ったら？

「本当に？本当に助けてくれるの？」

不安で不安で、思わず子どもっぽい質問がでてしまった。

「お前が必要とするなら」

信は静かに言う。

不思議だ。

さっきまでの不安が一瞬で消し飛んだ。

信とは今日会ったばかりなのに、なんだか心から信頼できる。

きっと助けてくれる。

そう思った。

「……あのね、信。僕は――」

どれくらい長い間話しただろう。

自分が愛人の子供だということ、デュノア社のこと、ここに来た理

由、正体がばれたときの自分の運命――
自分でも驚くぐらいスラスラと言葉が出てきた。
何もかも吹っ切れたからだったのだろうか。
しかしシャルルは目の前の少年だからこそ、ここまで話せたのだと思った。

「こんな感じかな？ごめんね、信。騙してて」

頭を下げる。
すっと服がこすれる音がした。
信が立ち上がったのだろう。
どうしよう…。
怒らせちゃったかな？
『お前みたいなウソつきは出ていけ』とか言われないかな…？
また出てきた不安と恐怖で、心が覆われそうになる。

「シャルル」

気付くと信が目の前にいた。
座っている自分の目の高さに合うようしゃがんでくれている。
顔がとても近い。

「し、信？」

ギュッ……

「～～～っ！？！？／／」

返事の代わりに突然抱きしめられた。
頭が混乱してうまく思考ができなかったが、自分の顔が熱くなるの

はわかった。

「ごめんな、シャルル……。そんな辛いこと話させて……」

信はそう言ってますます自分を強く抱きしめる。
シャルルは鼓動が早くなるのを感じだ。

（う、うわわわわ／／ど、どどど、どうしよう／／）

「絶対……絶対に、お前を助ける」

決意に満ちた言葉。
シャルルは『助ける』と言ってくれたのがとても嬉しかった。
信は温かくて、優しくて、力強くて。
シャルルはいつの間にか女の子の顔に戻っていた。
無意識に、シャルルも信をギュッと抱きしめる。
信の鼓動が聞こえる。
こうしていると、なんだかすごく安心する。

「……信、あのね、僕、名前も嘘ついてるんだ。信にはばれちゃったし、本当の名前教えるね」

返事はないが、かまわない。
こんなにお互いが近いのだから、絶対に聞こえる。
本当の自分。
母から貰った大切なもの。

「『シャルロット』。僕の本当の名前はね、『シャルロット』って言うんだよ？二人だけの時はそう呼んで…」

「そっか……。本当のこと話してくれてありがとう、シャルロット。絶対にお前を守ってやる」

「うん……」

シャルロットはとっても幸せで、優しい気持ちだった。
もしできるなら、このままずっと――

コンコン

＼＼おーい、信。シャルルいるか？／／

はっと我に返る二人。
しばらく見つめあって、お互い顔をぼっと赤くする。
そして、ばっと勢いよく離れる。

「ご、ごめん…」

「う、ううん…」

ばつが悪そうにうつむく信とシャルロット。

ガチャ

「なんだよ。いるなら返事しろよ」

何も知らない一夏が部屋に入ってくる。

「あれ、二人とも顔赤くないか？」

「「全然！」」

二人の勢いにたじろぐ一夏。

「じ、じゃあ、シャルロッ――」

「し、信！」

いけね、とでも言うように信は両手で口を隠す。

幸い一夏にはばれなかったようで、信とシャルロットのやり取りを見て『？』となっている。

「お前らおかしくないか？」

「「おかしくない！」」

再びたじろぐ一夏。

「じゃ、じゃあシャルル？一夏も来たし、今日は…」

「えっ！あ、あ、ああ、そそ、そうだね。さっ行こ、一夏」

「えー、せっかくだから三人で遊ぼうぜ？」

「「いいから！」」

三たびたじろぐ一夏。

「お、おやすみ、シャルル。と、一夏」

「う、うん。おやすみ、信」
「おやすみ、信。また明日な」

バタン

「なあシャルル、なんかあったのか？」

「なっ、何で？」

「やっぱり赤いぞ、顔」

それはそうだろう。
あんなに突然、抱きつかれるなんて思ってなかった。
恥ずかしいやら嬉しいやらで自分の頬が火照っているのはいやというほどわかった。

（で、でも、もうちょっとあのままでも…）

もう一度あのときの信と自分を想像して、さらに顔が熱くなるシャルロット。

「シャルル？」

「ひゃい！何かな！？」

「風邪か？」

「違うよ！」

その夜……

シャルロットの場合。

「『俺が守ってやる』かぁ……。ふふっ、信ってばカッコつけすぎだよ」

ベットの中で一人顔を赤らめながら呟くシャルロット。

抱き締められた感触がまだ残っている。

（あったかかったなあ、信……）

信の代わりに布団をギュッとする。

（また抱き締めてくれないかな……）

自分の考えていることにますます顔が熱くなる。

何とか眠ろうと目を閉じるが、そのたびにあの映像が頭に浮かぶ。

（う～～／／眠れないよ～～／／）

どうやら朝まで眠れそうにない。

信の場合。

（なんてことしちまったんだ、俺は！女の子にいきなり抱きつくとか、完全に変態じゃないか！）

信は自分がしてしまったことに対する罪の意識で眠れていなかった。

（どうする、俺！明日からどうシャルロットと接する！？つーかシャルロットは俺とどう接するつもりなんだ！？ヤバイぞ…）

信が脳内で明日のシュミレーションを始める。

パターン1：無視

『よ、よお…』

『……』

『……お、おはよう、シャルル』

『……チッ』

『し、舌打ち！？』

『どうした信、シャルル。なんかあったのか？』

パターン2：暴力

『よ、よお…』

バシーン！！

『……変態』

『どうした信、シャルル。なんかあったのか？』

パターン３：とりあえずなんか怖い

『よ、よお…』

『あっ、信！ちょうどよかった』

『ど、どうした？』

『信ってさ、包丁と銃どっちが好き？燃やすのと沈めるのだったらどっち？やっぱり痛いのは嫌かな？』

『……』

『どうした信、シャルル。なんかあったのか』

（駄目だ！どうしたって嫌われてるし、下手したら殺される！つーか一夏、どんだけ気になってんだ！）

想像の中の一夏にツッコむ。

（で、でもなあ、あんなに悲しそうな顔してる女の子放っておけないよな……）

話をしている時のシャルロットの顔を思い出す。
やっぱり、あいつには笑っていてほしい。

（シャルロット、いい香りしたな…）

はっ！

「何考えてんだ！ダメダメダメダメ！」

結局朝まで一睡もできない信であった。

◇

「二人とも大丈夫か？」

「……」

「……」

俺《一夏》はなぜか無言の信とシャルルに挟まれ、教室への道を歩いていた。
なんか知らないけど、二人とも眠そうだ。

「なあ、信」

「……」

「おい、シャルル」

「……」

なんだこれ。
なんで俺がこんなに困ってるんだ？

（信。シャルルとケンカでもしたのか？早いとこ謝って仲直りしろよ）

この雰囲気に耐えきれず、信に小声でアドバイスを送る。

（…そうだな。このままずっとってわけにもいかないしな……）

（そうだぞ！早いとこ俺をこの状況から助けてくれ）

「あ、あー…。しゃ、シャルル？」

やっと信が口を開く。
シャルルが少しビクッとする。

「そ、そのだな……。あれは、あのー、何て言うか、愛情表現？と言うか、何と言うか……」

「……愛情」

シャルルがボソッと喋る。

心なしか頬が赤いような…。

「い、いや、違う！愛情じゃなくて、え～と……」

「……違うの？」

シャルル、なんかガッカリしてないか？

「い、いや、違わない！」

何であんなに焦ってるんだ？
いくら気まずいからってそんなに焦ることないだろ。

「あー、もう！と、とりあえずだな！ゴメン！シャルル！だから怒んないでくれ、なっ？」

手をあわせて深々と頭を下げる信。

「シャルル、こいつも反省してるみたいだから許してやってくれ。俺からも頼むよ」

「……ふふっ、いいよ」

信が顔をあげるとシャルルがクスクスと笑っていた。

「おお！わりとあっさり！よかったな、信！」

「あ、ああ…」

「ただし！」

シャルルが人差し指をビシッと信に突き付けて言う。

「ち、ちゃんと僕のこと、守ってよね！」

？

何言ってんだ、シャルル。

誰かに狙われてるのか？

俺はいろいろ考えてみたけど、わけがわからなかった。

信も最初は目を丸くしていたが、徐徐にその顔が笑顔になった。

「ハハッ、なんだそれ。安心しろ、任せとけ。いやー、焦ったー。あははははっ！」

「もー、信！……ぷっ、ふふふっ」

なんかよくわからないけど仲直りしたみたいだ。

二人につられて俺も笑ってしまう。

やっぱりこうやってみんな笑ってるのが一番だよな。

さっきまでの沈黙が嘘のように楽しく三人で喋りながら、教室へ入る。

それぞれが自分の席に座ると、ちょうど先生たちが入ってきた。

山田先生が教壇に立つ。

なんだか困っている雰囲気だ。

どうしたんだろ？

「えーっと、き、今日も嬉しいお知らせがあります。また一人、クラスにお友達が増えました」

は？

話がわからないでいると、長い銀髪の女子が入ってきた。
右目に眼帯をしている。
怪我のときにするやつじゃなくて、本物の。
その風貌といい、雰囲気といい、『軍人』って感じだ。
間違いなく、学校に来るような人じゃない。

「ドイツから来た、ラウラ・ボーデヴィッヒさんです」

ひそひそ……

「どうゆうこと？」

「二日連続で転校生だなんて…」

「いくら何でも変じゃない？」

女子が話し出す。
俺もまったく同意見だ。

「皆さんお静かに！まだ自己紹介が終わってませんから」

山田先生が少し強めに言葉を発する。

「挨拶をしろ。ラウラ」

「はい、教官」

礼儀正しく答えるラウラ。

（『教官』？ってことは千冬姉がドイツにいた頃の……）

「ラウラ・ボーデヴィッヒだ」

……。

……。

……。

「あ、あの…以上、ですか？」

沈黙に耐えかねた山田先生が転校生に話しかける。

「以上だ」

バッサリ。

バッサリ過ぎて清々しい。

ふと、ラウラと目があった。

「！貴様が…」

コツコツ…

ラウラがこっちに来た。

どうしたんだ？

バシッ！！

「…へ？」

いきなり殴られた。

それも無駄の無い平手打ち。

「私は認めない…。貴様があの人の弟など……認めるものか」

痛いやら、びっくりするやら、むかつくやらで頭が混乱して言葉が出ない。

ラウラの真っ赤な左目は色と対照的に、冷ややかな眼差しを俺に向けていた。

１６：ケンカしたらとりあえず謝っとけ（後書き）

17：突き通せる嘘なんてない

「お前、またなんかやったのか？」

「やってねーよ！」

俺《信》は一夏と一緒に廊下を歩いていた。
あのラウラ・ボーデヴィッヒの強烈な自己紹介のあったあと、殴られる心当たりがまったくないので、一夏はそうとう腹が立っているようだ。
というか立っている。
間違いなく。
もう土曜日になるというのにまだイライラしている。

「　まあ、後でその事はボーデヴィッヒに聞くとして、今は訓練だ。だから一回怒るのやめろ」

「そうだな…。カリカリしてたら、全部うまくいかなくなるよな…」

俺たちはＩＳの特訓をすべくアリーナに向かっている。
なぜ、俺が一緒に向かっているかと言うと…

「でもなあ、あの三人の説明じゃわかんないんだよ。だからさ、頼むよ信。通訳してくれ！」

と、いうことである。
通訳って……。
どんな言語で説明してるんだ？
古代文明の今は失われし言語とかか？

悪いがさすがにそれだったら無理だ。
アリーナに着くと更衣室でさっさと着替えて、すでに待ち構えていた例の三人―箒、鈴、セシリア―のところに行く。

「なんだ、信も来たのか。いいだろう、私が相手になってやる」

なんだとはなんだ、箒。

「何？あんたもあたしに教わりたいわけ？ふふん、いいわよ。そんなに言うなら教えてあげる」

鈴、まだ何も言ってないぞ。

「鈴さん、お二方はわたくしに教わりたいのですわ。自意識過剰ですわね」

人のこと言えないぞ、セシリア。

「俺は一夏のサポート係だ。というよりは見学者だな。俺に気にせず一夏を鍛えてやってくれ」

と、いうことで特訓が始まったのだが……。

「ズカッ、ドカッ、ガキーン！という感じだ！」

……。

「何となくわかるでしょ？感覚よ、感覚。はあ！何でわかんないのよ、馬鹿！」

……。

「防御の時は右半身を斜め上前方へ五度、回避の時は後方へ二十度ですわ！」

……。

（じゃ、頑張れ一夏）

ぽんと肩を叩いて去ろうとすると、ガシッと腕を捕まれた。

（信！何のためにお前を呼んだと思ってんだ！）

（無理無理無理！通訳とかそういうの必要ないって！もう立派な日本語じゃないか！）

（じゃあお前、意味わかるのか！？）

（わかるわけねーだろ！どういうことだ！？これって説明って呼んでいいの！？説明の定義を俺に説明しろ！）

（なんで俺がお前に説明の説明しなきゃいけないんだよ！それを説明しろ！）

（なんだよそれ！じゃあ俺は説明の説明の説明の説明を要求する！）

（意味わかんねーよ！ややこしすぎるわ！）

小声でしばらくやり取りしていたら、三人に気付かれた。

「ちょっと、お二人とも！わたくしの説明を聞いていますの！？」
「あたしのすばらしい説明がわからないなんて言わないわよね？」
「二人とも、私のズバッとした説明が一番だろう？」
何なんだコイツら。
説明ってわからない人にするものだぞ。
『わかってない他人』を基準にして話さなきゃならないんだ。
『わかってる自分』を基準にしてどうする。
と、言いたいところだったが、三人が三人とも『自分が一番！！』と考えているところがまた難しい。
さて、どうやってかわそうか……。
「一夏、信」
シャルロット、ナイスタイミング！
すでに専用ＩＳを展開させていたシャルロットが俺たちに声をかける。
「どうした？シャルル」
「ちょっと相手してくれる？白式と瞬光と戦って見たいんだ」
理由もまたすばらしい。
これなら三人も文句は言えまい。
「そうか、俺たちはオッケーだぞ。なっ、一夏」

「ああ！というわけだから、また後でな」

むむむ…と何か言いたそうにする三人。

おいおい、そんな顔すんなよ。

「じゃ、一夏からな。俺はまず見学」

「わかった」

「僕もいいよ。…じゃあ行くよ、一夏」

「おう！」

戦闘開始とともに一夏がいきおいよく飛び出す。

手には雪片弐型。

シャルロットはそれを左手のシールドで防ぐ。

ガキン、ガキンと金属同士がぶつかりあう。

（シャルロット、うまいな……。おお！武器の展開が早い！）

左手に銃を展開するのに一秒もかかっていない。

ダダダダッ！！

銃弾の雨を白式のエネルギーシールドで防ぐ一夏。

（おいおい、ただでさえ雪片弐型がエネルギー食ってんのに何やってんだ）

何とか間合いを詰めようとするが、シャルロットの射撃がそれを許さない。

近接特化型の白式は懐に入れば強いが、入れなければ実力が発揮で

きない。

（あーあ。瞬時加速のタイミングも読まれてるし……）

結局何にもいいとこ無いまま一夏が負けた。

ガックリと肩を落とす一夏。

「そうガッカリすんな。今回は相手が悪かったんだって」

「ううー…」

「強くなりたきゃ、練習あるのみだ。…さ、シャルル」

「うん、準備万端だよ」

一夏を軽く励ましたあと、シャルロットと向かい合う。

あの武器の高速呼び出しは厄介だな。

気を付けないと。

俺は右腕に朧火を展開。

剣のイメージを伝え、体の前に持ってくる。

「よし、こい！」

「じゃあ遠慮なく！」

突撃してくるシャルロットをかわし、上空へ飛び上がる。

シャルロットは俺を追いつつマシンガンを手に追撃してくる。

照準を合わさせないために動き回る俺。

右右下左下上左右……。

突然、瞬時加速。

一気に間合いを詰める。

「甘いよ！そんなに簡単にはやらせない！」

距離を一気に詰めようとした俺を、両手に呼び出したショットガン二丁で牽制し、うまく距離をとるシャルロット。

（反応してくるか。さすが代表候補生）

距離があいたところで今度はライフルを撃ってくる。
それを体を回転させてかわすと、すぐさま追撃がくる。
シャルロットの手にはまたショットガンが握られていた。

「速いね！信！」

「まあな！」

互いに一歩も譲らない。

（なるほど、一夏が詰められないわけだ）

そろそろ決めますか。
この間もお互いにある程度の距離を保ちながら絶えず飛び回っている。
こんなことしてても、らちが明かないな。

「これでどうだ！」

俺は斬撃が飛んでいくイメージを朧火に伝え、おもいっきり剣を横に振る。

朧火から出た衝撃波はまっすぐ敵に向かって飛んでいく。

「なっ！」

まさかそんな攻撃が来ると思っていなかったシャルロットはとっさに物理シールドでガードする。

一瞬、シャルロットの視界の一部がシールドで遮られる。

「いただき！」

一時的にできた死角から瞬時加速で接近。

スピード的には軽く残像ができてもおかしくない。

「それはどうかな！」

そう言ったシャルロットの左手にはナイフが握られている。

（カウンターを狙ってくるのはわかってる！だから……）

シャルロットが左手をつき出す。

このまま突っ込んだらカウンターをくらうだろう。

『このまま』だったら。

「かかった！」

シャルロットが勝利を確信する。

確かにこの速度でカウンターを食らったらその瞬間に負け、そうでないにしても大ダメージは避けられない。

「なーんてね」

瞬間、全スラスターを逆噴射、突撃の勢いを殺された瞬光がピタリと止まる。
完全に速度がゼロになる。

「!?」

「残念、引っ掛かったのはシャルルの方だ」

俺に当たるはずだったナイフが空を切り裂く。
バランスを崩したシャルロットはとっさの判断ができず、空中でつまずいたように前のめりになる。
顔を上げると目の前には誰もいない。

「こっちだ、こっち」

すでに懐に入った俺はシャルロットを斬り上げる。
確実にシールドエネルギーを削り取った。

「くっ!」

シャルロットは体制をたてなおすために距離をとろうとする。

「逃がさねえ!」

衝撃波が相手が物理シールドを構える前に当たる。
シャルロットが自分のエネルギー残量を見て顔しかめた。

「もう一撃!」

今度は『振る』のではなく、『突く』。
朧火は攻撃対象に向かって伸びていく。

「なっ！本当にびっくりするね、その武器！」

シャルロットが物理シールドで防御しようと構える。
しかし、この状態の朧火には物理シールドなど意味はない。

「曲がれ！」

シールドに当たる寸前、ほぼ直角に朧火が二度曲がる。
まるで自ら意思を持ってシールドを避けたかのように。
そしてシャルロットの心臓の位置でピタッと止まる。

「勝負あり」

「あー、負けちゃった」

シャルロットは『参りました』と肩をすぼめる。

「さっ、戻ろうぜ」

俺はそう言って、ゆっくりと地上に降下していった。

◇

「やっぱり信は強いな。何なんだよ、お前の武器の万能性」

「まあな。でもなかなかイメージ保ち続けんの大変なんだよ」

「それでもあそこまで武器の性能を生かせるのは信だからこそだよ。最後のあれ、どんなイメージだったの？」

「そうだな……。形は『槍』で、動きは『蛇』かな」

すごい。

さっきの戦いを見て、感想はそれだけだ。

それ以外には何も言えない。

俺《一夏》も信みたいに戦えたらなぁ…。

「一夏には一夏ならではの戦いかたがあるし、武器もすごいやつ使ってるじゃないか」

俺の考えていることを読み取る信。

こいつに隠し事は無理だな。

「でも勝てなきゃな……」

「一夏が勝てないのは単純に射撃武器の特性を把握していないからだよ」

「そ、そうなのか？一応わかっているつもりだったんだが……」

「うーん、知識として知っているだけってかんじかな。さっき僕と戦ったときも間合いを詰められなかったよね？」

「うっ……、確かに。瞬時加速も読まれてたしな……」

隣でうんうんと信がうなずいている。

「つまりな、直線的すぎるんだ。一夏は」

「そうだね。一夏のＩＳは近接格闘オンリーだから、より深く射撃武器の特性を把握しないと対戦じゃ、勝てないよ」

と、いうことで…。

「じゃあ射撃武器の練習をしてみようか」

シャルルに手渡された五五口径アサルトライフル『ヴェント』を構える。

通常は他人の武器の使用は不可能なのだが、所有者が使用許諾すれば、登録してある人全員が使えるらしい。

さっきシャルルが話してくれた。

「構えはこれでいいのか？」

「えっと……脇を締めて。それと左腕はこっち。わかる？」

シャルルは俺の後ろに回り込んで俺の体をうまく誘導する。

「よし…」

スコープの中心と的の中心を合わせる。

一度大きく深呼吸をして、引き金にぐっと力を込める。

バンッ！

予想よりも大きく響く火薬の炸裂音に驚く。
すぐさま別の的が表示される。
それに合わせて体の向きを変え、また引き金を引く。

バンッ！バンッ！バンッ！バンッ！

数回表示された的を撃ち、刀と違った感覚を直に感じる。
銃ってこんなに速いのか…。

「どう？」

「お、おう。なんか、アレだな。とりあえず『速い』って感想だ」

「信もやってみる？……あれ？しーん！」

「あ、ああ、悪い。考え事してた」

後ろを振り向くと、信が腕を組んで立っていた。

「信もいくら見てわかるって言ったって、銃の感覚確かめた方がいいんじゃないか？」

「そうだな…。じゃあ俺もやってみるか。シャルル、いいか？」

「うん。もちろんだよ」

俺から受け取ったライフルを今度は信に渡すシャルル。
信は受けとるとすぐに、銃を構えて照準を合わせている。

「こうだよな」

「えっと……うん、そうだね」

なんか立ち姿が『スナイパー』って感じだ。

「よし、いくぞ！」

バンッ！バンッ！バンッ！バンッ！バンッ！

うお！

サポート無しに全弾命中させやがった！

しかもほぼ中心を捉えている。

さすがだぜ、信。

「すごいね！初めてでこんなに正確な射撃ができた人なんて見たことないよ」

「シャルルの撃ち方見てたしな。お手本が上手かったおかげだ」

信はニコリとしてライフルをシャルルに返す。

シャルルは何だか照れくさそうにそれを受け取る。

ヒソヒソ……

「ちょっと、アレ見て」

「えっ！アレってドイツの第三世代型ＩＳだよね？」

「確か、本国でのトライアル段階って聞いたけど……」

周りで始まった女子の小声の会話が耳に入る。
何だ？
アリーナのピットを見上げると――
「……ラウラ・ボーデヴィッヒ」
俺たちの目線の先には銀髪の眼帯少女がいた。

◇

「織斑一夏」
「……何だよ」
「貴様も専用機持ちだそうだな。ならば話は早い、私と戦え」
「おい待てよ。何でそんなに一夏に突っかかるんだ？」
たまりかねた俺《信》は口を開く。
ボーデヴィッヒからは純粋な『敵意』しか感じられない。
一体なにが気にくわないのか、言わないと伝わらないこともあるはずだ。
俺が言うと説得力ないけど。
「黙れ。貴様には関係ない」
完全に俺を見下している。

表情と雰囲気から読み取るに、『雑魚には用はない』だってさ。
腹立つな、まったく。

「とにかく、お前と戦う理由がない。いやだ」

「貴様にはなくとも、私にはある」

「今でなくたっていいだろ。もうすぐクラス対抗戦（リーグマッチ）だし」

一夏の言う通りだ。
別にすぐ戦いたいわけでもない相手とここで戦ったって意味がない。
それならば意味ある戦いの場で決着をつけた方がお互い納得がいくだろう。
が、ボーデヴィッヒは違うらしい。

「そうか。ならば――」

刹那、左肩に装備された大型の実弾砲が火を噴いた。

ドン！

素早くシャルルが二人の間に割り込み、シールドを構える。
しかし、俺が更に割って入る。
敵に向かって朧火を伸ばし、飛んできた砲弾はただ単に左手を使って弾く。

ガキン！

はじいた砲弾がわきに転がるのと同時に、朧火の槍がボーデヴィッヒの喉元で止まる。

まさか雑魚がこんなことするなんて思っていなかったので、面くらっている。

「…！」

「止めとけって。そんなに他人を見下してると足元すくわれるぞ」

「貴様……！」

「真宮信だ。これ以上やる気なら、俺が相手になるぜ？」

『そこの生徒！何をやっている！』

アリーナにスピーカーからの声が響く。騒ぎを聞きつけてやって来た担当の教師だろう。

俺たちはしばらくにらみ合っていたが、ボーデヴィッヒがＩＳを解除する。

「ふん、今日のところは引いてやる」

「最初っからそうすりゃいいんだよ」

俺の言葉を無視し、アリーナゲートへときびすを返し去っていく。

「信、助かったよ」

「気にすんな。言ったろ？『お前が困った時は俺が助けてやる』」

拳を握り、前へつき出す。

条件反射のように一夏も拳を握り、俺のと合わせる。

「シャルルもな」

「えっ！い、いいの！？」

「いいに決まってるだろ。ちゃんと守ってって言われたしな」

「う、うん…。あ、ありがと…／／」

コンッ

「よし、今日はもう戻ろうぜ」

「そうだな。あ～疲れた」

「うん。そうしようか」

この二人が心配だ。

あとボーデヴィッヒも。

一夏とシャルルの射撃練習を見たとき、その後ろ姿があの夢と重なった。

あのときの金髪は間違いなくシャルロットだろう。

セシリアとは違う髪型だったし、何よりもＩＳの色と形が今まさに俺の隣にいるシャルロットの専用機『ラファール・リヴァイヴ・カスタム？』と酷似している。

さらにこのタイミングで銀髪と言えば……。

「ラウラ・ボーデヴィッヒ…」

黒い塊に飲み込まれる瞬間、アイツは苦しそうで、助けを求めてい

た。
確かにムカつくやつだが、だからと言って助けを求めている人を見捨てるなんてしたくない。

「助けるさ、全員。見てるだけなんて、そんなこと俺自信が許さない」

拳を強く握り、小さく独り言を言う。

「む…。どうした、信」

「あんた、目が怖いわよ」

「信さん、何かお困りのことでもありまして？」

気付くと『一夏専属コーチ三人衆』が近くに来ていた。
そうえば練習らしい練習出来なかったな。
まあ、コイツらの説明じゃ無理か……。

「いや、何でもない。悪いんだけど先に帰るわ」

「わかった。今日はもう休んだほうがいい」

「二人とも！あんなやつ気にすんじゃないわよ」

「一夏さんと信さんなら絶対勝てますわ！」

三人とも俺たちを心配してくれているのがよくわかる。
だが、その心配を見せて不安を煽るようなことを絶対にしないところがありがたい。

「ありがとう。さて、着替えに行くか、一夏、シャルル」

俺たち男子三人は更衣室に向かって歩き出した。

あ、シャルロットは女か。

……。

あれ？

（おい、いっつもどうしてるんだ？）

（え？なにが？）

そうだ、シャルロットは女だった。

一緒に着替えるというのは道徳的にまずい。

（着替えだよ、着替え。一緒に着替えるつもりか？）

（そ、そんなわけないでしょ！先に部屋に戻るよ）

そんなことを話している間に更衣室に着いた。

俺たち男子だけの貸し切りなので、無駄に広い。

「じゃあ、僕は先に部屋に戻ってるね」

「何だよ、ここでシャワー浴びてかないのか？お前いつもそうだよな」

シャルロットの隠し事を知っている俺としては『そりゃそうだろう』ということなのだが、一夏にとっては不思議なことであるのは間違いない。

男子同士だったら何も隠す必要は無いのだからいい。
だが、シャルロットは女だ。

「たまには一緒に着替えようぜ」

肩を組んで何とか一緒に着替えようとする一夏。
正直、俺から見たらただの変態高校生だ。
シャルロットがめちゃめちゃ困ってる。

「あっ！そうだ、シャルル。射撃武器の特性教えてくれよ。俺も部屋でシャワー浴びるし、一緒に行こうぜ」

一夏からシャルロットを引き離し、手を握る。
多少強引だが仕方ない。
事情が事情だ。

「じゃーなーお先にー」

「あっ、おい！」

なるべく駆け足で更衣室を出て、そのまま部屋まで戻ってきた。

「ふー、危ねぇ。大丈夫か、シャルロット」

一応周りに誰もいないのを確認し、名前を呼ぶ。

「う、うん。ありがと、信。でも、そ、その、手が……／／」

手？
そうえば繋いだままだった。

表情はうつむいてて見えなかったが、離せってことか。

「ああ、ごめん。気付かなかった」

「あっ…」

ぱっと手を離すと、シャルロットが顔をあげてこちらを見た。

「なんで残念なんだ？」

「へっ！？い、いや！そんなこと…」

「？ま、いいや」

俺は部屋のドアを開ける。

「信！」

突然の大声にビクッとする。

なんだ？

なんか悪いことしたのか、俺。

「あの、ほんとにいろいろありがと…」

「またかよ。気にしなくていいって。あんまり俺に気を使うな」

まったくシャルロットは真面目過ぎるな。

もう少し不真面目でいいのに。

優しくぽんぽんと頭を撫でる

「うん…／／」

「じゃ、また　」

俺は今度こそ部屋に入り、ドアを閉める。

（アイツは男装なんかしないで、普通の女の子になればいいのに…）

性格からして、嘘をつき続けるのはきっと苦しいはずだ。

……。

ここで気付いた。

「一夏！お前また可愛い女子と相部屋じゃねーか！」

一夏の運のよさに嫉妬する信であった。

◇

ザァァ……

シャルロットはシャワーを浴びながらずっと二人の男子のことを考えていた。

（また信に助けられちゃった…。本当に僕のこと守ってくれてるんだ）

顔が赤くなる。

（の、のぼせちゃったかな？）

キュッ

シャワーを止めて、ドアを開ける。
バスタオルは外に置いてあるのだ。

ガチャ。　　ガチャ。

「シャルル、ボディーソープきれてるだろ。替えの――」

同時に洗面所のドアが開く。
そこに立っていたのは一夏だった。

「……」

「……」

お互い状況がわからなくて、無言。
いや、絶句と言ったほうが正しいかもしれない。
シャルロットは当然裸なのだ。

「うわあっ！」

我に返ったシャルロットがとりあえず大事なところを隠す。
ど、どうしよう。
み、見られた……。

「えっと……、これ……」

未だ混乱している一夏は手に持っていたボディーソープを渡してくる。

「う、うん…。ありがと……」

「あー…それじゃあ、な……」

ぎこちない動きで一夏が出ていく。

必死で状況の理解をしようとしているのだろう。

……。

「ばれちゃった…よね？」

◇

俺《信》はベットに体を投げ出していた。

（……腹へったな。一夏たち誘って食べに行くか）

ドアを開けると、セシリアとバッタリ合った。

「なんだ、セシリアも夕食か」

「ええ。信さんとご一緒にと思いまして」

どうやら俺の能力には慣れたらしい。

驚く素振りはまったく見せない。

「いや、どうせなら一夏と二人で行ってこい。その方がいいだろ」

「そ、そんなことありませんわ」

コンコン

一夏とシャルロットの部屋のドアを叩く。

「おーい一夏、シャルル。入るぞー」

「一夏さん、デュノアさん、わたくしも入りますわよ」

ガチャ……

部屋に入ると、寝ているシャルロットに覆い被さるように一夏が布団をかけていた。

「お、おー。信、セシリア、どうしたんだ？」

……。

「……そっか」

「信？」

「いや、セシリアがお前と夕食一緒に行かないかだってさ」

一夏がいかにも迷っているという表情で返事をする。

「で、でもなー。シャルルが風邪っぽいから心配でさ」

「なんだ、じゃあ俺がここにいるよ。俺の分の夕食、貰ってきてくれ。セシリア、一緒に行ってこい」

「そ、そうですか？（本当は信さんと二人きりのつもりでしたが、まぁ、一夏さんとでも……）信さん、今度はご一緒しましょうね」

「ああ、そうだな」

「では行きましょう、一夏さん」

セシリアが『そこそこ嬉しい』オーラを出して一夏と出ていった。
ドアがバタンと閉まり、二人の足音が遠ざかる。
しばらく立っていた俺は、ふぅーとため息をつき、空いてる方のベットにドカッと座る。

「……ばれたか」

「……うん」

動揺してたし、表情から読み取ると、間違いない。
一夏は気付いたのだ。
シャルルが、いや、シャルロットが女の子だと。

18：要らないと思ったものってそのあと必要になる場合がある

俺《信》はシャルロットから一夏がどうやって秘密を知ったかある程度聞いた。
結論。

（一夏、あとでぶん殴ってやるよ……）

そんなこと思っているとは露らず、シャルロットは楽しそうに話を続ける。

「――そしたら一夏ね、『ここにいろ』って言ってくれたんだ」

シャルロットはくすくすと嬉しそうに笑う。
……。
だよな。
それしかないよな。

「シャルロット、もしかして……」

「何？」

「一夏に惚れたか？」

「へっ！？」

シャルロットは俺と逆方向を向いているので、顔は見えないが、反応からすると図星だろう。
明らかに動揺している。

「やっぱりな。アイツの側にいる女はだいたいみんな惚れるんだ。でも一夏は鈍いから気付かないんだよ」

（信も人のこと言えないくせに……）

なんかボソボソとシャルロットが喋った気がする。

「なんか言ったか？」

「えっ！い、いやあ、どうしてそう思ったのかなって。その、僕が一夏のこと、す、好きだって」

「裸見られたことを楽しそうに俺に話すべきじゃないとだけ言っておく」

（……信だから話せるんだよ……。ほんと人のこと言えないね……）

「さっきから何だよ？一人でボソボソ。気になるじゃないか」

「だから！僕が好きなのは……／／／なっ、何でもない！／／／」

何で不機嫌になってんだ？

意味わからん。

いや、それより……。

「あ、あーでもな、いきなりそういうことするんじゃ、なくてな、その、なんだ……段階というものを踏んでだな……」

「信？何言ってるの？」

「へ？いや、さっき一夏がシャルロットに覆い被さってたから……」

「……」

あれ？
何この沈黙？

「え？深読みし過ぎた？」

「…信のえっち……」

「なっ！」

さすがにひどくないか。
だってあんな体制見たら誰でもそう思うぞ。
きっと。
なんとか弁解しなければ。

「俺はエロくないぞ」

「そうなの？」

「……嘘です」

そりゃそうだろう。
男ってそういうもんだ。

「ふふっ、信のえっち」

「か、からかうなよ…」

嘘をつくことから解放されて気が楽になったようで、その笑い声はなんだかいつも以上に優しく響いた。

「僕ね、信と一夏に合えてよかったよ。信は僕のこと守ってくれるし、一夏はここにいていいって言ってくれた」

シャルロットが少し真面目な口調になる。

「本当に二人には感謝してるよ」

「なんだよ、急にかしこまって。だからもっと楽にしていいんだって。人に甘えろ。自分の中に抱え込むな。一夏だってそう思ってるさ」

すると、シャルロットがこっちを向く。

布団で顔は半分覆われていて目しか見えないが、何かしてほしいと訴えかけている。

「どうした？何してほしいんだ？」

「えっとね……。その……なんかね、体が寒いんだ…。だから、温めて……」

「は？」

何言ってんの？

レンジでチンしろってか？

んなわけねーよな。

「？どゆこと？」

「だ、だから！……あのときみたいに……だ、抱き締めて…ほしいな…」

言葉の意味を理解し、俺の顔が熱くなる。

い、い、いやイヤいやイヤいいいいいややや。

ダメでしょ、ダメだろ、ダメなの？いや、絶対ダメだ。

何言ってんの？

ほんと何言ってんの？

「ば、バカ言うな！あれは不可効力でな……」

「嫌なの？」

「い、嫌じゃない！と、というかだな、シャルロット、落ち着け。そういうのはだな、好きな人……そう！一夏とかにやってもらえ！」

「ぼ、僕だって恥ずかしいんだよ？せっかく、甘えようと頑張ったのに…」

甘えるのってがんばってやるもんじゃないぞ。

そこ勘違いするな、シャルロット。

（くっ、だがあのシャルロットがここまで言ってるんだ、これは恥を忍んで叶えてやるべきか？）

必死に頭を働かせていると、シャルロットがベットから立ち上がり、

俺の隣に来る。

「ね？一回だけ…」

服の袖をつまんでねだってくる。

「ぐっ……！後悔しないのか？あとで訴えたりしないよな？」

「するわけないでしょ」

「……」

「……」

沈黙。

だあ！もう！

仕方ない、気合いだ、気合い！

これはそういうんじゃない、断じてそういうんじゃないからな！

「い、一回だけだぞ……」

ギュッ……

シャルロットを出来るだけ優しく抱き寄せる。

心臓がバクバクいってる。

あー…頭がくらくらしてきた……。

ヤバイ、すげーいい香りする……。

あれ？

なんか眠たくなってきた……。

……。

はっ！
しっかりしろ、俺！
自分を見失うな、気をしっかり持て！
……。
……。
……。
……。
つーか長くないか！？

「あ、あのさ、もうそろそろ……」

「……もうちょっとだけ」

ギュッ……

離れたくないと言わんばかりにますます力を入れるシャルロット。
チラッと顔を見たら、すごく嬉しそうだった。
あんまり幸せそうだからこっちまで幸せになってくる。

（母親がいなくなってから、ずっと我慢してたのかな…）

きっと、甘える相手がいなくて無意識に耐えていたんだろう。
シャルロットのことだ、そうに違いない。

「……頑張ったな」

そう言って頭を優しく撫でる。

「うん……」

小さく返事をして顔をうずめてくる
シャルロットがとてもかわいくて、いとおしくて。

ガチャ…

「「！！！」」

「た、ただいま……」

ドアが開いてから素早く離れた。
その速さといったらそれはそれはすごいものだった。
もしかしたら瞬時加速を超えたかもしれない。
入ってきた一夏が見たのは別々のベットに横になっている俺たちの姿。
まさかさっきまでとんでもなく距離が近かったなんて夢にも思うまい。

「お、お、お疲れ一夏…」

「め、飯は？」

「？もらってきたけど……」

「そ、そっか、サンキュ！じゃ、おやすみ！」

食事を受け取り、さっさと部屋に戻ろうとする。

「まてよ、信。……シャルルのこと、知ってたのか？」

シャルロットの分の夕食をテーブルに置いて、一夏が俺に話しかけ

る。
真面目な話だ。
声の調子でわかる。

「……初日からな」

「何で俺に言わなかったんだよ」

「シャルルが決めることだからだ。俺たちに決定権はない。それに、俺は口が固いんでね」

「……そうか」

「俺が『黙ってたほうが面白い』なんて考えるわけねーだろ。そしたら俺を一発殴らせてるさ。お前の希望通りにな」

一夏はいつもより真剣に俺を見つめていた。
こいつが今思っていることは本気だ。
俺が間違っていると判断した場合は、たとえ仲違いしても俺を殴るという覚悟がある。

「つくづく、お前が友達でよかったよ」

心底そう思う。

「俺もだ」

二人でニヤリと笑みを交わす。

コンッ

拳を合わせたあと、シャルロットが何やら苦戦してるのに気付く。
すでにテーブルの夕食と向き合っているのだが、様子がおかしい。

「くっ……ふっ……」

スカッ、スカッ、ポロッ

「何だよ、箸使えないのか？」

「練習してはいるんだけどね……」

シャルロットが弱々しく微笑む。

「悪い、気付かなかった。俺、スプーンとフォークもらってくるよ」

バタン

一夏が再び食堂へ走っていった。

「……信」

……なんでそんなに『何かしてほしい』みたいな声を出すんだ。
ここは振り向いたら負けの気がする。

「じゃー部屋に戻るから。おやすみー」

「待って！」

ぐあ！
手を捕まれた。

「そ、その、ね……」

「……何だよ今度は」

覚悟を決めよう。
今日は『シャルロットに甘えさせてやろう記念日』なんだ、きっと。
そうに違いない。
そう思わないとやってけない。

「信が食べさせて……」

「……一夏がスプーンとフォーク取りに行っただろ？って言ってもムダなんだよな…」

シャルロットの顔を見たら断るに断れない。
何よりとても楽しみにしているので、期待を裏切れない。

「一夏が戻ってくるまでだぞ。いいな？」

「うん！」

結局、スプーンとフォークが到着するまで四分の三くらい食べさせたあと俺は部屋に戻った。
一夏が夕食の減りぐあいを疑問に思っていたが、なんとか誤魔化した。

ガチャ……

すー……、すー……

あれ？
寝息が聞こえるぞ？
電気をつけてみると……

「……鈴？」

俺のベットに横になって寝ていたのは鈴だった。

「なんでお前がここにいんだよ……」

だがこんなに気持ち良さそうに寝ているのに無理矢理起こすのも気が引ける。
ふとテーブルを見ると、何か弁当箱のようなものがある。

「のこさずたべなさいよ……むにゃむにゃ」

鈴が寝返りをうつ。
とりあえず弁当箱を開けるてみる。

「……酢豚？」

なんで俺だ。
一夏に持ってけよ。
ん？
ああ、あれか？
この前の『料理は人に食べてもらうと上達する』って言ってたやつか。

一夏の前に俺で試そうとは。

「……せっかく作ってくれたんだし、夕食もまだだから食べるか」

そのあと酢豚も含め、夕食を完食したあと、シャワーを浴びて服を着替える。

問題はここからだ。

「ベット減らすんじゃなかった…」

俺は部屋を広々使うために入学後ベットを一つにした。

今、残ったベットを鈴が使っているため俺の寝床が無いのだ。

「床で寝るか…」

一日ぐらい安眠出来なくても大丈夫だろう。

安易な考えでベットの隣に横になる。

いろいろ慣れないことをしたせいか、すぐに眠りに落ちた。

真っ白。

どこもかしこも、どの人も。

「肉体損傷は？」

「皆無です。あり得ないですね…。あれだけの爆撃をピンポイントで受けたのに…」

「システムはうまく作動してるみたいね。まったく、とんでもない天才がいたものね」

二人が話していると、もう一人の男が部屋に入ってくる。

「どうだ、調子は？」

「ええ、良好よ。このまま行けば、次のステップへ進めるわ」

「次って何するんですか？」

「それは――――」

場面が変わる。
ＩＳ学園のアリーナだ。
鈴とセシリア、それにボーデヴィッヒだ。
戦ってる。
ボーデヴィッヒが二人を圧倒している。
…おい！
もうやめろ！
鈴とセシリアが細いワイヤーのような武器で首を締め上げられている。
とても苦しそうだ。
このままでは……！
ボーデヴィッヒが笑う。
その笑みには自分のしていることに対しての喜びが入っている。
お前…！
自分がなにしてんのかわかってんのか！
このまま続けたら二人が死んじまうんだぞ！
鈴！セシリア！

「…し……ん。しん。信！」

「はっ！」

ガバッ！

「はぁ、はぁっ……」

「どうしたの信？」

鈴が俺を覗き混んでいる。
俺を心配している。
お前は自分を心配しろ！
今、ボーデヴィッヒに……？

「あ……れ？」

アリーナではなく俺の部屋だった。

「信？大丈――」

頭で考えるより先に体が動いた。

「鈴……！よかった……」

「ち、ちょ、ちょっと！信！？」

「ん？……あ」

気付くと鈴を抱き締めていた。

「ご、ごめん！」

「……／／」

またやっちまった……。

どうして俺はこうなのだろう？

「本当にごめん…」

「べべ、べ、別に気にしてないからいいわよ…。あたしもここで寝ちゃったし」

「そうだ。なんでお前がここにいるんだ？」

「そ、それは……／／」

「酢豚か？……うん、あれはうまいと思うぞ。わざわざありがとな」

鈴の考えてることはわかってる。

とりあえず褒めて、お礼を言う。

「そ、そう？アンタが食べたいって言ったから作ったのよ。どお？嬉しい？」

「ああ、すごく嬉しいよ」

ここに鈴が無事で居てくれて。

「う、うん／／そ、それより！どうしたの？ずいぶんうなされてた

わよ？」

「嫌な夢見てな……」

またか。

必ず、過去と未来がセットで夢になる。

しかもすべて悪いものが。

「鈴。ひとつ、約束してくれ」

「何？」

「ボーデヴィッヒとは絶対戦うな。いいな？」

「いや」

「なっ……！お前なぁ！」

「あたしが負けると思ってんの？ふん、なめないでよ！あたし、超強いんだから」

こいつ、素で言ってやがる。

得意気な顔がまた似合っているところがなんとも言えない。

確かに、鈴やセシリアが簡単に負けるとは思えない。

山田先生には負けたが、先生なのだから当たり前だ。

でも、あの感じ……。

予知夢の感覚だった。

「わかった。その言葉、信じておく」

「ふふん。そうしなさい」

「ところで鈴。一夏に酢豚持ってかないのか？あれで十分うまいと思うぞ」

「へ？いや、えっとね…。そう！まず信に食べさせてもっと上手くなろうって思ったの！毎日食べさせるから、しっかり感想いいなさいよ！」

マジか。
やめてくれ。
やんわりと断ろう。

「でもさ、好きな人から言われたほうがやる気出んじゃないか？」

（だからそれがアンタなのよ！）

？
なんか言いたそうだな？

「ほら、毎日俺が食べたらあの約束の内容、俺とになっちまうぞ」

「……／／」

「なんで顔赤いんだよ」

「！なっ、なんでもないわよ、馬鹿！わかったわよ！たまにでいいわ！たまにでいいから、ありがたく食べなさいよ！いいわね！」

「へいへい。じゃあそろそろ自分の部屋に戻れ」

そう言って鈴を追い出し、いろいろと準備をする信であった。

◇

最近、鈴は自分の気持ちが変わってきているのを感じていた。
信に喜んでもらいたい、一緒にいたいと思うようになり、一夏よりも信を目で追うようになった。
そのたびに、鈴は『あたしは一夏が好き』と自分に言い聞かせるのだが……。

（前みたいにドキドキしない……）

そうなのだ。
以前はそう思うことすらできないほど胸がときめいたのに、今はまったくない。
変わりに信を見ていると、鼓動が早くなる。
近くにいきたい、側にいたい。

（と、突然抱き締めてくるし……。い、意識するじゃないの！）

いつの間にか一夏の認識が『仲のよい男友達』になっていた。
だが信は……。
顔が熱くなる。
自分ではどうしようもないほど胸が苦しい。
実は信の部屋で寝ているときに夢を見た。
とてもいい夢を。

『しーん！ご飯よー』

『わかった、わかった。お！今日も酢豚か。これで1ヶ月連続だな。鈴の酢豚はほんとうまいんだよな～』

『ふふん。そうでしょう、そうでしょう』

『俺にはもったいない奥さんだよまったく…。なあ、鈴……』

『うん……。いいよ……』

そして二人の唇が――

っていう一番いい場面で目が覚めた。

（ああっ、もう！もう少しで信とキ――）

「なっ、なに考えてるの！あたしが好きなのは――」

言いかけて、とまる。

本当に？

それが本当の気持ちなの？

「好きなのは……信？」

「呼んだ？」

「ひゃあっ！」

振り返るとまさに本人が立っていた。
とても不思議そうな顔をしている。

「な、なな、な、何のよう？」

「いや、弁当箱忘れてたから」

綺麗に洗われた弁当箱を手渡される。

「どうしてそんなに顔赤いんだ？」

「全然！」

「？じゃあこれで」

背を向けて去っていく信を見ている鈴の頬はしばらく赤色に染まったままだった。

◇

＼コンコン／

「はーい」

ガチャ

「よっ、セシリア」

「し、信さん!?」

てっきりルームメイトが帰ってきたのだと思ったセシリアは思わぬ訪問客に焦った。

「どうしたんですの?も、もしかして、わたくしに会いに――」

「ん?まぁそうだな」

(ええっ!し、信さんそんな……。大胆ですわ／／)

「ホラ、昨日夕食誘ってくれたのに一緒に行けなかったじゃないか。だから今度一緒に行こうと思って、約束しに来たんだ」

「そうですか!わたくしはいつでも大丈夫ですので、信さんの都合がいいときで結構ですわ!」

「そっか。じゃあそうするよ。それともうひとつお願いがあるんだ」

「はい!何でしょうか?」

セシリアは信がわざわざ食事の約束をしに来てくれたことで有頂天になっていた。

「ボーデヴィッヒとは絶対戦わないでくれ」

「は?」

予想外の約束で頭に『？』が浮かぶ。

「いや、理由は言えないんだが、そうしてほしい」

「わかりましたわ」

別に断る理由も無いので約束をすると、信が突然手を握ってくる。

「セシリア……。やさしいやつだな、お前。鈴とは大違いだ」

「そ、そんな……とと、当然のことですわ！」

キラキラと目を輝かせている信を直視できず、顔をそむける。
心臓がこれ以上ないほど早鐘をうつ。

「と、ところで、なんで鈴さんが出てきますの」

僅かに冷静さを取り戻し、疑問点を見つける。
鈴と約束したなら、わざわざ自分とする必要は無いのでは……。

「鈴だけって訳にもいかないことなんだ。……そうだ。セシリア、もし鈴がボーデヴィッヒと戦いそうになったら止めてくれないか？」

「どうしてわたくしが？」

「お前を信頼してるからだ」

「……／／」

「と、いうことだ。じゃーな、セシリア、よろしく～」

信は握っていた手をパッと離すと、そのまま振り返ることなく行ってしまった。

セシリアはまだ残っている繋いだ手の温もりを確かめながら、一人やさしく微笑むのであった。

１９：ベットの下はもう常套手段なのであまり使われない（前書き）

気を抜くとシャルロットがらみの話が増えていく今日この頃……

（。ロ。）

だってかわいいじゃないですか！

19：ベットの下はもう常套手段なのであまり使われない

「そ、それは本当ですの！？」

「嘘ついてないでしょうね？」

「本当だって！月末の学年別トーナメントで優勝すると、織斑くんか真宮くんと付き合えるの！」

「ちなみに織斑くん派と真宮くん派は五分五分ぐらいだよ！」

月曜日の朝、俺《信》と一夏とシャルロットが教室に入ると、女子がまた集まって何やら話し込んでいた。

あれ？

鈴もいるじゃないか。

お前二組だろう。

「なんの話？」

シャルロットが笑顔で話しかけると、女子たちはみな悲鳴をあげて散らばった。

「お前ら何してたんだ？」

一夏も不思議そうだ。

「またなんか隠し事か？……もうしないぞ」

周りの女子たちからチラッと『また嘘ついてるか確かめるの？』と

いう雰囲気が出ていたので、釘をさしておく。
みんな嘘つきだっていうことがこの前わかったからな。

「じゃ、じゃああたし自分のクラスに戻るから」

「わたくしも自分の席につきませんと」

そさくさと逃げるようにその場を離れる鈴とセシリア、あと他の女子。

「なんなんだ？わかるか？信」

「いや。どう思う？シャルル」

「さあ？どうだろうね？一夏」

質問が一巡してしまった。
三人揃って首をかしげていると、箒が目に入った。

（あいつ、なんか悩んでるな。あとで聞いてみよう）

そして今日もまた授業が始まるのであった。

◇

（なんでこのようなことに……）

箒の悩みの種は例の噂。

『学年別トーナメントの優勝者は織斑一夏、もしくは真宮信と交際できる』という内容だった。

（なんで信まで巻き込まれているのだ！だいたい、優勝したら一夏と付き合えるのは私だけのはずだ！）

あのとき箒は

『学年別トーナメントで優勝したら……つ、付き合ってもらう！』

と宣言したのだが、何故か歪みに歪んで学校中に広まってしまった。

「はあ……」

ため息が出てしまう。

「幸せが逃げるぞ、箒」

うしろからの声に振り向くと……

「……いない」

「もう横にいるよ」

右側に信がいた。

何なんだろう。

悩み事や頼み事など、助けてほしいときに信が現れる気がする。

「困ってる人を助けるのが目標でね」

ニヤリと笑う信。

「どうしたんだ？まあ予想はつくが」

「……なんだと思う？」

「一夏だろ、一夏。『付き合ってるのに自分だけ特別に扱ってくれない』ってことだろ？……あれ？違うの？」

「ひとりで話を進めるな……」

心が読まれてしまうとどんどん話が進んでしまう。

「はあ…。実はな、信――」

――――

「なるほど。つまり『学年別トーナメントで私が優勝したら付き合ってね、一夏』→『学年別トーナメントで優勝したら付き合えるね、一夏』→『学年別トーナメントで優勝したら一夏と付き合える』という図式で、お前はまだ一夏と付き合ってないわけか」

「そういうことだ……」

「……」

事のあらましを伝えると、信はガッカリしているようだった。

「お前さぁ……もう『私と付き合って、一夏！』でいいじゃないか。俺はもうてっきり……」

「し、仕方がないだろう……」

「こうしている間にも着々と一夏を狙うやつは増えてんだ。どうすんだ？」

「う、うるさい…」

「なんでそんなに怖がるんだよ。箒みたいな美人に告白されて嬉しくないやつなんかいないぞ？」

「なっ…！／／」

突然『美人』と言われて照れてしまう。

しかし、ここでにやけては…！

「怖がってたらずっとこのままだ。それだけは間違いない」

「な、ならば、お前から一夏に言ってくれ。わ、私がすすす、す、……」

「好きだって？」

箒の言わんとしていた言葉を引き継いだ信がニヤニヤしている。

「～～～……！／／」

コクコク

うなずくのが精一杯だった。

信はまだニヤニヤしている。

「馬鹿言うな。そんなんでお前が納得するのか？本当にそれが一夏に告白したことになるのか？箒が一番わかってるだろ」

確かにその通りだ。

そんなやり方で自分が納得するとは思えない。

「それにな、こういうのは第三者が介入するもんじゃないんだ。話がややこしくなるからな。俺は中立の立場で温かく見守らせてもらう」

（すでにややこしくしているではないか…。あの噂にはお前も含まれているのだぞ…）

「なに考えてんだ？」

「信……自分のことには鈍いのだな…」

多少あきれが混ざったため息をはく箒であった。

◇

「あら？」

声に反応して鈴が振り向くとセシリアがこちらに向かってきていた。

「奇遇ね。あたしはこれから学年別トーナメント優勝に向けて特訓

するんだけど」

「わたくしもまったく同じですわ」

むむむ…

二人がいがみ合う。

「この際どっちが上かはっきりさせるのも悪くないわね」

「よろしくてよ。どちらがより強く優雅であるか、この場で決着をつけてさしあげますわ」

どちらも自分のほうが強いという点で譲らない。

いや、譲れない。

「もちろん、あたしが上なのはわかりきってるけど」

「弱い犬ほどよく吠えるとは本当ですわね」

「どういう意味よ？」

「自分が上だってわざわざ大きく見せようとしているとこなんか、典型的ですもの」

カチン！

鈴の中の何かにスイッチが入った。

「その言葉…そっくりそのまま返してあげる！」

鈴は専用ＩＳ『甲竜』を、セシリアも同じく専用ＩＳ『ブルー・テ

ィアーズ』を展開する。
すぐさま戦闘が始まるはずだったが、思わぬ横槍が入った。

ドォォン！！

「「！？」」

砲弾が二人の目の前を通り過ぎ、アリーナの壁面に当たって爆発する。
発射したのは――

「ドイツ第三世代型ＩＳ『シュヴァルツェア・レーゲン』！」

「ラウラ・ボーデヴィッヒ……」

鈴とセシリアがそれぞれ表示された敵機の情報を確認する。
ラウラは不適な微笑を浮かべていた。

「どういうつもり！？いきなりぶっ放すなんていい度胸してるじゃない！」

「中国の『甲竜』にイギリスの『ブルー・ティアーズ』か。データで見たときの方がまだ強そうだったな」

二人がラウラの挑発にぴくぴくっと口元をひきつらせる。

「何？やるの？」

「り、鈴さん？あんなかた相手にする必要はありませんわ。先ほど言ったでしょう？弱い犬ほどよく吠えるのですわ」

鈴は完全に怒りに燃えていたが、セシリアは何とか平静を保とうとしていた。
信との約束がセシリアをかろうじてそうさせていた。

「貴様たちのようなものが私と同じ第三世代型専用機操縦者とは……。数だけが取り柄の真似事大好きな国と、古いだけが取り柄の国は、余程人材不足と見える」

ピピッ

鈴が最終安全装置を外す。
セシリアは踏みとどまったが、そろそろ冷静さを失いかけていた。

「この人、スクラップがお望みみたいよ！」

「そ、そうですわね……」

ギリギリ。
まさに極限まで怒りがたまっていた。

「ふん！二人がかりで来たらどうだ？下らん種馬を取り合うようなメスに、この私が負けるものか」

ついにセシリアも安全装置を外す。
信との約束が頭から吹き飛ぶほど、このドイツの候補生に腹が立った。

「今何て言った？あたしの耳には『どうぞ好きなだけ殴ってください』って聞こえたけど？」

「この場にいない人間の侮辱までするとは…。その軽口二度と叩けないようにしてさしあげますわ！」

ラウラは両手を広げ、ちょいちょいと自分側に向けて振る。

「とっとと来い」

「「上等！」」

◇

「あー、めんどくさいな…」

俺《信》はゆっくりと自分の席から立ち上がった。

一夏とシャルロットは先にアリーナに向かった。

『信！今日こそＩＳのこと教えてくれよ！』

と、一夏に頼まれたのだが……。

「教えんの面倒なんだよな…」

だが頼まれては嫌とも言えず、はいはいとうなずいてしまった。

出きるだけ教える時間を短くするために教室で暇を潰していたが、そろそろ行かないとまずい時間になった。

のろのろとあるっていると、女子数人が慌ただしく廊下を走っていった。

「どうしたんだ？」

たまたま通りかかった同じクラスの鷹月（たかつき）　静寐（しずね）さんに声をかける。

「あっ、真宮くん！大変なの！第三アリーナで代表候補生三人が――」

「わかった。ありがとう」

表情からなにがあったか読み取り、最後まで話を聞かずに走り出した。

まさか――

アリーナの観客席に着いたとき、最初に飛び込んできたのは白式を展開し、雪片弐型を構える一夏とその隣にいるシャルロットと箒の姿。

次に飛び込んできたのは最も現実で見たくなかった、あの夢の内容だった。

首をワイヤーブレードで絞められ、身動きが取れない二人にラウラが一方的に拳を叩き込む。

すでに鈴とセシリアのＩＳはすでに操縦者生命危険域（デッドゾーン）に入っている。

二人の苦悶の表情とボーデヴィッヒの愉悦に口元を歪めたのを見て、余計な考えが無くなった。

「一夏！鈴とセシリアを頼む！」

「ああ！」

俺は瞬光を展開すると同時に右手に朧火を剣の状態で呼び出す。

バキィッッッン！！

アリーナを取り囲むバリアーが二ヵ所、音をたたてて破壊される。
その裂け目を出るのと同時に俺は瞬時加速でボーデヴィッヒの目の前に現れる。

「ッ！貴様…！」

「退け、ボーデヴィッヒ。最終通告だ」

「誰に物を言っている！！」

ボーデヴィッヒが俺に対応するため、ワイヤーブレードを戻し、鈴とセシリアを解放する。

「一夏！二人を連れて離れてろ！」

「わかった！」

その間にもボーデヴィッヒは両手のプラズマブレード、さらにワイヤーブレードを器用に使って攻撃をしかけてくる。

「他人の心配をしている余裕があるのか？」

ビタッと俺の動きが止まる。
見えない力で全身が押さえられているようだ。

「ＡＩＣか……」

アクティブ・イナーシャル・キャンセラー。
慣性停止能力。
通称『ＡＩＣ』。
第三世代型の武器として紹介されていたのを前に見ていた。
なるほど、確かに身動きを封じられると厄介だな。

「はっ！所詮貴様も――」

「いいのか？」

「何？」

言葉を遮り、聞く。
自分でも驚くぐらい、冷たく黒い感情が心にある。
ボーデヴィッヒも察したのだろうか、少し怯えの表情が現れていた。

「停めるのが俺だけでいいのか？思い出せ、ボーデヴィッヒ。この前お前の喉元に武器がとどいたとき、俺は動いていたか？」

ボーデヴィッヒが俺の右手に視線を移すのが非常にゆっくりに見えた。
今度は完全に恐怖の表情を浮かべた目の前の眼帯少女はすぐさま回避行動を取ろうとする。
だが朧火はもう俺のイメージを反映し、光の粒子が動いている。

ジャキン！！

「…！！」

朧火は今までで一番大きく、広く、そして禍々しく形を変えていた。

俺の右腕から伸びたそれは一本ではなく何十本とボーデヴィッヒの首や心臓、両手両足に突き付けられている。
更にはボーデヴィッヒの回りにも槍状の朧火が展開され、見た目には『槍がボーデヴィッヒを刺さないようにした』というよりは『ボーデヴィッヒが槍の展開される場所にいなかった』という方が正しい。
針山地獄。
この状況はまさにそれだった。

「真宮、その辺にしておけ」

織斑先生がこちらに歩いてくるのを目の端でとらえた。
その目と声には有無を言わせぬ強制力があった。

「……わかりました。ただ、一つだけいいですか？」

「…かまわん」

朧火を解除し、ボーデヴィッヒと向き合う。

「……怖がらせて悪かった」

「……！私は……！」

「『怖くなかった』ってか？嘘つけ、震えてるじゃないか」

「き、貴様…！私を馬鹿にしているのか！？いいだろう！ここで――」

「そこまでだ、ボーデヴィッヒ、真宮。文句があるなら、その決着は学年別トーナメントでつけてもらおうか。これ以上騒ぎを起こされては困る」

織斑先生の声の調子はいつもと変わらないが、先ほど以上に強制力があった。

「……教官がそうおっしゃるなら」

渋々了解し、ＩＳを解除するボーデヴィッヒ。

「俺もそれでいいです」

決着を着けるなんてつもりはさらさらないが、ここで『いいえ』なんて言えるやつはいない。

「では、学年別トーナメントまで私闘の一切を禁止する。解散！」

◇

「あの男……」

ラウラは信のことが気になっていた。

あいつは強い。

それも自分の知らない強さを持っている。

あのときは冷静さを欠いていて、考えることができなかったが、今になって思うことがある。

『怖がらせて悪かった』

「……敵を心配するような甘いやつが、なぜあれほどまでに……」

ラウラは軍人だ。

敵に情けをかけるのはすなわち自らの甘さが招くものであり、強者には程遠いものだと考えている。

だが……

「真宮信……。お前は何を持っているんだ？」

◇

「……」

俺《信》は今保健室にいた。

俺から見て右手に鈴、左手にセシリアがそれぞれベットに寝ている。

二人とも怪我をして包帯が巻かれていて、見てるだけでも痛々しい。

対する俺は椅子に座って二人と向き合い、かれこれ三十分は何も喋っていない。

シャルロットも一夏も不安そうだが、そんなことは関係無い。

「……」

「な、何よ？さっきからジロジロ……」

「そ、そうですわ。言いたいことがあるならハッキリと言ってくだ

さい……」

言いたいことなら山ほどある。
ありすぎて何から話していいのかわからない。

「鈴、セシリア…」

「何？」

「なんですの？」

「ごめん」

予想外の言葉に目を丸くする二人。

「なんであんたが謝んのよ！」

「そうですわ！信さんは悪くないですわ！悪いのは――」

「違う。ボーデヴィッヒじゃない」

一旦話し出してしまうと、意外とスラスラと言葉が出てきた。

「お前らを信じた俺が悪い。お前らをかいかぶり過ぎてたよ」

「……！ちょっと、どういうことよ！」

「言葉通りの意味だ」

「それは聞き捨てなりませんわ！それではわたくしが弱いみたいで

はないですか！」

「そうよ！」

コイツらは本当に……！

沸々と怒りがわき出てくる。

「違うのか？約束を守れないやつと、人の助言を聞かないやつがよく言うじゃないか」

二人ともぎゅっと唇を噛み締めて、感情が流れ出すのをこらえている。

「き、今日はたまたま――」

「たまたま？たまたま何なんだよ！」

突然俺が上げた怒鳴り声に保健室にいる全員が凍りつく。

もう駄目だ。

我慢できない。

「お前らわかってんのか！？死にかけたんだぞ！！」

状況がよくわからず、混乱している鈴とセシリアに構わず続ける。

「あんなに苦しそうで、こんなに怪我して！！今更『たまたま』！？ハッ！冗談よせよ！」

「ちょっと、信――」

シャルロットが俺を止めようとするが、もう止まらない。

「なんで負けに理由をつけて逃げようとするんだ!?なんで素直に謝れないんだ!?『ごめん』ですむことだろう!?何強がってんだ!!」

一気にしゃべったせいで息が荒くなる。

だが言いたいことをすべて吐き出し、気持ちが落ち着いてきた。

「嫌なんだよ…。誰かが傷つくのを見るのは…。笑ってて欲しいんだ、みんなに」

俺が話すのをやめると、部屋が静まり返った。

どれくらいたっただろう。

鈴が初めに口を開いた。

「わ、悪かったわよ……。ごめん…」

セシリアがそれに続く。

「も……申し訳ありませんでした…」

……。

……。

……。

……。

あれ?

鈴とセシリアってこんなんだっけ?

「……ぷっ、あははは!」

今度は四人とも目を丸くする。
先ほど同様、何が起こったかわからないという顔をしている。

「な、なんだよそんなにしんみりして！なんか、変だなお前ら！」

「なっ！なによ！あんたが謝れって言ったんじゃない！」

「その通りですわ！信さん！失礼でしてよ！」

不愉快そうな二人を見ながらしばらく笑い、一段落してからまた話し出す。

「悪い、悪い。いやー、お前らが素直に謝るイメージが無かったからさ、面白くて」

「確かに」

「うん、そうだね」

一夏とシャルロットが隣で同意してくれた。
持つべきものは男友達だな。
シャルロットは女だけど。

「あ、あんたたちねぇ…」

「みなさんひどいですわ…」

「二人とも、もともと可愛いのにもったいないんだよ」

…あれ？
二人とも横を向いてしまった。
笑われ過ぎて怒ったか？

（な、なんでそうなるのよ…／／）

（反則！反則ですわ！／／）

なんで顔を背けているか聞こうと信が口を開こうとしたとき。

ドドドドド……

「な、なんだ！？」

バァァン！！

地鳴りが聞こえたかと思うと、突然ドアが勢いよく開いた。

「織斑くん！」

「真宮くん！」

「デュノアくん！」

「「「これ！！！」」」

突然雪崩れ込んできた女子の大群に気圧されていると、バン！と目の前に案内が突き付けられる。

「『今月開催する学年別トーナメントでは、より実践的な模擬戦闘

を行うため、二人組での参加を必須とする』――」

なるほど、ＩＳ学園では珍しい男子生徒と組むために必死なのか。

女子って大変。

「私と組もう、織斑くん！」

「私と組んで、デュノアくん！」

「私は真宮くんがいい！」

ギャーギャー

どうする？

ピカーン！

そうだ！

「俺は――」

「悪い！俺はシャルルと組むから諦めてくれ！」

ぐあ！

シャルロットを一夏に取られた！

（悪いな、信）

（くっ！あとで覚えとけよ……）

「そ、そうなの？まあ他の女子と組まれるよりは……」

「じゃ、じゃあ！真宮くん！真宮くんは？」

「え！？俺！？えーと、俺はだな……」

考えろ、考えろ、考えろ、考えろ……。

こ、これでどうだ！？

「お、俺が入ると人数合わないから、織斑先生に一人で出場しろって言われてるんだ」

……どうだ？

「お、織斑先生が言うなら…」

「そうね…」

ざわざわ…

パタン。

……ふぅ。

行ったか……。

「信…」

「嘘に決まってんだろ？」

「じゃあどうすんだよ？」

「案内に当日までペアが決まらない生徒は抽選って書いてあったか

ら、それでいいよ。くそー、俺もシャルルとペアがよかった」

「えっ！ほ、ホント？／／」

「ああ、そりゃもちろん」

シャルロットがもじもじしていると、そこに怪我人が割り込んできた。

「だったら信！あたしと組みなさい！」

「いえ、信さん！わたくしとぜひ！」

「駄目ですよ」

おお、我らが副担任、山田先生だ。
こいつらに言ってやってください。

「お二人のＩＳ、ダメージレベルがＣを越えています。トーナメント参加は許可できません」

「「で、でも……」」

二人を見れば何を考えているか一目でわかる。
コイツらは本当にこんなときでも…。
半ばあきれつつ、二人に小声で話しかける。

（安心しろ。俺か一夏たちのどっちかが優勝すれば問題ないだろ？）

（えっ！し、信、もしかしてあの噂……）

（聞いた聞いた。一夏と付き合えるってやつだろ？）

（それだけ？）

（あれ？違うのか？）

（違くは無いのですが…）

（？まあいいや、だからゆっくり休んどけ？いいな？）

（わかったわ…）

（仕方ないですわね…）

「あんたたち！絶対優勝しなさいよ！」

「わたくしたちの分まで頑張ってください！」

いつもの調子に戻った二人を見て、安心する信だった。

―――――――

「いやー、疲れたな今日も」

「そうだなー。それにしても信が怒ったの初めてみたよ」

「そりゃ、ここに来てから怒ったの始めてだからな」

俺たち三人は保健室から寮へ戻る途中、いろいろと他愛もない話をしていた。

「でも信って優しいね。あんなに他人のこと思ってはっきりものを言う人っていないよ」

「そ、そうかな？」

「うん。そうだよ」

シャルロットが見せる笑顔に照れてしまう。

さて…

「あっ！ごめん二人とも。職員室に用があったんだった。先帰っててくれ」

「わかった」

「うん。気を付けてね、信」

二人とは逆方向に走り出す。

しばらく走って、二人の姿が見えなくなった。

「……出てこいよ。何のようだ？」

「……」

木のかげからボーデヴィッヒが現れる。
保健室からずっとつけていたらしい。

「……聞きたいことがある…」

「なんだ？」

「なぜお前は強いのだ？」

「強くねーよ」

「嘘をつけ！実力が有りながら、どうしてこんなところにいるのだ！」

「その質問、そっくりそのままお前に返す」

ボーデヴィッヒは強い。
戦い方は非常に気にくわないが、実力は間違いなく一年生トップクラスだ。

「……」

「　別に答えなくていい。だけど…」

確かに気にくわない。
気にくわないが、見捨てる気にもなれない。
夢で見たボーデヴィッヒの表情を思い出す。

「助けて欲しいときは俺に言え。今日のお詫びに助けてやるよ」

「……」

「じゃあな。あと、聞きたいことがあるならまどろっこしいことしないで直接聞きに来い」

そう言って俺は再び帰路についた。

◇

（一夏には悪いけど、信とペアになりたかったな……）

シャルロットはそんなことを考えながら、着替えを始めた。

一夏に気を使い、自分の部屋を出て別なところにいる。

その別なところとは……

（信ってこのベットで寝てるんだ……）

隣の部屋、つまり信の部屋である。

まだ信は帰ってきてないので、さっさと着替えてしまえば問題ないだろうと判断したのだ。

ところがいざ入ってみると信の部屋に一人きりということで、いろいろと気になる点が出てきてしまった。

（ベットの下……）

ちょうど下着の状態になったときに、その隙間が気になった。

（……お、男の子ってこういうところにそういうの隠すんだよね

…）

しばらくじーっと見たあと、ついに好奇心に負けた。
キョロキョロと辺りを見回し、耳を澄ます。
誰もいないし、足音も聞こえない。

（確かめるだけ、確かめるだけだよ？）

よつん這いになってベットの下に手を入れて、動かしてみると……。

コツン

何か平べったいものに当たった。
どうやら本のようだ。

（……／／）

恐らく当たっているだろう自分の想像を思い、顔が赤くなる。

「し、信のえっち……／／」

ここでシャルロットは迷った。
このままそっとしておくべきか、それとも事実を確かめるか。

（で、でも普通だよね？男の子が興味持つのって……。そう！これは男の子になりきるための勉強だよ！勉強なんだよ！？）

ゴクリ。

本らしきものを掴んだそのとき。

ガチャ

「ふぁ…。ねむ――」

部屋に入ってきた信とベットの下に手を入れているシャルロットがお互いを見る。

ここでシャルロットは気付いたのだが、まだ自分は着替えの途中で、胸を隠すための男装用コルセット、下は淡いピンク色のパンツのままだった。

しかも四つんばいでお尻をつき出すような格好だったので、パンツがきゅっと食い込んでいる。

「よ、よぉ…」

「お、お邪魔してます…」

「あ、ああ、ごゆっくり……」

ギィ…パタン

(う、うわぁ！ど、どうしよう！すごいとこ見られちゃった！……でも信なら別に……はっ！なに考えてるのさ！！／／)

／し、シャ、シャルル……／

ドアの向こうから信の声がする。

「な、何？」

／い、いろいろと言いたいことはあるんだけどさ、とりあえず、早く着替えてくれ…／

「そ、そうだね。すぐ終わらせるよ…／／」

ぱぱっと着替えて、ドアを開ける。

「どうぞ……」

「いや、俺の部屋なんだが…」

そのあと、信は洗面所で着替え、シャルロットはその間ベットに座ったままだった。

信が着替え終わり、自分の隣に座る。

怒っている様子は無い。

「……何してたんだ？」

「……わかってるくせに」

「まあな」

「信のいじわる……」

「で、何してたんだ？」

とても楽しそうに、いたずら好きの子供っぽい笑顔を向けられたシャルロットはドキドキしっぱなしだった。

「そ、その、ベットの下にね……。そういうのが……」

「そういうのってなんだよ？」

ニヤニヤ。

「そ、それは……。そ、そこまで言わせないでよ！／／」

「ハハッ！ごめんごめん。でも、そんなの無かっただろ？」

「えっ……！」

でもあれは確かに……。

信が首をかしげる。

そしてベットの下に手を入れて何かを探す。

「ん？なんだこれ？……あっ！」

「なになに？」

信が引っ張り出したのは、何度も読み返してボロボロになった童話の本だった。

「こんなところにあったのか。ずっと探してたんだよな～」

「何なの、これ？」

「これはな、俺が小さい頃に親にもらった本なんだ。お守りみたいなもんかな」

「そ、そうなの…？……信のお父さんとお母さんってどんな人？」

「うーん……。優しくて、強い人、かな？」

「そうなんだ……」

親らしい親が今は一人もいないシャルロットにとって、そんな信が羨ましかったり。

「まあ、今は旅に出て家にいないけどな」

「旅？どこに？」

「どこにでも、かな？行き先とか目的地がないほうが楽しいんだと」

「ふぅん。いつから？」

「ＩＳ学園の入試の日から。入試から帰ってきたらさ『宝くじが当たりました。早速旅に出てきます』ってテーブルに置き手紙があったんだよ」

「すごいお父さんとお母さんだね……」

「まあ、どちらかと言うとおじいさんとおばあさんって感じだけどな。……血が繋がってないんだ、俺は」

「えっ……！」

「小さい頃にな、拾われたんだ」

そう言って弱々しく笑う信は、なんだか悲しそうだった。

「悪い。なんか重い話になるな」

信は手に持った本を指差す。

「これ読んでみろよ、面白いんだぜ？」

手渡された本を早速読み初めるのと同時に信が大きなあくびをする。

「じゃあ俺は寝るよ。おやすみー」

信は布団に潜り込む。

「うん。おやすみなさい。読み終わったら帰るね」

薄い本だからすぐ読み終わるだろう。

信はひらひらと手だけ振り、目を閉じた。

――――

「ふぅ…。終わったー」

思いの外長くかかった。

信はすでにぐっすりと寝てしまっている。

その寝顔はなんだか無邪気で、子供のようだった。

（たまに子供みたいなところがあるよね、信は）

シャルロットは信の隣に横になり、その幸せそうな寝顔をじっと見つめた。

「ふふっ…」

頬をツンツンとつつく。

「うーん？……むにゃむにゃ」

ツンツン。ツンツン。ツンツ、ガシッ！

（うわあっ！）

調子に乗っていたら腕を捕まれた。

「……すー……すー……」

どうやらまだ寝ているようだが、これでは逃げられない。

（どうしよう……）

「……すー……はは っ……」

信は本当に幸せそうだ。

その笑顔をみていたら、なんだか安心して眠くなってきた。

「おやすみ……し…ん……」

眠気に身をまかせ、目を閉じる。

シャルロットはそのまま夢の世界へと入っていったのだった。

１９：ベットの下はもう常套手段なのであまり使われない（後書き）

くっそぉぉぉ！

シャルロット以外にも鈴とかセシリアとかラウラとか箒とか書きたいのに……！

指が、指が勝手にぃぃ！　（Ｔ＿Ｔ）

20：シャンプーって必要なときに無いもののひとつ

窓からまぶしい朝日がさし込む。

「うーん……。ん？」

目を擦って視界がハッキリしてくると、とんでもないものが目に飛び込んできた。

「……」

「すー…ふふっ……」

俺《信》は自分のおかれた状況を分析する。

まず昨日は眠かったので、自分の部屋のベットで寝た。

普通だ。

シャルロットはあの本を読み終わったら帰ると言っていた。

ところが、シャルロットはまだ俺の部屋にいる。

普通だ。

いや普通か？

まあ百歩譲って普通だとしよう。

隣で寝てるのは普通か？

異常だ。

「うわぁ！！」

ようやく状況を理解した俺は一気に目を覚まし、ベットから飛び起きる。

（お、俺、へ、変なことしてないよな？）

いろいろと確認するがそういう痕跡は見当たらない。

「う？うーん？……あっ、信。おはよう…」

シャルロットは寝ぼけ眼であははと笑って挨拶をする。

「お、おおお、おま、お前……」

俺はかなり動揺してシャルロットを指差す。

最初は『？』となっていたシャルロットも自分の状況を理解したらしく、かぁぁっ…と顔を赤くする。

「いいい、いや、こここ、こ、これは……」

「……なんかおかしなところないか」

一応シャルロットにも確かめておこう。

絶対に、確実に！

そんなことをした覚えはないが！

もし、万が一、そういうことが起こった最悪の場合もある。

「なにもないけど……。な、なんかしたの……？」

なんで自分の体を抱き抱えるようにして俺を見るんだ。

俺はそんなことするやつに見えるのか。

「してない！絶対に！」

（してないんだ……）

「とにかく！そういうことはだな、一切してない！お前も無防備過ぎるぞ！女の子が隣で寝てたら――」

そこで口をはっと閉じる。

自分の想像したことに顔が熱くなる。

「なに？女の子が隣で寝てたら何なの？」

「い、いや…何でもない…」

「信って嘘つくのは下手だね。何考えてたの？教えてよ」

シャルロットは赤い顔のままニヤニヤと楽しそうに笑っている。

く、くそ……。

『昨日の仕返し』だと……？

「いいだろそんなことは……」

「良くないよ。ねぇ、なに？何なの？」

「だ、だからだな……可愛い女の子が隣で寝てたら……俺も健全な男子高校生なわけで……そういうあれがこう……」

「へー、そんなこと考えてたんだー」

ニヤニヤ。

ぐっ！

この笑顔は怒るに怒れない……！

「い、いいから！早く部屋に戻れよ！ほら！」

俺はドアを開けてシャルロットが帰るように促す。

「ふふっ。ごめん、ごめん。戻るよ」

シャルロットはどうやら満足したようで、ニコニコと立ち上がり、部屋から出る。

「信」

部屋から一歩出たところでシャルロットが振り向く。

「……えっち」

「……」

今回ばかりは否定できない。

シャルロットはそのまま笑顔で戻っていった。

◇

「しかし、すごいなこりゃ……」

俺《一夏》はモニターから観客席の様子を見る。

わきのテロップには来賓の職業、所属する会社、名前がズラズラと

流れていた。

「三年にはスカウト、二年には一年間の成果の確認にそれぞれ人が来ているからね。一年生には今のところ関係ないみたいだけど、それでもトーナメント上位入賞者にはさっそくチェックが入ると思うよ」

シャルルの説明に信が補足を加える。

「それに今回は珍しい例外が一年生にいるからな。興味しんしんなんだろ」

信だけにか？

「つまんねーよ、馬鹿」

「僕もそう思うよ、一夏」

「シャルルまで！？」

下らないやり取りで三人が笑いあい、緊張がほぐれる。

「しっかし、本気で一人で出場することになるとは……」

信が言ったあの嘘はなんやかんやで千冬姉の耳に入り、

『真宮』

『はい？』

『お前の希望通り一人で出場させてやる』

となった。

まさに嘘から出た誠だな。

と、ここでトーナメント表がモニターに表示された。

「おっ！俺、シードだ。ラッキー」

最初に信が自分の名前を見つけた。

「あれ？お前ら俺の隣じゃないか」

「本当だ。対戦相手は――」

対戦相手はよく知っているやつだった。

学年別トーナメント
Ａブロック一回戦　一組目

織斑　一夏
シャルル・デュノア
ＶＳ
篠ノ之　箒
ラウラ・ボーデヴィッヒ　――

◇

俺《信》は背筋が凍った。

（この組み合わせは……！）

この前の嫌な夢を思い出す。

どうする？

トーナメントを中止にする権限なんて俺にはないし、理由が理由だ。

『夢で見ました』なんて気が狂ったやつだとあしらわれるのは目に見えている。

「一夏、シャルル。……危ないと思ったらすぐ逃げろ」

「は？なんだよいきなり」

「信？心配してくれてるの？大丈夫だよ、僕たちなら」

違う。

試合の勝ち負けとかそういうことじゃないんだ。

だが誰に言ったって『そんな馬鹿な』で終わらせられてしまうだろう。

くそ！

俺はどうなるか知ってて仲間を危険にさらすのか……？

自分の無力に腹が立つ。

「まったく、信は心配性だな」

そう言って笑う一夏とシャルロットと比べ、俺の表情はとても固かった。

◇

「一戦目で当たるとはな。待つ手間が省けたというものだ」

「そりゃあなによりだ。こっちも同じ気持ちだぜ」

俺《一夏》は雪片弐型を強く握りしめる。

試合開始のカウントダウンが始まる。

5、4、3、2、1――

――0

「「叩きのめす！！」」

俺とラウラが同時に叫ぶ。

刹那、ラウラに向けて瞬時加速を行う。

試合開始直後にシールドエネルギーを大幅に削ることが出来れば、一気に有利になる。

だか――

「はっ！」

ピタッ！

ラウラのＡＩＣが俺の動きを止める。

「開幕直後の先制攻撃か。わかりやすいな」

「そりゃどうも。以心伝心で何よりだ」

ガチャン！

『シュヴァルツェア・レーゲン』の大型レール砲が俺に向けられる。
絶体絶命。
だけど。
「させないよ」
シャルルが俺の頭の上を飛び越えて現れる。
同時に六一口径アサルトカノン『ガルム』による射撃が、ラウラのレール砲に当たる。
「ちっ……！」
照準が僅かにずれ、俺の左頬すれすれを砲弾が飛んでいく。
「逃がさない！」
シャルルがすぐさま左手にアサルトライフルを呼び出し、急後退して間合いをとるラウラに追い討ちをかける。
「私を忘れてもらっては困る」
ラウラへの追撃を遮るように量産ＩＳ打鉄（うちがね）を纏った箒が現れる。
「それなら、俺も忘れられないようにしないとな！」
俺と箒、互いの近接ブレードがぶつかり合って、火花を散らす。
ここで負けるわけにはいかない。

「絶対勝つ！」

◇

俺《信》は一人、更衣室のモニターで試合の様子を見守っていた。
先程、シャルロットが箒を戦闘不能にし、二対一の有利な状況に持ち込んだ。
このままだと一夏とシャルロットが勝てるだろう。
そうなってほしい。

「今のところ問題は何もないようだが……」

だが俺の願いはかなわなかった。

バリバリバリッ！！

『シュバヴァルツェア・レーゲン』から激しい電撃が放たれる。
ボーデヴィッヒのＩＳがドロドロに溶ける。
そして、黒い塊に姿を変えボーデヴィッヒを飲み込んだ。
ボーデヴィッヒを飲み込んだ『もの』はさらに形を変え、どこかＩＳの雰囲気を漂わせながら、まったく別物の『何か』に変形した。
その時すでに更衣室には誰もいなかった。
俺は電撃が放たれるのを見た瞬間、すぐさま助けに向かっていた。

◇

「何だよ、あれ…！？」

先程、俺《一夏》は勝利を確信した。

シャルロットの奥の手、盾の装甲の下に隠してあった第二世代型最強と謳われる六九口径パイルバンカー『灰色の鱗殻（グレー・スケール）』。

通称『盾殺し（シールド・ピアーズ）』。

まさにそれがラウラに直撃し、吹っ飛ばす。

さらにそれを続けざまに三発撃ち込まれ、すでにシールドエネルギーは空に近かったはずだ。

しかし、今目の前ではラウラのＩＳは動いている。

だが、これはＩＳなのか？

ＩＳと呼ぶには不気味で、奇妙だった。

この前の未確認ＩＳは完璧にＩＳの形をしていたので、不気味は不気味でも想定内の不気味だった。

今回は違う。

ＩＳという概念に無理矢理収まろうとしているような、そういう感じが不気味だった。

その時俺は敵の手に握られた武器を見た。

それは――

「『雪片』……！」

千冬姉のかつて振るった刀。

世界最強の、俺の姉の武器。

俺は無意識に『雪片弐型』を握りしめ、中段に構えた。

「――！」

刹那、黒いＩＳが俺の懐に飛び込んで来る。

居合いに見立てた刀を中腰に引いて構え、必中の間合いから放たれる必殺の一閃。
それは紛れもなく千冬姉の太刀筋だった。

キィィン！

『雪片弐型』が弾かれ、俺から武器がなくなった。
まずい。
そして相手は止めとばかりに刀を高く掲げ、降り下ろす。
何とか直撃は避けたものの、左手に衝撃が走った。
同時に限界を超えた白式が光の粒子になり、俺の体から消えた。
左手からじわりと血がにじむ。

（今の技……千冬姉の！）

もう冷静ではいられなかった。
千冬姉の真似なんかしやがって！
その技は千冬姉だけのものなんだ！

「うおおお！！」

こいつを殴れれば、俺はどうなったってかまわない。
ただ拳を握って突っ込む。
俺を迎え撃つべく、相手が再び刀を振り上げる。
そして――

ガキィィィン！

「ぐっ……！箒！シャルル！一夏を落ち着かせろ！」

瞬間、後ろにぐいっと引っ張られる。

「一夏！信の言う通りだ！落ち着け！！」

信は瞬光を身に纏い、右手の朧火で相手の斬撃を受け止めていた。

「俺がこいつを助ける！早く逃げろ！」

「待ってくれ、信！こいつは俺がやる！俺がやらなきゃいけないんだ！いや、やりたいんだ！」

信が相手を遠ざけるように剣を降り、間合いが空く。

「もう白式のエネルギーは――ッ！あーくそ！わかった、俺が時間を稼ぐ。その間になんとかしろ」

俺の覚悟が揺るぎないものだと感じたのだろう、信は渋々了解した。

「先生方、すみません。ここは俺たちに任せていただけませんか？」

信がオープンチャネルで駆けつけた教師部隊に話しかける。
いろいろと言われているようだが、俺には聞こえない。
それよりも白式のエネルギーをどこから持ってくれば……。

「一夏、無いなら持ってくればいいんだよ」

シャルルがそばまで来ていた。
ケーブルのようなものをリヴァイヴから伸ばし、白式に接続する。

「リヴァイヴのコア・バイパスを開放。エネルギーの流出を許可…

「……」

体の中に力が溢れてくる。

その力を溢さないように、逃さないように終わるのを待つ。

「絶対に勝つ…」

試合の勝敗とはまた違った覚悟が俺の中にあった。

◇

『ダメよ！あなたたちは生徒。そんなワガママは聞けない』

俺《信》は必死で先生たちを説得するが、まったくらちがあかない。

内心やきもきしながらも、何とか穏やかな口調をつくる。

「お願いします。これだけは譲れないんです」

『ダメ。もしもあなたたちに何かあったら――』

『いいだろう。真宮、お前たちに任せる』

回線に織斑先生が割り込んできた。

『――――！織斑先生！』

『指揮権は私にあります。教師部隊はその場で待機してください。

責任は私がとります』

思わず笑みがこぼれる。
カッコいいな織斑先生。

『真宮……頼んだぞ』

『安心して下さい。先生に責任なんか取らせませんよ』

そう言ってオープンチャネルを切り、今度はプライベートチャネルに切り換える。

「……聞こえてるか？」

『ザァァ……』

ノイズしか聞こえない。
俺の声があいつに届いているのかわからない。

「目を覚ませ！ボーデヴィッヒ！」

瞬間、敵が攻撃してきた。
激しく、そして素早く。
まるでボーデヴィッヒに声をかけるのを止めさせようとするように。

「お前言ってたよな！？どうして俺が強いのかって！」

激しい剣撃を受け流しながら、話しかけ続ける。

「俺は弱い！他人を守れないのが怖くて怖くて、だからがむしゃら

に戦ってるだけだ！」

『ザァァ…』

避けきれなかった斬撃が肩のアーマーを切り落とす。

「お前も怖いんだろ！？一人になるのが、暗闇にいるのが！」

『ザッ、ザァァ……』

「言ったはずだ！お前がそうしてほしいなら、俺が助けてやる！お前を一人になんかしない！！」

『ザザッ、…けて…ザザザッ』

「ボーデヴィッヒ！」

『ザッ…助けて！……』

ノイズの中に確実に声が聞こえた。

いつものボーデヴィッヒの冷静沈着なものではなく、助けを欲した小さな少女の声だった。

「任せろ！！」

そう答えて思いきり相手の武器を弾き、隙を作る。

「一夏！やれぇ！」

「うおおおお！！」

ザシュッ……！

右腕だけに部分展開された白式と、雪片弐型を持った一夏が黒いＩＳを切り裂く。

しかし寸前、相手が後方に回避行動をとり、致命傷は与えられなかった。

（まずい！）

そして、一夏に刀を降りかざし――

ドンッ…！

とっさに俺は横から一夏にタックルをし、場所を代わる。

同時に、俺の左肩に刀が降り下ろされた。

ミシッ！

骨が鈍い音をたてる。

絶対防御が発動し、腕が切り落とされることはないまでも、激痛が走る。

「ぐうう…！てめぇ！」

先程、雪片弐型がつけた裂け目をさらに朧火で切りつけ、広げる。

「ぎ、ぎ……ガ……」

黒いＩＳからボーデヴィッヒが半分出てくる。

しかし、まるでこの黒いやつが離さんと掴んでいるかのようにあと少しのところで止まっている。

「あっ……！」

ボーデヴィッヒと俺の目が合う。
助けてほしい、ここから抜け出したいと心の叫びが聞こえた。
俺はまだ動く右腕を少女に伸ばす。

「来い、ボーデヴィッヒ！」

気を失う限界で、ボーデヴィッヒも俺に向かって手を伸ばす。
あと少し、あともう少し！

「ラウラ！！！」

叫ぶのと同時に手を掴んだ。
そして思いきり引き抜く。
ラウラを自分の方に引き寄せ、抱き抱える。
力なく倒れるように、ラウラは俺の腕に収まった。

「あ…りが…と……う……」

ラウラは辛うじて聞き取れるほどの大きさで囁やいたあと、気を失った。

◇

「……最初からそのくらい素直でいろ」

「う…ん…？」

ここは？

「よぉ、気ぃ付いたか？」

左を向くと信が天井を見ながらベットに横たわっていた。
そういう自分もベットに横たわっているのだが。

「私……は……？」

「全身に無理な負荷がかかったことで筋肉疲労と全身打撲だとさ。
さっき織斑先生が言ってた」

「……お前は？」

「左肩脱臼。いや～、あのときは骨が折れたかと思ったぜ」

少年は楽しそうに笑っていた。

「何が…起きたのだ……？」

「重要案件である上に機密事項」

「……お前は知っているのか……？」

「……ヴァルキリー・トレース・システム、通称ＶＴシステム。機体の蓄積ダメージ、操縦者の精神状態、そして操縦者の願望。それ

らが揃ったときに発動するようにお前のＩＳに組み込まれていたんだと」

「……機密事項をそんなに簡単に話して――――」

ははっと笑い声をあげて、信は言葉を続ける。

「本人に秘密にしてどうすんだよ？」

「……」

「……確かに織斑先生は強いさ。でも、その強さは織斑先生だけのものだ。お前はあの強さを目指すことはできても、それになることはできない」

ぎゅぅっとシーツを握りしめる。

「すまない……」

「お前が謝らなきゃいけないやつは他にいるだろ？……さて、行くか」

信がベットから立ち上がる。

「あ、そうだ。もうひとつ。眼帯、とったほうがいいんじゃないか？少なくとも俺はその方が好きだな」

いつもは眼帯で隠れている金色の右目を指差し、ニコッと笑って、信は保健室を出ていった。

「す、好き……／／」

残されたのは軍人でも、ドイツの代表候補生でもなく、十五歳の恋する乙女だった。

◇

「おーっす…」

「あっ！信！」

「大丈夫なのか？」

俺《信》は食堂に来ていた。

先に食事をしていたシャルロットと一夏に声をかけ、同じテーブルに座る。

「余裕、余裕。まだ少し痛いけど、そのうち治るだろ」

二人とも俺の言葉に安心して、食事を続ける。

ここで、何故か視線を感じる。

「優勝…チャンス……消え……」

「交際……無効……」

「……うあああああんっ！」

バタバタと泣きながら走っていく女子たち。
……もしかして。

「なあ、トーナメントってどうなるんだ？――そうか、わかった」

「一人で話を進めるな。ああ、そうだよ。中止だってさ」

『トーナメント中止＝試合なし＝優勝とかない＝あの噂が無効に』ってことだな。
みんな張り切ってたのに残念だな。

「でもね、個人データを取るために一回戦は全部やるんだって」

シャルロットが補足説明を入れる。

「そっか。じゃあ俺は関係ないな。シードで二回戦から参加だし」

正直もう戦う気に慣れない。
怪我したし。
シード万歳、シードって素晴らしい。

「……」

「あ、ほら、一夏。あそこに箒がいるぞ」

「ん？本当だ……あっ！そうえば！」

思い出したか。
トーナメントは無くなったが、箒の告白はどうなるのだろうか。
まあ、答えは決まっているのだが。

一夏が箒に駆け寄り、口を開く。

「箒、先月の約束だが――」

ゴクリ。

他人なのに息を飲む俺。

「付き合ってもいいぞ」

「ほ、本当か？本当に、本当なのだな！？」

身長さなど構うものかと箒が一夏を締め上げる。

しばらくして、箒が冷静さを取り戻した。

「お、おほん！な、なぜだ？理由を聞こうではないか……」

ここ大事！

すごく大事だぞ、一夏！

早く箒を安心させてやってくれ！

「幼なじみの頼みだからな、付き合うさ」

「そうか！」

い、一夏…。

ついに、ついにか……。

俺はうれしい、うれしいぞ。

今日はパーティーだ！

「買い物くらい」

バカヤローー！
きっと目の前にちゃぶ台があったらひっくり返してただろう。（ノ－ｏ－）ノ┻

バキッ！

箒が一夏を殴る。
うん、俺もそんな気分だ。
気が合うな、箒。

「そんなことだろうと思ったわ！」

どげしっっ！！

うめく一夏のみぞおちにつま先がささる。
うわ、痛いなアレ…。
あんまり足を振り上げたので見てはいけないものが見えた。

「白か……」

「？どうしたの、信？」

「な、何でもないぞ！うん！し、しっかしあいつも鈍いよな～。普通すぐ気付くよな？」

「信には言われたくないと思うよ……」

何かシャルロットが言っていたが動揺を隠すために必死だった俺には聞こえなかった。

「あっ！織斑くん、真宮くん、デュノアくん！朗報ですよ！」

「何ですか、山田先生？」

「今日から素晴らしい場所が解禁になったんです！」

やけに引っ張るな。

「どこですか？」

「はい！男子の大浴場なんです！」

――――――

「ふいー。…いててて……」

山田先生のお言葉に甘えて、風呂に入ることになった、俺たち。
だがそこにはとてつもない問題がある。
『シャルロットどうすんの？』問題だ。
まさか三人一緒に入るなんて真似出来ないし、俺たちは考えた。
解決法として上がったのは『みんなバラバラに入ろう』というものだった。

『俺は二人に助けられたからな、最後でいいよ』

『僕はいつでもいいよ』

『俺もいつでもいいんだが……。まあ、最初に入るか』

という各々の意見を反映した結果、

1：信
2：シャルロット
3：一夏

となった。

「あー……。肩いてー……」

ザバァと湯船から立ち上がり、シャワーのところまで行き、髪を洗う。

スカッ…、スカッ、スカッ

「シャンプー切れてるじゃないか…」

カラカラ……

控えめに大浴場のドアが開く音がした。
誰か入ってきたらしい。
というか、一夏しかいないか。
どうしたんだろう？
まあ、ちょうどいい。

「悪いんだけどさ、シャンプー取ってくれ」

「……」

無言で手渡される。

「どうしたんだよ、一夏。シャルロットに変わってもらったのか？あいつ、優しいからなあ…」

わしゃわしゃと髪を洗いながら隣にいるであろう一夏に話しかける。

「男のふりなんかしなけりゃ、もっと可愛いのにな。今も充分可愛いけど」

「……」

「……違うぞ？男が好きとかそういうのじゃないからな。勘違いすんなよ？俺はシャルルを女の子として見た感想を述べているんだからな」

「……」

「一夏？」

さっきから様子が変だ。

一言も喋っていない。

キュッ、ザァァ…

シャンプーの泡を落とし、顔を上げようとすると――――

「本当に？」

「は？」

ギュッ…

突然横から抱きつかれた。

「！？！？」

「僕って可愛いかな？」

一夏の声じゃない。

それに一夏は『僕』なんて言わない。

もっといえば、俺の腕に柔らかい感触が当たっている。

「まさか…シャルロット？」

「なに？信？」

俺の目に飛び込んできたのは、薄手のスポーツタオル一枚を体に当てたシャルロットだった。

ギリギリ。

ギリギリだ、いろんな意味で。

「お、おまおまおま、おおお、ま、お前！」

「なに？」

「ど、どどど、どうしてだ！？」

「その、早くお風呂に入りたいなあって思って……」

「だ、だからってな！男と一緒に入るやつがあるか！」

「僕と一緒は嫌？」

「ひ、ひとつだけ言っておこう。こういうことは、大事なときのために取っておくもんだ」

「大事なときって？」

「じ、自分でかんがえろ！それより、早く離せ…！」

直に感じる胸の感触に耐えられない。

薄手のタオル一枚なんて、あるようで何も無いようなもんだ。

そうえば『裸の付き合い』なんて言葉があるが、この場合は意味合いがとらえようによっては非常にまずいものになる。

「待って。僕の話を聞いて？……僕ね、ここにいたい……。この学校でみんなと一緒にいたい…」

その声には切実な願いがこもっていて、長い間ひとりでずっと寂しい思いをしてきたことがよくわかった。

「……それなら、いればいいじゃないか。一夏も俺も、それにクラスのみんなも、お前と気持ちは一緒だ」

知らぬまにシャルロットと見つめあっていた。

その綺麗な瞳に思わず見入ってしまう。

「本当に？本当にそう思う？」

「ああ。ただもう少し、自分に正直でもいいんじゃないか？」

シャルロットは人に気を使いすぎる。

そこがいいところでもあるし、悪いところでもある。

「自分に正直、か……。うん。ありがとう、信」

「別にお礼を言われることのほどでもない。気にすんな」

「信って優しいね、すごく」

シャルロットが微笑み、俺も微笑み返すのだが、ここで状況を再度確認。

なんだかこのままだと大変なことになりそうなので、今度は俺の切実な願いを口に出す。

「と、ところでな、シャルロット？そろそろ離れてくれ」

「えっ？あ、ああっ、うんっ！そうだねっ！／／」

よかった、おとなしく離れてくれた。

シャルロットの顔は湯気でぼやけていたが、その中でも赤く染まっているのがわかった。

「じゃ、じゃあ俺が先に上がるからな、ごゆっくり」

のぼせたのかそれとも別な理由なのか、頭がくらくらしている状態で、辛うじて風呂から上がった。

―――――――――

それからシャルロットが上がってくるのを外で待ち、一緒に帰った。
『シャルロット、俺は全然気にしてないからな。別に気を使わなくていいぞ』というのをわからせるためだ。
また気を使わせるような雰囲気を出してしまったら、くつろげないだろう。
案の定、シャルロットは『しまった……』という感じだったので、不安を取り除こうと部屋に戻るまで他愛のない話をし続けた。
そのかいあってか、部屋につく頃にはお互いいつものように笑いあえる仲に回復していた。

「おやすみ、信」

「ああ、おやすみ」

そうして、波乱の一日が幕を閉じたのであった。

翌日――

「えーとですね……今日は転校生を紹介します」

「……」

ＩＳ学園、どんだけ広い心もってんだ？
そのうち転校生特別クラスとかできるかもな。

今度はどんなやつだ？
転校生が山田先生の横に立つ。

「シャルロット・デュノアです。みなさん、あらためてよろしくお願いします」

クラス全員の頭に『？？？』が浮かぶ。

「ええっと……デュノアくんはデュノアさん…ということでした」

え？
ええ？
えええええええ！！！

「デュノア君って女……？」

「おかしいと思った！美少年じゃなくて、美少女だったわけね」

「って、織斑くん！同室だから知らないってことは……」

クラスの目が一斉に一夏に向く。

「い、いや！？知らない、知らない！」

このとき初めて一人部屋であることを神に感謝したのだが、決定的にまずいことに気付いた女子がいた。

「ちょっと待って！昨日って確か、男子が大浴場使ったわよね！？」

ドキッ！

「あっ、信！そうえば昨日、一緒に風呂から帰って来たよな！」

いらんこと言うな！

今度は俺にみんなの視線が集まる。

「み、みみ、みんな！？なに考えてんだよ？ぐ、偶然シャルロットと帰りに一緒になったんだよ！なっ！シャルロット？」

なんとか平静を保ってシャルロットに話題をふったのだが……。

「……（ボッ）／／／」

なんで無言で顔を赤くするんだ！

そして、うつむくな！

なんだか俺まで恥ずかしくなるだろ！

「なっ、なんで！？なんで二人とも顔赤いの！？」

ギャーギャーギャー！

「お、落ち着け！みん――」

ドゴゴォォォン！！

「しーんー……」

「げっ、鈴！」

ドアを吹き飛ばして入ってきたのは『甲竜』を展開した鈴だった。

「死ね！！」

「なんで俺だ！？それはいち――」

「うるさーーーい！！！」

両肩の衝撃砲がフルパワーで開放される。

「うわぁぁーー！！！」

……あれ？

目を開けると、目の前で衝撃砲が止まっている。

「ＡＩＣ？なの…か？」

ということは……

「ラウラ！お前大丈夫――ッ！」

チュッ……

いきなり引き寄せられ、キスされた。

一瞬の判断で顔をずらし、直撃は防いだものの、頬にラウラの唇が当たる。

「なぜ避けるのだ……」

『残念で仕方がない』っておい！

「な、何やってんだよ、お前！」

クラス全員が口を大きく開いている。
すると声高らかにラウラがとんでもない宣言をした。

「お前は私の嫁にする！決定事項だ！異論は認めん！」

「「「えええええええ！！！」」」

俺がわかったのはただひとつ。
これから間違いなくめんどくさいことになる。

◇

ピッ、ピピッ、ピッ…ピッピピピピッ…

表示される膨大な情報を信じられない早さで処理する独りの女性。
薄暗い研究所のなかに入るのは、彼女ただ一人だった。

「ふぅーん……『稼働率　２５％』か……。まだ四分の一とはね～、本当にビックリだよ～」

彼女の口調には、驚きよりも喜びとか嬉しさの方が強く表れていた。

「本人は気付いているのかな？あっ！でも、こっちはわりと上手く使ってるね。『稼働率　２８％』か～」

ディスプレイに表示された新たな情報を眺め、すぐに処理する。

「二つとも『稼働率　１００％』になったらどうなるんだろ？う～ん、たーのしみー♪」

そう言ってにんまり笑う彼女は、とても不思議な格好をしていた。

空のように真っ青なブルーのワンピース。それはさながら童話『不思議の国のアリス』のアリスである。

エプロンと背中の大きなリボンが目を引く。

それ以上に目一（特に男の）を引くのは、今にもはち切れそうなぐらいまで引っ張られている白いブラウスの隙間から見える、豊満な胸の膨らみだ。

頭にはウサミミのカチューシャ。

端的に表現すると一人『不思議の国のアリス』状態。

「やっぱり、実物を見てみたいなっ♪それに――」

と、ここでどことなく和風テイストの着信音がなる。

それはずっと前から彼女が待っていたものであった。

「こ、この着信音は……！」

ピッ

「もすもす、終日？はぁーい！みんなのアイドル、篠ノ之（しののの）　束（たばね）だよ♪」

ブチッ！

電話こそ切れなかったが、何か血管が切れるような音が聞こえた気

がした。
何も言わないと今度こそ電話を切られる気がして、というかもう切りそうだったので、必死で相手をひき止める。

「わあ！待って待って！切らないで箒ちゃん！」

「……姉さん」

「やーやー、我が妹よ～。うんうん、用件はわかっているよ？欲しいんだよね～、君だけの専用機が」

束は電話の向こう側にいる箒に話しかけながら、後ろを振り向く。

「もちろん用意してあるよ。最高性能にして規格外、そして白と並び立つもの、その機体の名は――」

「紅椿（あかつばき）」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1074x/

IS ～world braker～

2011年11月22日04時19分発行